

平成 26 年度 ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

試掘調査

- 柴田遺跡（第 4 次調査）
- 足崎天神山遺跡（第 1 次調査）
- 下高井遺跡（第 5 次調査）
- 堀口遺跡（第 16 次調査）
- 堀口館跡（第 1 次調査）
- 小砂遺跡（第 4 次調査）
- 津田若宮遺跡（第 9・10 次調査）
- 枯松戸遺跡（第 4 次調査）
- 西並木下遺跡（第 1 次調査）
- 市毛上坪遺跡（第 14 次調査）
- 赤坂遺跡（第 2 次調査）
- 勝倉若宮遺跡（第 4 次調査）
- 市毛下坪遺跡（第 11 次調査）
- 田彦古墳群（第 1 次調査）
- 金上埜遺跡（第 8 次調査）
- 田彦西原遺跡（第 1 次調査）
- 平井遺跡（第 2 次調査）

本調査

- 堀口遺跡（第 15 次調査）

2015



堀口遺跡第 15 次調査区第 4 号住居跡



堀口遺跡第 15 次調査区第 2 号住居跡出土墨書土器「久(高)」



堀口遺跡第 15 次調査区第 3 号住居跡出土墨書土器「武田新」

序 文

ひたちなか市は、関東地方の北東部、那珂川の河口部左岸に位置しています。関東平野の北端にほど近く、阿武隈山系へとつながる那珂台地が市域の大半を占めており、また那珂川沿いは水田の広がる沖積低地であり、東側は太平洋に面し、その海岸には砂丘や磯が広がるなど、大変バラエティに富んだ景観を呈しています。

このように海・山・川がバランスよくそろった多様な自然環境に恵まれたひたちなか市域は、原始・古代から人々の生活の地として栄え、面積 99.07 km²の市域には合計約三百数十箇所へのぼる埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

このなかでも古墳時代の埴輪作りの村である馬渡埴輪製作遺跡や装飾壁画で知られる虎塚古墳は国の史跡指定を受け、市を代表する文化財として市民の誇りであるとともに、研究者等の注目も集めています。

また緑豊かな自然に恵まれたひたちなか市では人口も僅かながら増加を続けており、毎年活発な開発行為等が行われ、それに伴う発掘調査により多くの埋蔵文化財が出土しています。やむを得ぬ理由で失われていく文化財を少しでも後世に遺していくため、この市内遺跡発掘調査事業は、大きな意義を持っています。

今年度は、(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に委託し、市内 18 箇所の埋蔵文化財包蔵地内において調査を実施しました。専門性豊かな職員を擁する同公社の調査により、正確な記録保存が行われ、また出土した貴重な文化財がより有効に活用されるであろうと考えます。

最後になりますが、快く調査のご承諾をいただきました地権者や関係各位、また調査にご協力いただきました皆様に感謝申し上げますとともに、本報告書が郷土ひたちなか市の歴史について、新たな知見を加え、市民の皆さんが歴史に触れる縁となれば幸甚に存じます。

平成 27 年 3 月

ひたちなか市教育委員会
教育長 木下 正善

例 言

- 1 本書は、平成 26 年度国庫補助事業として、ひたちなか市教育委員会の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施したひたちなか市内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成 26 年 1 月から 12 月にかけて実施された発掘調査についての報告であり、柴田遺跡・足崎天神山遺跡・下高井遺跡・堀口遺跡・堀口館跡・小砂遺跡・津田若宮遺跡・枯松戸遺跡・西並木下遺跡・市毛上坪遺跡・赤坂遺跡・勝倉若宮遺跡・市毛下坪遺跡・田彦古墳群・金上埜遺跡・田彦西原遺跡・平井遺跡の計 17 遺跡について、17 件の試掘・確認調査を実施し、堀口遺跡の 1 件について本調査を実施した。調査期間は次のとおりである。
堀口遺跡 2 月 18 日～3 月 7 日 柴田遺跡 2 月 25 日～3 月 7 日 足崎天神山遺跡 3 月 11～12 日
下高井遺跡 4 月 15～24 日 堀口遺跡・堀口館跡 4 月 16～24 日 小砂遺跡 5 月 8～13 日
津田若宮遺跡 5 月 8～14 日、7 月 1～3 日 枯松戸遺跡 5 月 8～16 日 西並木下遺跡 5 月 20～23 日
市毛上坪遺跡 6 月 10～13 日 赤坂遺跡 6 月 10～17 日 勝倉若宮遺跡 6 月 25～7 月 11 日
市毛下坪遺跡 8 月 19～22 日 田彦古墳群 10 月 7～10 日 金上埜遺跡 11 月 11～14 日
田彦西原遺跡 11 月 28 日～12 月 2 日 平井遺跡 12 月 16～19 日
- 3 発掘調査および整理報告は、ひたちなか市教育委員会総務課文化財室の指導のもとに、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである。

理 事 長	永盛 啓司	
副 理 事 長	木下 正善	
常 務 理 事	鈴木 隆之 横須賀 重夫	
理 事	楨 和美 綱川 正 大和田 健 佐藤 良元 薄井 宏安 永井 喜隆 白土 利明	
監 事	住谷 勝男 安 智範	
評 議 員	初見 和親 川崎 敏雄 小林 学 清水 孝義 清水 実 牧野 恵美子 鈴木 幸男 中山 茂	
文 化 課 文化財調査 事 務 所	次 長 兼 課 長	合田 雅人
	副 参 事 兼 所 長	鈴木 素行
	課 長 補 佐	佐々木 義則
	係 長	稲田 健一
	嘱 託	菊池 順子 鈴鹿 八重子

- 4 発掘調査の従事者は次の通りである。
調査員：佐々木義則
調査補助員：石井雅志、海老原四郎、菊池順子、坪内治良、廣水一真、福原雅美、矢野徳也、渡辺恵子
- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。
石井雅志、稲田健一、海老原四郎、菊池順子、桐嶋美子、栗田昌幸、後藤みち子、佐々木義則、佐藤富美江、鈴鹿八重子、鈴木素行、坪内治良、西野陽子、廣水一真、福原雅美、矢野徳也、渡辺恵子
- 6 本書は、佐々木義則が編集した。
- 7 本書の執筆と分担は以下のとおりである。
栗田昌幸（調査経緯） 鈴木素行（弥生時代以前の遺物） 矢野徳也（岩石同定）
稲田健一（古墳時代の遺物） 佐々木義則（左記以外）
- 8 発掘調査の出土資料は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで一括保存している。
- 9 本書の作成にあたっては、次の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（50 音順・敬称略）
相田美樹男、宇田川進、打越建設有限会社、榎大輔、太田恒平（茨城県常陸大宮土木事務所）、大和田恵子、株式会社宮本冷機、川崎純徳、川崎真、神原仁、黒澤やゑ、黒住耐二、郡司日出男、後藤俊一、五味淵由利子、助川栄寿、住谷徳文、蓼沼知明、照沼ひて、照沼道男、埜淳子、平野肇、藤咲武夫、前嶋公夫、三木武夫、水沼美代、安紀美磨、渡辺富美子
- 10 事務局は、ひたちなか市教育委員会総務課文化財室内に置き、組織は次のとおりである。

総 務 課 文 化 財 室	課 長	岩崎 龍士
	文 化 財 室 長	小澤 功
	主 任	栗田 昌幸
	主 事	住谷 光男 栗原 久枝

目次

I 概要	1	III 本調査報告	36
II 試掘調査報告	3	1 堀口遺跡第15次調査報告	36
1 柴田遺跡	3	(1) 発掘調査の経緯 36 (2) 調査の経過 36	
(1) 過去の調査 3 (2) 第4次調査報告 3		(3) 住居跡 37 (4) 溝跡・ピット 45	
2 足崎天神山遺跡	10	IV 柴田遺跡における縄文時代中期	
(1) 第1次調査報告 10		「加曾利E式」の集落跡について(続)	47
3 下高井遺跡	11	1 はじめに	47
(1) 過去の調査 11 (2) 第5次調査報告 11		2 石光遺跡	47
4 堀口遺跡・堀口館跡	15	3 君ヶ台貝塚の形成	48
(1) 過去の調査 15		4 上ノ内貝塚の形成	50
(2) 堀口遺跡第16次・堀口館跡第1次調査報告 16		5 尼ヶ柵遺跡と金神遺跡	52
5 小砂遺跡	17	6 君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚の貝類	54
(1) 過去の調査 17 (2) 第4次調査報告 17		7 おわりに	56
6 津田若宮遺跡	18		
(1) 過去の調査 18 (2) 第9次調査報告 19		写真図版	
(3) 第10次調査報告 19		報告書抄録	
7 枯松戸遺跡	20	奥付	
(1) 過去の調査 20 (2) 第4次調査報告 20			
8 西並木下遺跡	21		
(1) 第1次調査報告 21			
9 市毛上坪遺跡	23		
(1) 過去の調査 23 (2) 第14次調査報告 23			
10 赤坂遺跡	23		
(1) 過去の調査 23 (2) 第2次調査報告 23			
11 勝倉若宮遺跡	24		
(1) 過去の調査 24 (2) 第4次調査報告 24			
12 市毛下坪遺跡	28		
(1) 過去の調査 28 (2) 第11次調査報告 28			
13 田彦古墳群	29		
(1) 過去の調査 29 (2) 第1次調査報告 30			
14 金上埜遺跡	30		
(1) 過去の調査 30 (2) 第8次調査報告 32			
15 田彦西原遺跡	33		
(1) 過去の調査 33 (2) 第1次調査報告 33			
16 平井遺跡	33		
(1) 過去の調査 33 (2) 第2次調査報告 34			

挿図目次

第1図 調査遺跡の位置	1
第2図 柴田遺跡の調査地点	3
第3図 柴田遺跡第4次調査区	3
第4図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(1)	4
第5図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(2)	5
第6図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(3)	6
第7図 動物形突起の参考資料	7
第8図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(4)	8
第9図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(5)	9
第10図 足崎天神山遺跡の調査地点	10
第11図 足崎天神山遺跡第1次調査区	11
第12図 下高井遺跡の調査地点	12
第13図 下高井遺跡第5次調査区	13
第14図 下高井遺跡第5次調査区出土遺物(1)	13
第15図 下高井遺跡第5次調査区出土遺物(2)	14
第16図 堀口遺跡の調査地点	15
第17図 堀口遺跡第16次・堀口館跡第1次調査区	16
第18図 堀口遺跡第16次・堀口館跡第1次調査区出土遺物	17
第19図 小砂遺跡の調査地点	17
第20図 小砂遺跡第4次調査区	18
第21図 津田若宮遺跡の調査地点	18
第22図 津田若宮遺跡第9次調査区	19

第 23 図	津田若宮遺跡第 10 次調査区	19
第 24 図	枯松戸遺跡の調査地点	20
第 25 図	枯松戸遺跡第 4 次調査区	20
第 26 図	西並木下遺跡の調査地点	21
第 27 図	西並木下遺跡第 1 次調査区	21
第 28 図	西並木下遺跡第 1 次調査区出土遺物	21
第 29 図	市毛上坪遺跡の調査地点	22
第 30 図	市毛上坪遺跡第 14 次調査区	22
第 31 図	市毛上坪遺跡第 14 次調査区出土遺物	23
第 32 図	赤坂遺跡の調査地点	24
第 33 図	赤坂遺跡第 2 次調査区	24
第 34 図	勝倉若宮遺跡の調査地点	24
第 35 図	勝倉若宮遺跡第 4 次調査区	25
第 36 図	勝倉若宮遺跡第 4 次調査区出土遺物 (1)	26
第 37 図	勝倉若宮遺跡第 4 次調査区出土遺物 (2)	26
第 38 図	市毛下坪遺跡の調査地点	27
第 39 図	市毛下坪遺跡第 11 次調査区	28
第 40 図	市毛下坪遺跡第 11 次調査区出土遺物	28
第 41 図	田彦古墳群の調査地点	29
第 42 図	田彦古墳群第 1 次調査区	29
第 43 図	金上埜遺跡の調査地点	30
第 44 図	金上埜遺跡第 8 次調査区	31
第 45 図	金上埜遺跡第 8 次調査区出土遺物	32
第 46 図	田彦西原遺跡の調査地点	32
第 47 図	田彦西原遺跡出土の有角石斧	32
第 48 図	田彦西原遺跡第 1 次調査区	33
第 49 図	平井遺跡の調査地点	34
第 50 図	平井遺跡第 2 次調査区	34
第 51 図	平井遺跡第 2 次調査区第 1 号住居跡	35
第 52 図	平井遺跡第 2 次調査区出土遺物	35
第 53 図	堀口遺跡の調査地点	36
第 54 図	堀口遺跡第 15 次調査区	37
第 55 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 1 号住居跡	38
第 56 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 1 号住居跡遺物出土状況	38
第 57 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 1 号住居跡出土遺物	38
第 58 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 2 号住居跡	39
第 59 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 2 号住居跡遺物出土状況	39
第 60 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 2 号住居跡出土遺物	40
第 61 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 3 号住居跡	41
第 62 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 3 号住居跡遺物出土状況	41
第 63 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 3 号住居跡出土遺物	42
第 64 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 4 号住居跡	44
第 65 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 4 号住居跡遺物出土状況	44
第 66 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 4 号住居跡出土遺物	45
第 67 図	堀口遺跡第 15 次調査区第 1 号溝跡およびピット	46
第 68 図	遺跡の位置	47
第 69 図	石光遺跡採集土器	48
第 70 図	君ヶ台貝塚第 6 次調査斜面貝塚出土土器	49
第 71 図	上ノ内貝塚 B 地点貝塚出土土器	50
第 72 図	尼ヶ柵遺跡第 2 次調査出土土器	51

第 73 図	尼ヶ柵遺跡採集土器	52
第 74 図	釜神遺跡 (「上の内貝塚下の水田中の遺跡」) 出土土器	53

表 目 次

第 1 表	平成 26 年市内遺跡発掘調査一覧	2
第 2 表	柴田遺跡調査一覧	3
第 3 表	下高井遺跡調査一覧	12
第 4 表	堀口遺跡調査一覧	16
第 5 表	小砂遺跡調査一覧	17
第 6 表	津田若宮遺跡調査一覧	18
第 7 表	枯松戸遺跡調査一覧	20
第 8 表	市毛上坪遺跡調査一覧	22
第 9 表	勝倉若宮遺跡調査一覧	24
第 10 表	市毛下坪遺跡調査一覧	27
第 11 表	金上埜遺跡調査一覧	30
第 12 表	君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚から検出された貝類	54
第 13 表	君ヶ台貝塚 4 号住居跡内貝層の貝類	55
第 14 表	遠原貝塚 J7 号住居跡内貝層の貝類	55
第 15 表	和田ノ上貝塚第 1 貝層の貝類	55

写 真 目 次

写真 1	遺構確認状況	37
写真 2	調査風景	37

写真図版目次

図版 1	試掘調査 (1)
図版 2	試掘調査 (2)
図版 3	試掘調査 (3), 本調査 (1)
図版 4	本調査 (2)

凡 例

- 遺構図及び遺物図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構図 1/60, 1/30
遺物図 1/4, 1/3, 4/5
- 遺構図の方位は磁北を使用している。
- 遺物図における断面の表現は、黒塗りが須恵器であることを示す。
- 図中の「K」は攪乱を示す。

I 概要

ひたちなか市は、茨城県の中央部に位置し、面積 99.07 km²、人口約 15 万 6 千人（平成 27 年 1 月末）を擁する地方中心都市である。市域南側を東流する那珂川は栃木県那須岳に源を発し、茨城県のほぼ中央部を東西に横断し太平洋へと注ぐ全長 150km の河川であり、古くから流域の文化形成に大きな役割を果たしてきた。本市は、この那珂川河口左岸域に位置する。市域は那珂川の支流である中丸川・大川・本郷川により開析され、小支谷が発達する。市域の北側を東流する新川付近の低地は、近世まで真崎浦という入り江であったが、現在は広く水田化され、東海村との境となっている。

現在市内には、約 300 か所以上の遺跡が所在する。市域では昭和 30 年ごろから都市化が進み、周知遺跡内

における個人住宅建設件数も増加の一途をたどり、そうした事態に対応すべく、昭和 54（1979）年から、国・県の補助を受け、市教育委員会を主体とした市内遺跡発掘調査事業を継続して実施してきた。市内遺跡発掘調査は市内各地で実施されてきたこともあり、市域の埋蔵文化財の全体的状況を知る上で、その調査の成果は貴重な資料となっている。

平成 20 年度から、市内遺跡発掘調査は市教育委員会から財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社（現公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社）に委託されるようになり、公社が主体となり実施されるようになった。本年度はその 7 年目となるが、17 か所の遺跡において、試掘調査 17 件・本調査 1 件が実施され、堀口遺跡における住居跡の調査や、柴田遺跡における縄文時代住居跡の確認等の成果を得ている。



第1表 平成26年市内遺跡発掘調査一覧

No.	遺跡名	調査回数	所在地	調査期間	調査種別	対象面積	調査面積	出土遺構	主な出土遺物
1	堀口遺跡	15次	堀口字新地163番1	2月18日～3月7日	本調査	131㎡	115㎡	住居跡4基(古墳2, 平安2), 溝1条(時期不明), ビット6基(時期不明)	土師器, 須恵器, 砥石, 鎌
2	柴田遺跡	4次	中根字柴田5184番3	2月25日～3月7日	試掘調査	495㎡	40㎡	住居跡2基(縄文中期1, 縄文後期1), 土坑4基(縄文時代)	縄文土器, 石器, 土製品
3	足崎天神山遺跡	1次	足崎字北根663番1, 667番の各一部	3月11日～12日	試掘調査	498㎡	28㎡	なし	なし
4	下高井遺跡	5次	三反田字下高井5009番1, 5021番1	4月15日～24日	試掘調査	1,787㎡	312㎡	住居跡50基(古墳～平安), 土坑28基(中世1基, 他は時期不明), 溝9条(時期不明), ビット20基(時期不明)	縄文土器, 砥石, 土師器, 須恵器, 瓦質土器, 内耳土器
5	堀口遺跡・堀口館跡	16次・1次	堀口字表坪127番1・3, 128番2・5・6・7, 264番5	4月16日～24日	試掘調査	770㎡	67㎡	住居跡1基(平安), 堀跡1条(時期不明)	土師器
6	小砂遺跡	4次	小砂町1丁目5番18・19・41	5月8日～13日	試掘調査	1,390㎡	187㎡	なし	なし
7	津田若宮遺跡	9次	津田字若宮3464番2	5月8日～14日	試掘調査	401㎡	48㎡	溝跡1条(時期不明), 道跡1条(時期不明)	土師器
8	枯松戸遺跡	4次	中根5277番1	5月8日～16日	試掘調査	367㎡	39㎡	なし	なし
9	西並木下遺跡	1次	馬渡字西並木下1131番14, 字孫根1132番8・9・10・11	5月20日～23日	試掘調査	4,167㎡	197㎡	なし	縄文土器
10	市毛上坪遺跡	14次	市毛字上坪1208番	6月10日～13日	試掘調査	100㎡	14㎡	住居跡1基(古墳), 土坑1基(時期不明)	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 近世陶器
11	赤坂遺跡	2次	赤坂12251番	6月10日～17日	試掘調査	234㎡	23㎡	なし	なし
12	勝倉若宮遺跡	4次	勝倉字地蔵根前2700番1・3, 2728番1・2・13・14・15・16	6月25日～7月11日	試掘調査	4,000㎡	263㎡	住居跡10基(古墳4, 奈良・平安6), 溝3条(時期不明), ビット1基(時期不明)	弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器
13	津田若宮遺跡	10次	津田字若宮3445番2	7月1日～3日	試掘調査	232㎡	27㎡	溝1条(時期不明), 土坑1基(時期不明)	なし
14	市毛下坪遺跡	11次	市毛字下坪416番3	8月19日～22日	試掘調査	908㎡	80㎡	住居跡4基(平安), 溝1条(時期不明)	土師器, 須恵器, 砥石
15	田彦古墳群	1次	田彦字後原650番1	10月7日～10日	試掘調査	999㎡	40㎡	なし	なし
16	金上高遺跡	8次	金上字高812番1, 勝倉字吹上2617番5	11月11日～14日	試掘調査	998㎡	29㎡	住居跡2基(奈良・平安1, 時期不明1), ビット9基(時期不明)	縄文土器, 土師器, 須恵器
17	田彦西原遺跡	1次	田彦字西原773番1・2・3	11月28日～12月2日	試掘調査	1000㎡	76㎡	なし	なし
18	平井遺跡	2次	金上字平井1010・1011番	12月16日～19日	試掘調査	1217㎡	53㎡	住居跡1基(縄文), 溝1条(時期不明)	縄文土器(前期), 土師器

Ⅱ 試掘調査報告

1 柴田遺跡

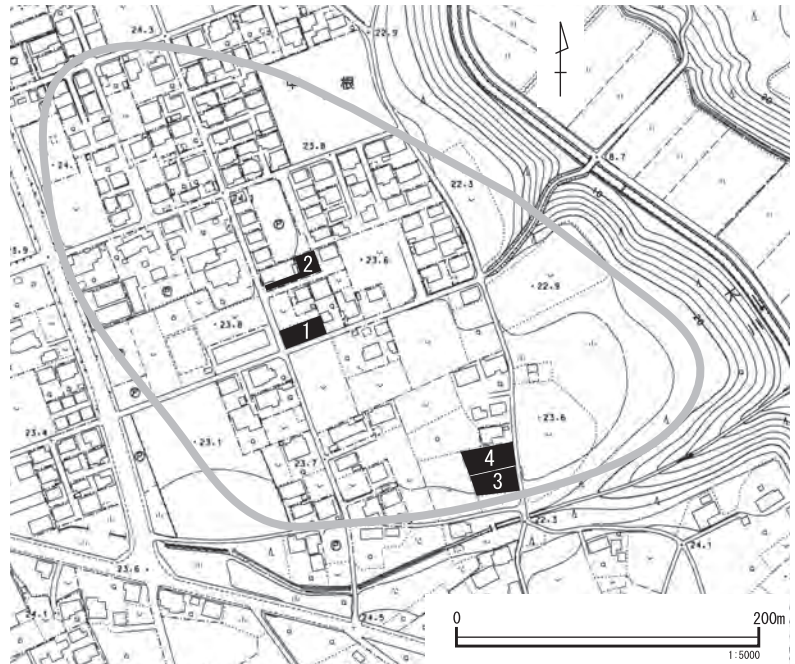
(1) 過去の調査

柴田遺跡においては、これまで3次の調査が実施され、縄文時代の住居跡が6基検出されている。調査は遺跡の中心部および南端部で実施され、そのいずれにも縄文時代の住居跡が検出されたことをみると、柴田遺跡では遺跡全面にわたって、かなりの密度で縄文時代の住居跡が展開しているものと考えられる。

(2) 第4次調査報告

調査経緯 中根字柴田 5184 番 3 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は柴田遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は2月25日～3月7日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、大川が流れる谷に臨む台地縁部から 150 m ほど離れた地点に位置する。調査地は平



第2図 柴田遺跡の調査地点

第2表 柴田遺跡調査一覧

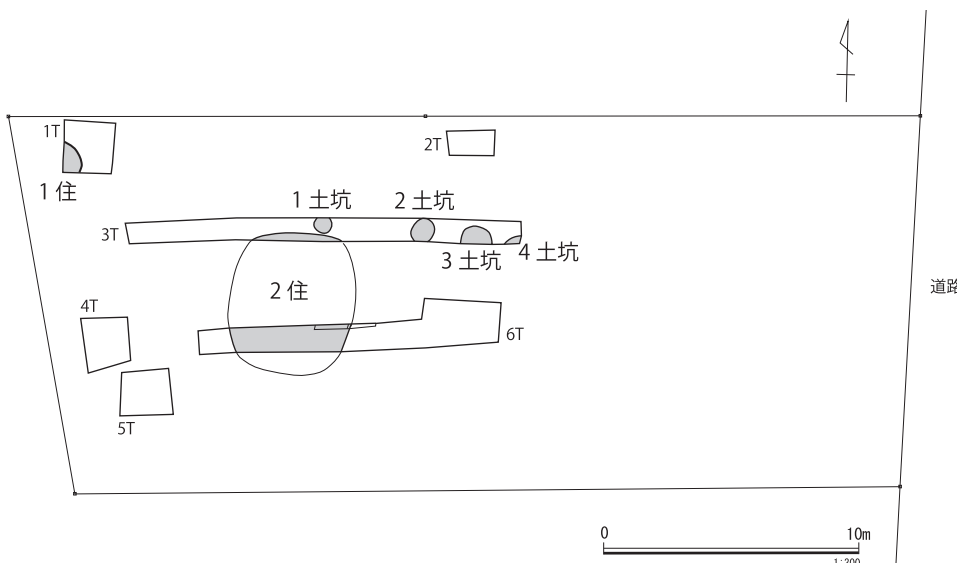
次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1982	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (縄文)	1
2	1986	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (縄文)	2
3	2013	公社	試掘	住居跡 3, 土坑 1	3

文献

- 1 昭和 57 年度市内遺跡発掘調査報告書 2 昭和 61 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

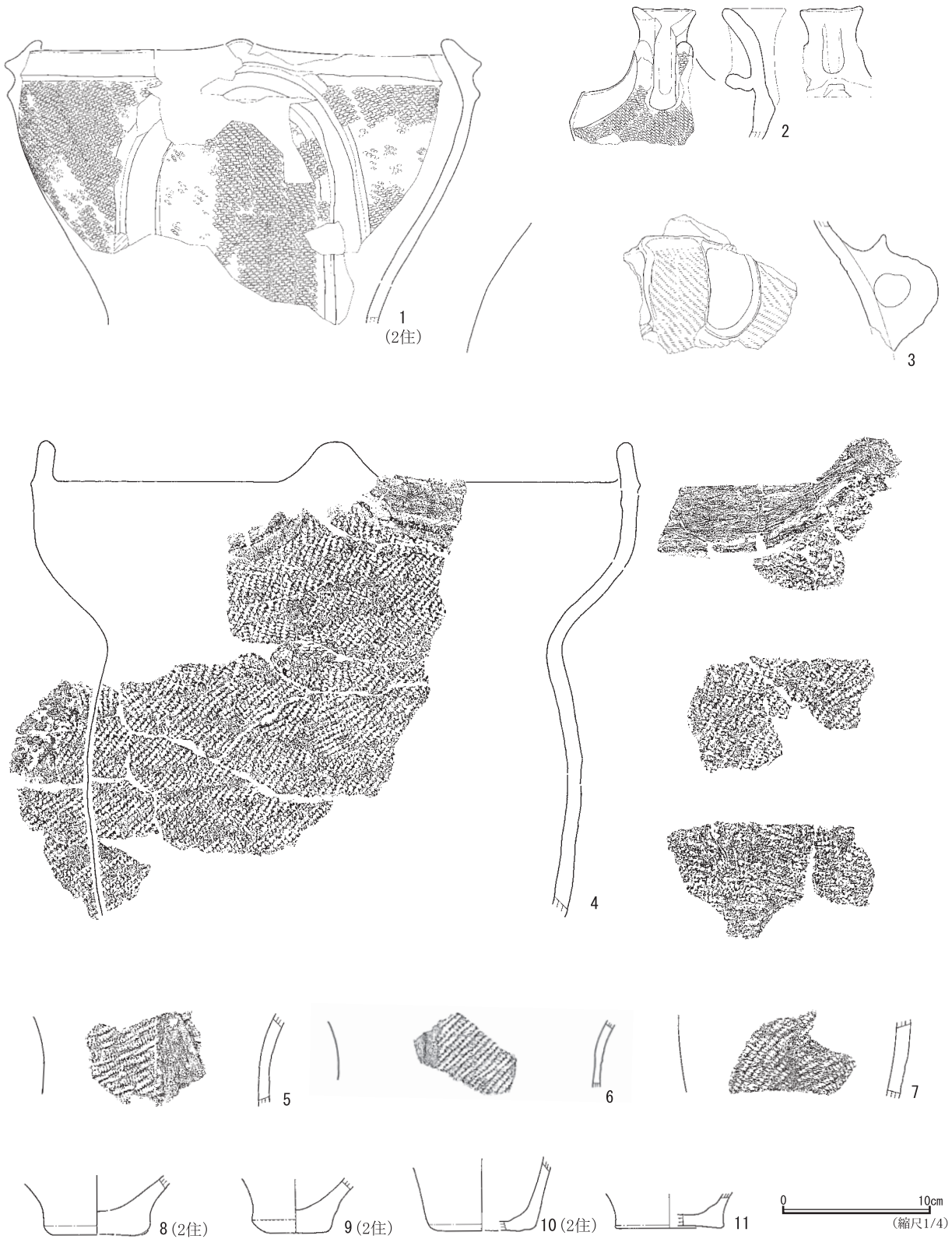
坦な地形を呈し、調査時は畑地であった。その南東部には、東方の谷から小さな谷が西方に入り込んでいる。

今回の調査は、6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 38～83 cm



第3図 柴田遺跡第4次調査区

を測る。調査の結果、住居跡 2 基 (1 住：縄文時代後期, 2 住：縄文時代中期), 土坑 4 基を確認した。土坑は、覆土が住居跡と似ているため、縄文時代の土坑と思われる。住居跡を一部掘り下げたところ、いずれの住居跡も確認面からの深さは 30 cm ほどであった。なおトレンチ表土より、コンテナ 2 箱分の縄文土器破片のほか、石錘・石斧・



第4図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物 (1)

土製円盤等が出土している。

遺物説明

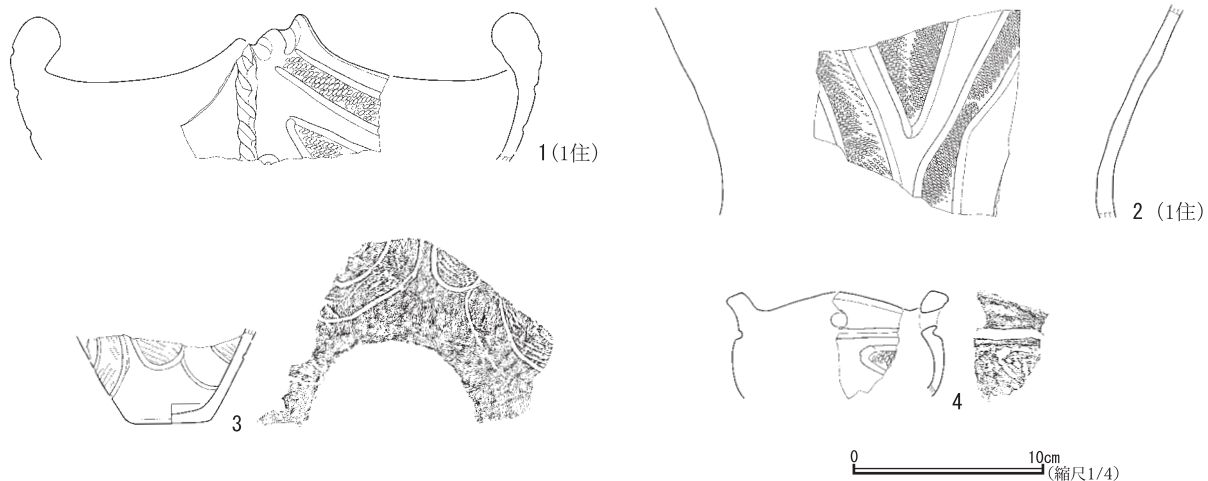
第4図

1 出土位置:2住 注記:2住 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)
器種:深鉢形土器 法量:口径290mm(残存率38%) 文様:隆起線

文,無節縄文(LR) 備考:器外面が脆弱で摩滅

2 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)
器種:深鉢形土器 法量:口径110mm(残存率23%) 文様:口縁部突起,隆起線文,単節縄文(LR) 備考:胎土に金雲母を少量含む

3 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E



第5図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(2)

4式) 器種: 把手付壺形土器(両耳壺) 法量: 最大径 290 mm (残存率 11%) 文様: 隆起線文, 無節縄文(L) 備考: 上端の破断面及びその付近に火熱による黒化が見られる

4 出土位置: 3トレ 注記: 3T 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 口径 412 mm (残存率 14%), 胴径 336 mm (残存率 23%) 文様: 隆起線文, 単節縄文(LR) 備考: 胴部最大径部分に成形の積上げ痕が観察される

5 出土位置: 5トレ 注記: 5T 時代時期: 縄文時代縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径 170 mm (残存率 16%) 文様: 隆起線文, 単節縄文(RL) 備考: 胎土に金(黒)雲母を多量含む, 器内面炭化物付着

6 出土位置: 6トレ 注記: 6T 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径 196 mm (残存率 12%) 文様: 隆起線文, 単節縄文(RL)

7 出土位置: 6トレ 注記: 6T 時代時期: 縄文時代中・後期 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径 158 mm (残存率 16%) 文様: 単節縄文(RL) 備考: 胎土に金(黒)雲母を多量含む

8 出土位置: 2住 注記: 2住 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 底径 70 mm (残存率 19%)

9 出土位置: 2住 注記: 2住 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 底径 54 mm (残存率 100%) 備考: 器外面にネズミの齧り痕あり

10 出土位置: 2住 注記: 2住 時代時期: 縄文時代中・後期 器種: 深鉢形土器 法量: 底径 74 mm (残存率 36%)

11 出土位置: 3トレ 注記: 3T 時代時期: 縄文時代中・後期 器種: 深鉢形土器 法量: 底径 72 mm (残存率 28%)

第5図

1 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代後期(称

名寺式) 器種: 深鉢形土器 法量: 口径 270 mm (残存率 13%) 文様: 沈線文, 単節縄文(LR), 隆帯, 隆帯上刻み(棒状) 備考: 器外面炭化物付着

2 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代後期(称名寺式) 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径 280 mm (残存率 16%) 文様: 沈線文, 単節縄文(LR)

3 出土位置: 1トレ 注記: 1T 時代時期: 縄文時代後期(称名寺式) 器種: 深鉢形土器 法量: 底径 45 mm (残存率 100%) 文様: 沈線文, 無節縄文(L)

4 出土位置: 3トレ 注記: 3T 時代時期: 縄文時代後期(称名寺式) 器種: 鉢形土器 法量: 口径 116 mm (残存率 10%), 胴径 112 mm (残存率 9%) 文様: 沈線文, 無節縄文(RL) 備考: 口縁部に焼成前の穿孔あり, 器外面炭化物付着

第6図

1 出土位置: 6トレ 注記: 6T 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 3式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆帯, 沈線文

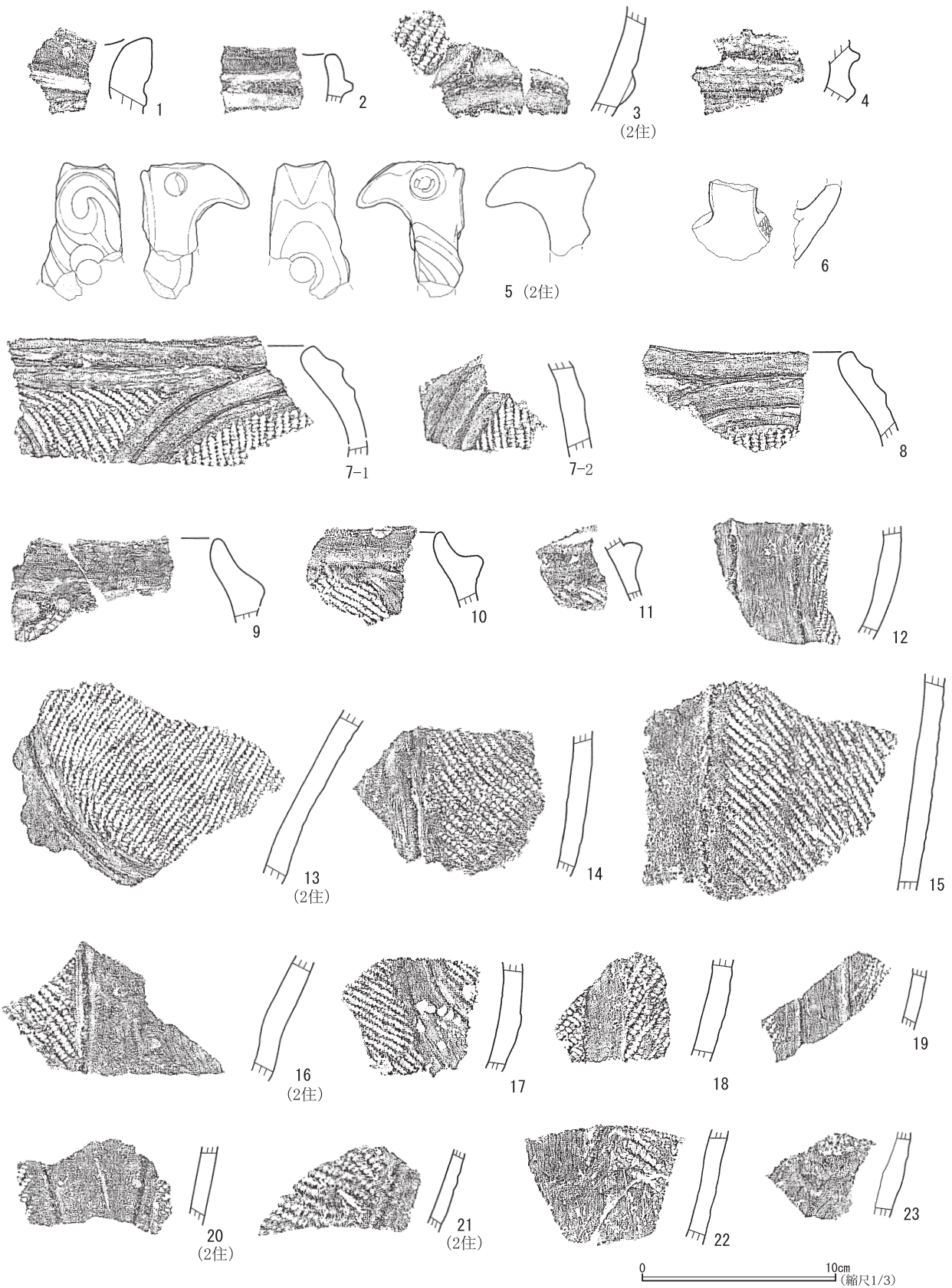
2 出土位置: 3トレ 注記: 3T 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 3式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆帯

3 出土位置: 2住覆土 注記: 2住フク土 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 3式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆帯, 沈線文, 単節縄文(LR) 備考: 胎土に金(黒)雲母を多量含む

4 出土位置: 6トレ 注記: 6T 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 3式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆帯

5 出土位置: 2住 注記: 2住 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器突起部分 文様: 隆帯 備考: 突起は動物形に造形されている, 焼成前の穿孔あり, 市内出土の動物形突起を第7図に掲載

6 出土位置: 6トレ 注記: 6T 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種: 把手部分 文様: 単節縄文(LR)



第6図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物 (3)

7 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)

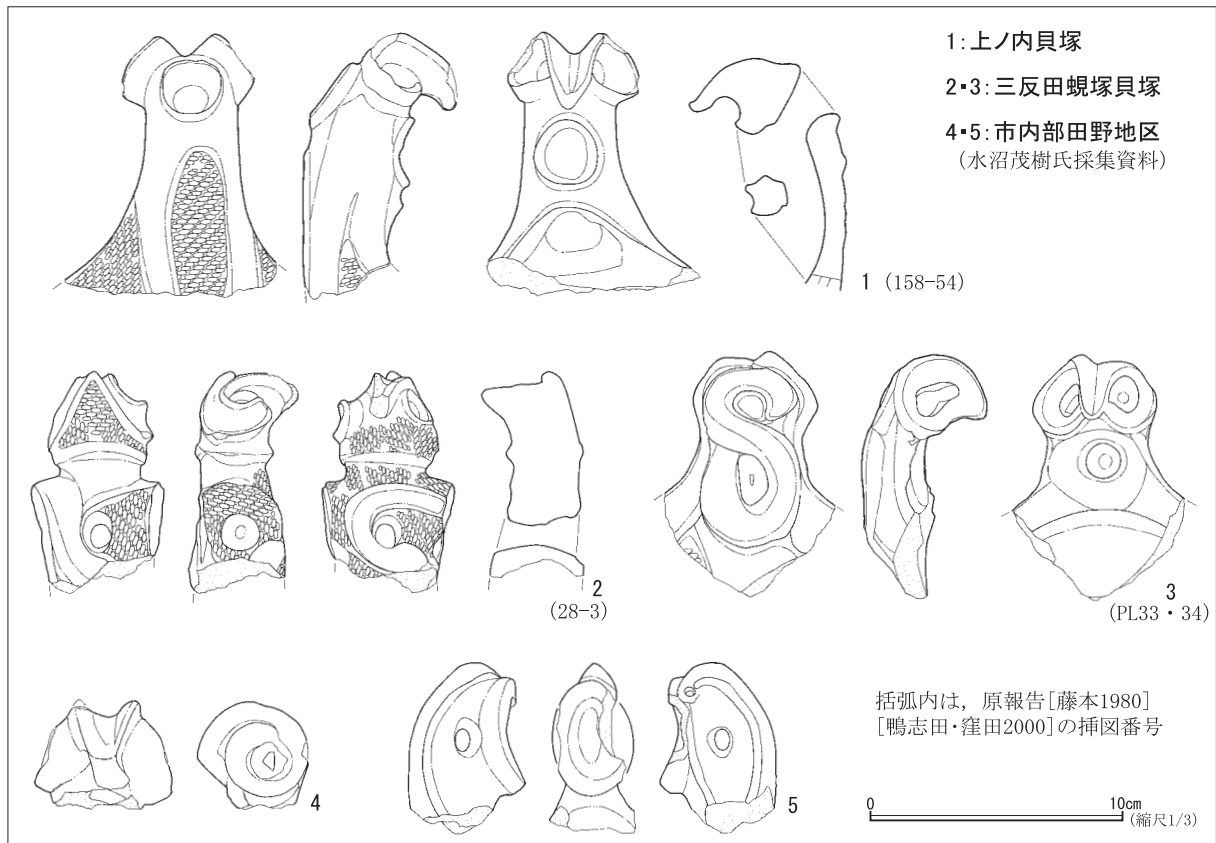
器種:深鉢形土器 文様:隆起線文, 単節縄文(RL)

器種:深鉢形土器 文様:隆起線文, 単節縄文(RL)

9 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)

8 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)

器種:深鉢形土器 文様:突起, 隆起線文, 単節縄文(RL) 備考:胎



第7図 動物形突起の参考資料

土に金(黒)雲母を多量に含む

10 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:突起,隆起線文,単節縄文(LR)

11 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:突起,隆起線文,無節縄文(R) 備考:

胎土に金(黒)雲母を多量に含む

12 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(RL) 備考:器内面炭化物附着

13 出土位置:2住 注記:2住 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(RL) 備考:胎土に白雲母を多量に含む

14 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR) 備考:胎土に金(黒)雲母を多量に含む

15 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR) 備考:胎土に金雲母を含む

16 出土位置:2住 注記:2住 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)

17 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E

4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)

18 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(RL) 備考:胎土に金(黒)雲母を多量に含む

19 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(RL)

20 出土位置:2住 注記:2住 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(RL) 備考:胎土に金(黒)雲母を多量に含む

21 出土位置:2住 注記:2住 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR) 備考:器内面炭化物附着

22 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)

23 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,縄文(原体不明) 備考:胎土に金(黒)雲母を多量に含む

第8図

1 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(RL) 備考:器内外面に

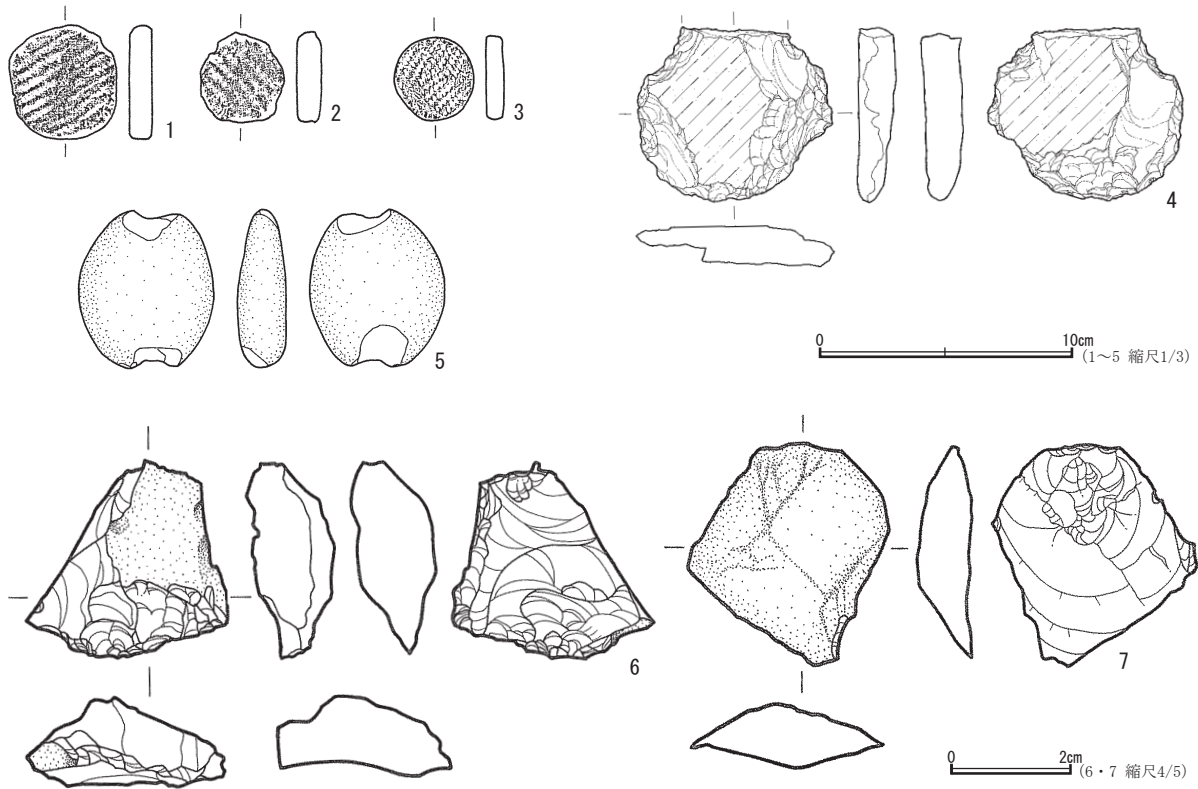
ネズミの齧り痕あり



第8図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(4)

2 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)
 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文, 単節繩文(LR) 備考:器外面炭
 化物付着

3 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曾利E 4式)
 器種:壺形土器 文様:隆起線文, 単節繩文(RL) 備考:器内面に発
 泡状の剥落あり



第9図 柴田遺跡第4次調査区出土遺物(5)

4 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曽利E 4式)

器種:深鉢形土器 文様:隆起線文, 単節縄文(LR)

5 出土位置:2住 注記:2住 時代時期:縄文時代中期(加曽利E 4式)

器種:深鉢形土器 文様:隆起線文, 単節縄文(RL) 備考:器内面炭化物付着

6 出土位置:4トレ 注記:4T 時代時期:縄文時代中期(加曽利E 4式)

器種:壺形土器か 文様:隆起線文, 縄文(原体不明)

7 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代中期(加曽利E 4式)

器種:深鉢形土器 文様:隆起線文, 沈線文, 単節縄文(RL) 備考:器外面にネズミの齧り痕あり

8 出土位置:4トレ 注記:4T 時代時期:縄文時代中期(加曽利E 4式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文(RL)

9 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代中期(加曽利E 4式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文(LR)

10 出土位置:5トレ 注記:5T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:波頂部口唇に刺突文, 沈線文, 単節縄文(LR)

11 出土位置:1トレ 注記:1T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

12 出土位置:5トレ 注記:5T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

13 出土位置:3トレ 注記:3T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

14 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文

15 出土位置:1トレ 注記:1T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

16 出土位置:2住覆土 注記:2住 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 文様:沈線文, 単節縄文(LR), 隆帯, 隆帯上刻み(棒状)

17 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

18 出土位置:1トレ 注記:1T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

19 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 文様:沈線文, 単節縄文(LR)

20 出土位置:1トレ 注記:1T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

21 出土位置:1トレ 注記:1T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(LR)

22 出土位置:5トレ 注記:5T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(RL)

23 出土位置:5トレ 注記:5T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(RL)

24 出土位置:6トレ 注記:6T 時代時期:縄文時代後期(称名寺式)

- 器種：深鉢形土器 文様：沈線文，縄文（LR）
- 25 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：縄文時代後期（称名寺式）
器種：深鉢形土器 文様：沈線文，縄文（LR）
- 26 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：縄文時代後期（称名寺式）
文様：沈線文，単節縄文（LR），隆帯，隆帯上刻み（棒状） 備考：器内面炭化物付着，器外面にネズミの齧り痕あり
- 27 出土位置：1住覆土 注記：1住フク土 時代時期：縄文時代後期（称名寺式） 文様：沈線文，単節縄文（LR），刺突文
- 28 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：縄文時代後期（称名寺式）
器種：深鉢形土器 文様：押し引き沈線文，縄文（LR） 備考：器外面にネズミの齧り痕あり
- 29 出土位置：2住 注記：2住 時代時期：縄文時代後期（称名寺式）
器種：深鉢形土器 法量：胴径102mm（残存率14%） 文様：沈線文，沈線内刺突文，縄文（LR）
- 30 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：縄文時代中・後期 文様：条線文
- 31 出土位置：2住覆土 注記：2住フク土 時代時期：縄文時代中・後期 文様：条線文
- 32 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器 文様：無節縄文（L）
- 33 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器 文様：単節縄文（RL） 備考：胎土に金（黒）雲母を多量に含む
- 34 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器 文様：無節縄文（L），結節文 備考：器内外面にネズミの齧り痕あり
- 35 出土位置：2住覆土 注記：2住フク土 時代時期：縄文時代中・後期 文様：単節縄文（RL） 備考：器内面炭化物付着
- 36 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器 文様：単節縄文（LR）か

第9図

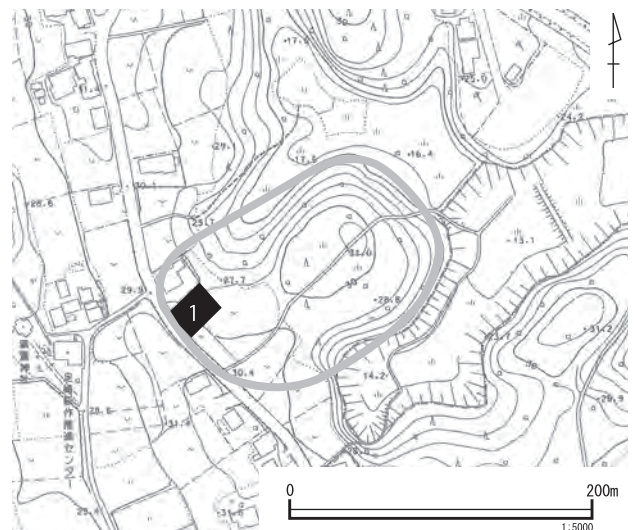
- 1 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：土製円盤 法量：長さ45mm，幅42mm，厚さ9mm 重量：24.5g 備考：矢印範囲は破断面の凸凹が消えた磨痕の範囲，土器の文様は単節縄文（RL）
- 2 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：土製円盤 法量：長さ35mm，幅33mm，厚さ10mm 重量：12.3g 備考：破断面の磨痕はごく部分的，土器の文様は単節縄文（LR）
- 3 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：土製円盤 法量：長さ33mm，幅31mm，厚さ7mm 重量：9.3g 備考：

- 破断面のほぼ全体に研磨痕が残る，土器の文様は単節縄文（LR）
- 4 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：打製石斧（分銅形） 石材：ホルンフェルス 法量：長さ65mm，幅76mm，厚さ14mm 重量：95.6g 備考：ほぼ半分を欠損
- 5 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：礫石錘 石材：砂岩 法量：長さ61mm，幅53mm，厚さ19mm 重量：83.5g
- 6 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：縄文時代中・後期 器種：楔形石器 石材：メノウ 法量：長さ32mm，幅33mm，厚さ13mm 重量：13.1g
- 7 出土位置：2住覆土 注記：2住フク土 時代時期：縄文時代中期か 器種：剥片 石材：チャート 法量：長さ37mm，幅32mm，厚さ11mm 重量：12g

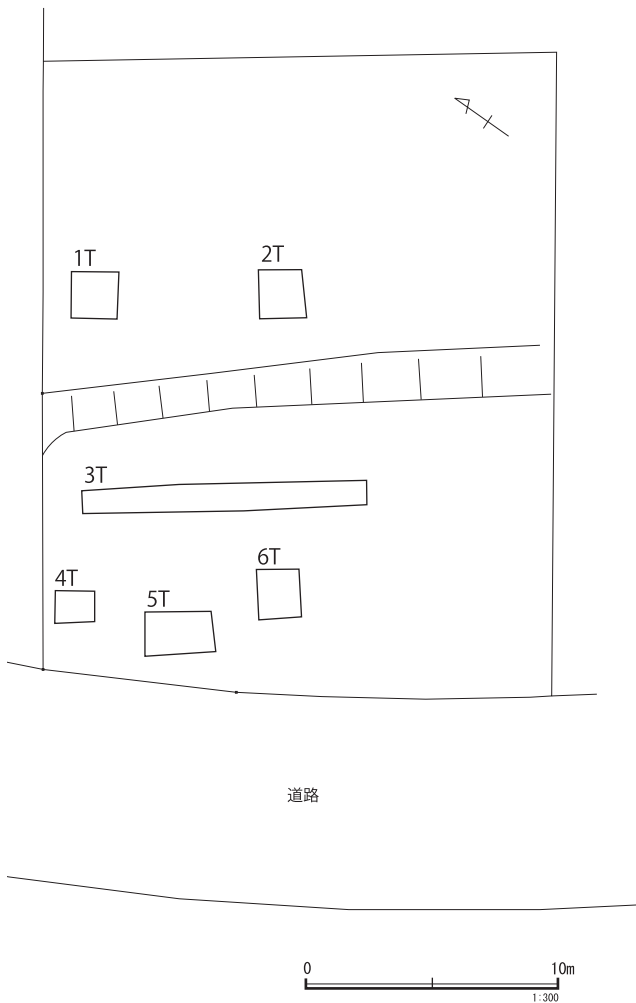
2 足崎天神山遺跡

(1) 第1次調査報告

調査経緯 足崎字北根663番1ほかに所在する土地について，埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は足崎天神山遺跡の範囲内に当たっており，現地踏査したところ確認調査に必要な土地であったため，教育委員会は建築・土木工事を行なう際は，事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため，茨城県教育委員会にそれを進達するとともに，試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は3月11日～12日にかけて行われた。



第10図 足崎天神山遺跡の調査地点



第 11 図 足崎天神山遺跡第 1 次調査区

調査結果 調査地は、新川上流域の支谷に臨む台地縁辺部から 350 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は篠藪であった。調査区東方は林地となっており、そこに北から南に入り込む浅い谷地形が認められる。調査は篠藪を刈り払ったのち、調査対象地内に 6 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ～ 0.7 m を測る。調査の結果、第 6 トレンチで大きな倒木痕が検出されたのみで、遺構・遺物は確認されなかった。

3 下高井遺跡

(1) 過去の調査

下高井遺跡においては、これまで 4 回の調査が実施され、古墳時代から平安時代にかけての住居跡が 278 基（古墳時代 146 基、奈良・平安 102 基、時期不明 30 基）調査されている。特に茨城県教育財団によって北関東自動車道部分で大規模に実施された 3 次調査区では、方

形周溝墓 4 基や古墳時代の鍛冶工房跡 5 基も存在していた。なお 1 次調査区では、中世の土坑墓が 2 基調査されていることからみて、今回調査の中世土坑も土坑墓になるのかもしれない。

(2) 第 5 次調査報告

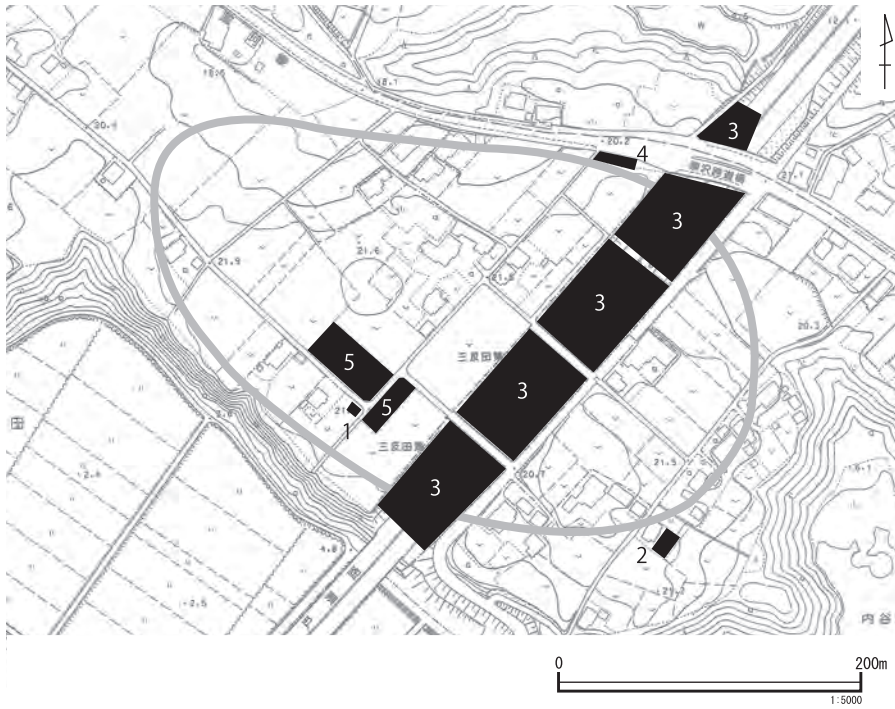
調査経緯 三反田字下高井 5009 番 1,5021 番 1 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は下高井遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い宅地造成に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 4 月 15 日～ 24 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川に臨む台地縁辺部から 50 m ほど離れた地点に位置する。調査地は平坦な地形を呈し、調査時は畑地であった。今回の調査は、14 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.7 m を測る。調査の結果、住居跡 50 基（古墳時代～平安時代）、土坑 28 基（中世 1 基、時期不明 27 基）、溝 9 条（時期不明）、ピット 20 基（時期不明）が検出された。住居跡はすべてのトレンチで確認されており、当遺跡の遺構密度の濃さがかかる。各住居跡それぞれの所属時期は不明であるが、トレンチ出土土器からみて、古墳時代から平安時代にかけての住居跡と考えられる。遺物からみると、とくに古墳時代中期から後期の住居跡を主体とするものであろう。土坑・溝・ピットの時期は多くは不明であるが、第 12 号土坑から中世の火鉢や土鍋が出土しており、今回の調査区に隣接する第 1 次調査区から中世土坑墓が見つまっていることからみて、第 12 号土坑は土坑墓なのかもしれない。なお第 6 号土坑は出土遺物はないが、中・近世遺跡で見られることの多い、粘土貼り土坑と思われる。

出土遺物は、土師器や須恵器のほか、トレンチ表土からは少量の縄文土器破片や敲石なども出土している。

遺物説明

第 14 図



第12図 下高井遺跡の調査地点

第3表 下高井遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1985	勝田市教委	本調査	住居跡2 (古墳後期), 土坑墓2 (中世), 土坑2	1
2	1991	勝田市教委	本調査	住居跡5 (古墳中期1, 古墳後期1, 奈良1, 不明2)	2
3	1993～1995	県教育財団	本調査	住居跡266 (古墳141, 奈良・平安98, 不明27), 鍛冶工房5 (古墳), 掘立2 (奈良・平安), 方形周溝墓4 ほか	3
4	1994	市教委	本調査	住居跡5 (古墳中期1, 奈良2, 平安1, 不明1)	4

文献

- 1 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書 2 平成3年度市内遺跡発掘調査報告書
 3 一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書IV
 4 平成6年度市内遺跡発掘調査報告書

1 台帳 38・39・40 住 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部70%, 杯部・裾部は欠損 法量:器高(11.5) 色調:外面橙色, 内面赤褐色 胎土:礫(白少, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ・ヘラミガキ。内面上位ヘラナデ, 下位ヨコナデ 使用痕:- 備考:-

2 台帳 11T34 住 材質:土師器 器種:手づくね土器 残存:ほぼ完形 法量:口径9.0, 器高5.2~6.7, 底径6.0 色調:外面橙~黒褐色, 内面橙~黄褐色 胎土:小石(白微), 礫(白少, 透少), 粒(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ユビナデ, ヘラナデ, 底面は中央がくぼむ。輪積み痕がみられる。内面ヘラナデ。 使用痕:口縁部端部の一部が欠損している。 備考:-

3 台帳:11T34 住 材質:土師器 器種:手づくね土器 残存:口縁

部10%以下, 体部30% 法量:口径(8.2), 器高(6.0) 色調:外面鈍い黄色~黒褐色, 内面鈍い黄褐色 胎土:礫(白少, 半透少), 粒(白多, 半透多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ユビナデ・ヘラナデ, 輪積痕がみられる。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:外面器面が摩滅している。

4 台帳:12T38・39・40 住 材質:土師器 器種:甕 残存:甕 残存:底部100% 法量:器高(4.2), 底径6.5 色調:外面暗赤褐色, 内面鈍い赤褐色 胎土:礫(白少), 粒(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ。内面ヘラナデ 使用痕:- 備考:-

5 台帳:6T22 住 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(20.0), 器高(12.0) 色調:浅黄橙~鈍い橙色 胎土:

礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰多, 黒少, 赤少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

6 台帳:14TSK11 材質:土師器 器種:椀 残存:底部40%(高台部15%) 法量:高台径(8.7) 色調:素地明褐色, 表面褐色 胎土:礫(白褐色, 透, 灰少) 黒雲母微量 技法等:-

7 台帳:11T32 住 材質:土師器 器種:球状土錘 法量:長2.4, 幅3.8, 重量51.9g 色調:明褐色, 橙褐色 胎土:細砂

8 台帳:11TSK12 材質:瓦質土器 器種:火鉢 残存:口縁部片 色調:外側黒灰色, 内面灰色・明灰色, 断面灰色 胎土:白雲母 技法等:外面印花文。内外面ヨコナデ。

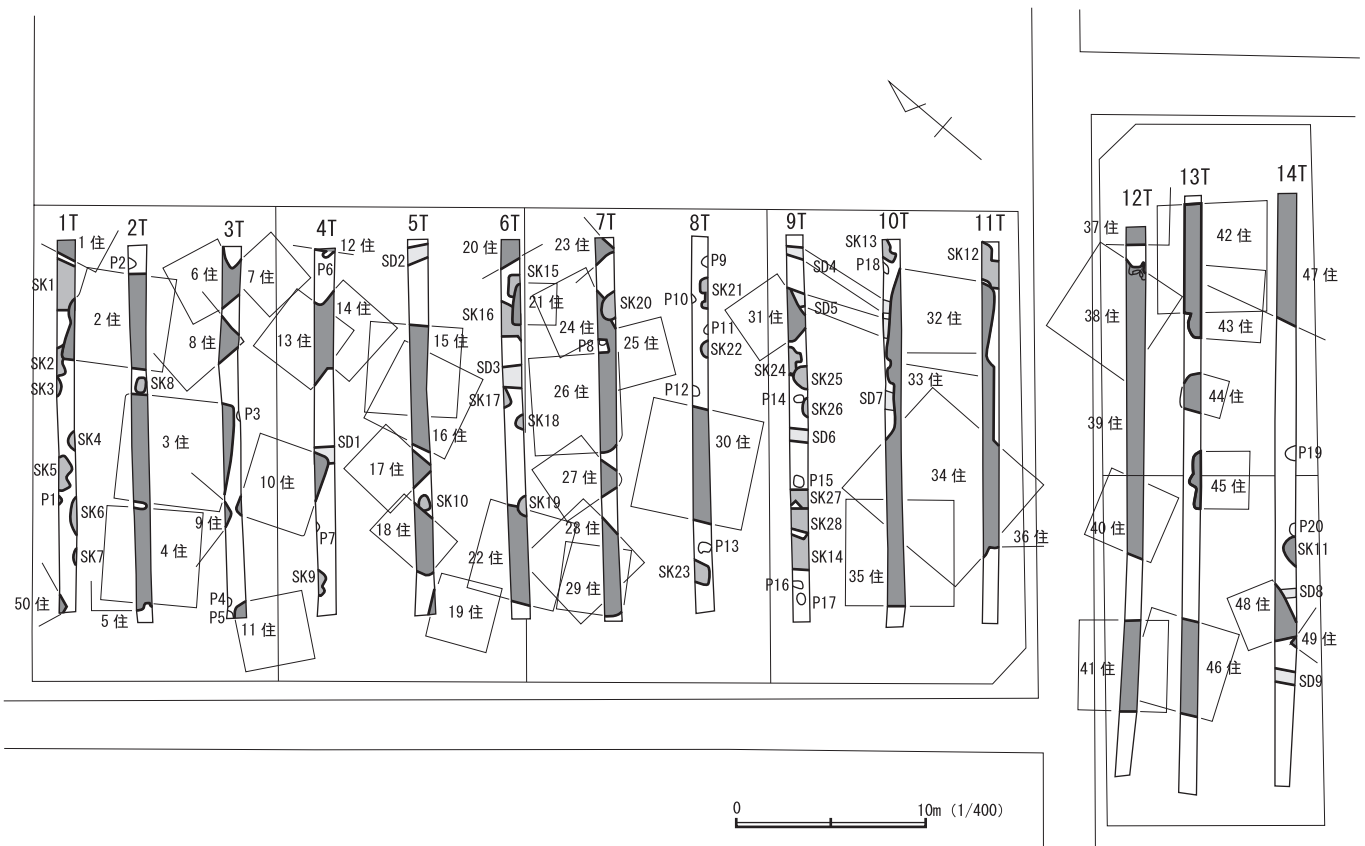
9 台帳:11TSK12 材質:土師質土器 器種:内耳鍋 残存:口縁部10% 法量:口径(31.8) 色調:外面黒色。内面茶色, 下半部暗褐色 胎土:細砂, 白雲母細片 技法等:外面浅い指頭圧痕。外面煤ける。内面横方向ナデ。

10 台帳:10T32 住 材質:石(砂岩) 器種:敲石 残存:大きく欠失 法量:長10.9, 幅5.8, 厚5.1, 重量430.4g 技法等:2カ所の敲打痕(A, B)を有する。敲打痕Bは小さなやや深い敲打痕が集合したものである。敲打痕Aは浅い。

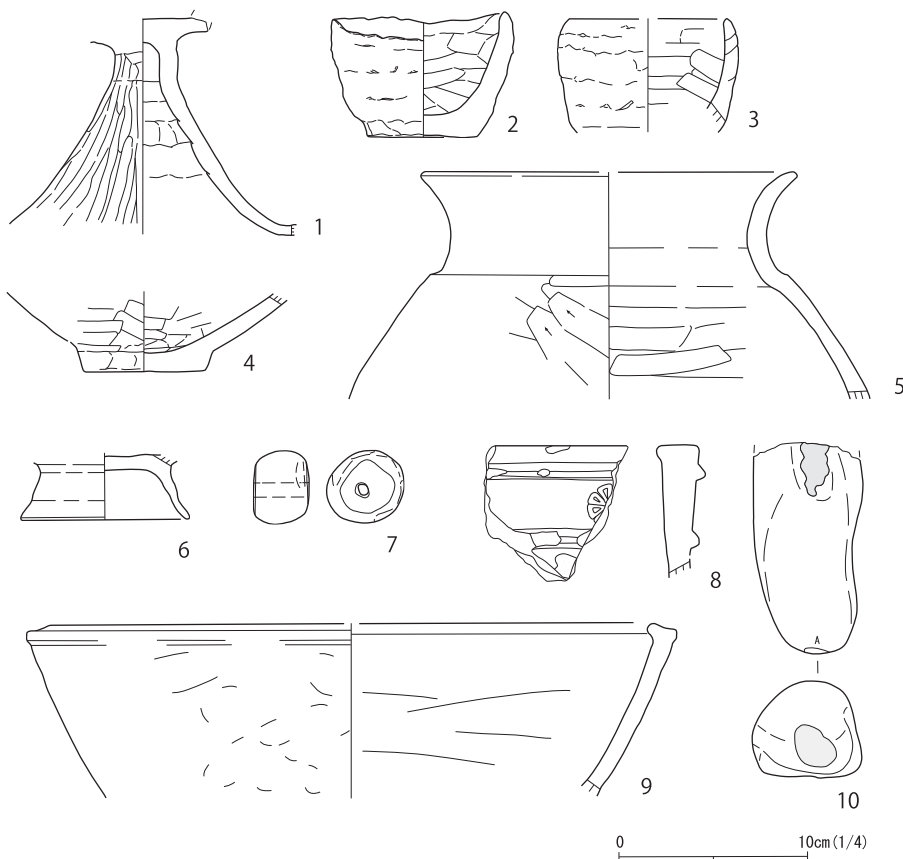
第15図

1 出土位置:5トレ15・16 住 注記:5T15・16 住 時代時期:縄文時代早期(燃糸文系)

2 出土位置:12トレ 注記:12T一括 時代時期:縄文時代早期(燃糸文系) 文様:単節縄文(RL)もしくは無節縄文(R)



第13図 下高井遺跡第5次調査区



第14図 下高井遺跡第5次調査区出土遺物(1)

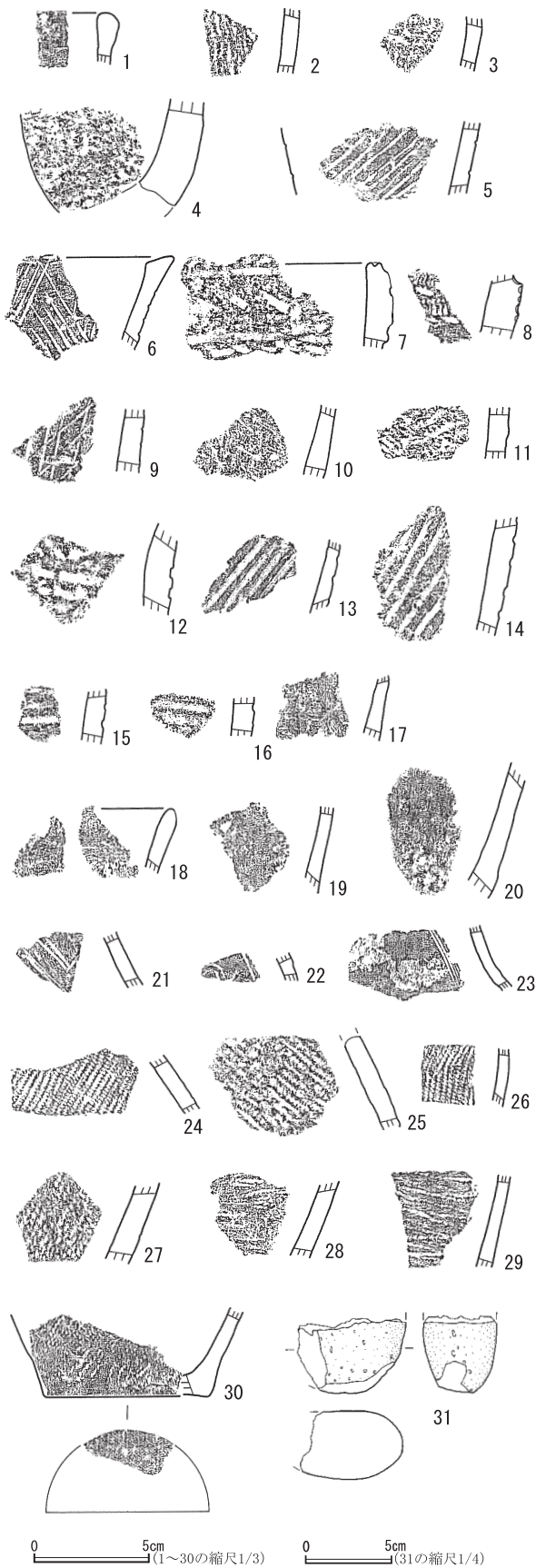
3 出土位置：10トレ 注記：10T一括 時代時期：縄文時代早期（「天矢場式」か）備考：胎土に石英もしくは長石の白色粒子が多量，銀（白）雲母を含む，器外面に削りによる擦痕，4と同一個体か

4 出土位置：10トレ 注記：10T一括 時代時期：縄文時代早期（「天矢場式」か）器種：深鉢形土器 法量：最大径80mm（残存率24%）備考：胎土に石英もしくは長石の白色粒子が多量，銀（白）雲母を含む，器外面に削りによる擦痕，3と同一個体か

5 出土位置：9トレ表土 注記：9T表土 時代時期：縄文時代縄文時代早期（田戸下層式）器種：深鉢形土器 法量：最大径86mm（残存率17%）文様：沈線文 備考：胎土に繊維を少量含む，6と同一個体か

6 出土位置：11トレ33住 注記：11T33住 時代時期：縄文時代縄文時代早期（田戸下層式）器種：深鉢形土器 文様：沈線文 備考：胎土に繊維を少量含む，5と同一個体か

7 出土位置：12トレ41・46住 注記：



第15図 下高井遺跡第5次調査区出土遺物(2)

12T41・46住 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 器種：深鉢形土器 文様：口唇部刻み、沈線文

- 8 出土位置：6トレSK16 注記：6 TSK16 時代時期：縄文時代縄文時代早期(「明神裏Ⅲ式」) 文様：押引文(ペン先状施文具、半截竹管)、刺切文
- 9 出土位置：10トレ 注記：10T一括 時代時期：縄文時代早期(田戸下層式) 文様：沈線文(格子状)
- 10 出土位置：5トレ表土 注記：5T表土 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：沈線文もしくは条痕文
- 11 出土位置：2トレ表土 注記：2T表土 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：沈線文もしくは条痕文
- 12 出土位置：3トレ6・7住 注記：3T6・7住 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：沈線文、刺突状の施文
- 13 出土位置：8トレ30住 注記：8T30住 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：太沈線文
- 14 出土位置：6トレ表土 注記：6T表土 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：太沈線文
- 15 出土位置：8トレ30住 注記：8T30住 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：太沈線文
- 16 出土位置：13トレ46住 注記：13T46住 時代時期：縄文時代縄文時代早期(田戸下層式) 文様：太沈線文
- 17 出土位置：6トレ表土 注記：6T表土 時代時期：縄文時代縄文時代早期 備考：口縁部付近、胎土に繊維を少量含むか
- 18 出土位置：1トレ1住 注記：1T1住 時代時期：縄文時代縄文時代早期 備考：器内面にネズミの齧り痕あり
- 19 出土位置：12トレ38・39・40住 注記：12 T38・39・40住 時代時期：縄文時代縄文時代早期 備考：器外面にネズミの齧り痕あり
- 20 出土位置：9トレSD6 注記：9 T SD6 時代時期：縄文時代縄文時代早期
- 21 出土位置：11トレ33住 注記：11T33住 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 文様：平行沈線文(半截竹管状)
- 22 出土位置：13トレ46住 注記：13T46住 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 文様：平行沈線文(半截竹管)
- 23 出土位置：13トレ 注記：13T一括 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器 文様：櫛描文(櫛歯4本以上)
- 24 出土位置：13トレ44住 注記：13T44住 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器 文様：単節縄文(LR)
- 25 出土位置：12トレ38・39・40住 注記：12T38・39・40住 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器 文様：単節縄文(LR) 備考：器内面剥落あり
- 26 出土位置：13トレ42・43住 注記：13T42・43住 時代時期：弥生時代中期 文様：単節縄文(LR)
- 27 出土位置：11トレ34住 注記：11T34住 時代時期：弥生時代

中期 文様：付加条縄文(LR+R) 備考：器外面炭化物(煤状)付着

28 出土位置：3トレ3住 注記：3T3住 時代時期：弥生時代中期

文様：付加条縄文(RL×Rカ) 備考：胎土に雲母を微量含む

29 出土位置：9トレ表土 注記：9T表土 時代時期：弥生時代中期

文様：付加条縄文(R-S) 備考：器外面炭化物(煤状)付着

30 出土位置：12トレ38・39・40住 注記：12 T38・39・40住 時代時期：弥生時代中期 法量：底径72mm(残存率20%) 文様：付加条縄文(LR+R), 底面布目痕 備考：器内面変色

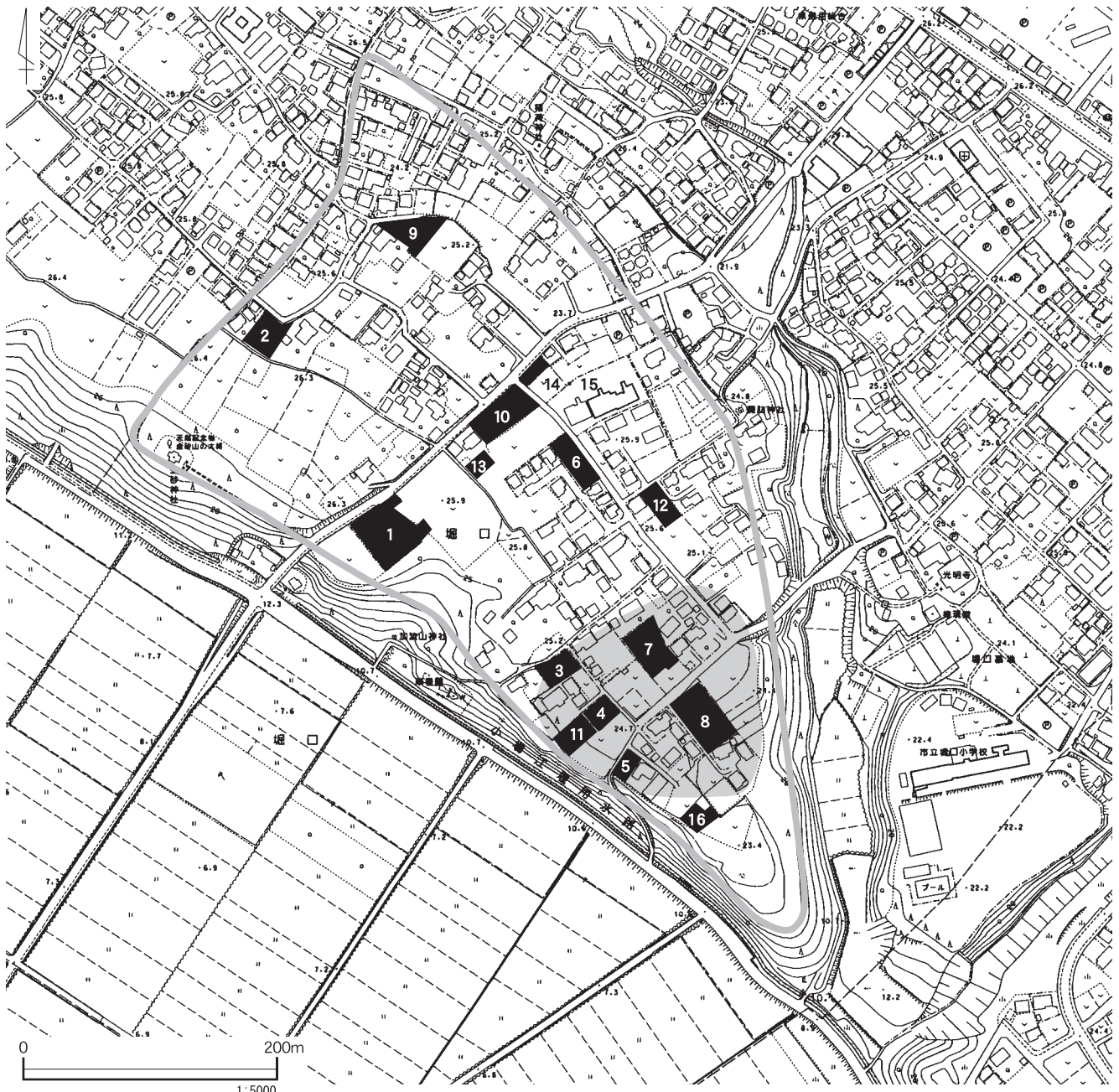
31 出土位置：14トレSD9 注記：14TSD9 時代時期：縄文時代 器種：磨石・敲石? 石材：安山岩 法量：長さ44mm, 幅63mm, 厚さ42mm 重量：155.2g 備考：破断面のほとんどが摩滅しているため, 下端の剥離が敲打痕であるのか確実でない。

4 堀口遺跡・堀口館跡

(1) 過去の調査

堀口遺跡においては、これまで14次に及ぶ調査が実施され、84基におよぶ住居跡が確認されている。住居跡数を時期別にみると、弥生3基(中期1, 後期2), 古墳32基(前期3, 中期13, 後期5, 不明11), 奈良・平安26基(奈良7, 平安16, 不明3), 時期不明21基となり、古墳時代中期と平安時代の住居跡が多い。とくに平安時代の住居跡は西方の台地内部にも広く展開し、遺跡全体に存在するようである。

堀口館跡は、堀口遺跡の南東部に重複して所在する遺



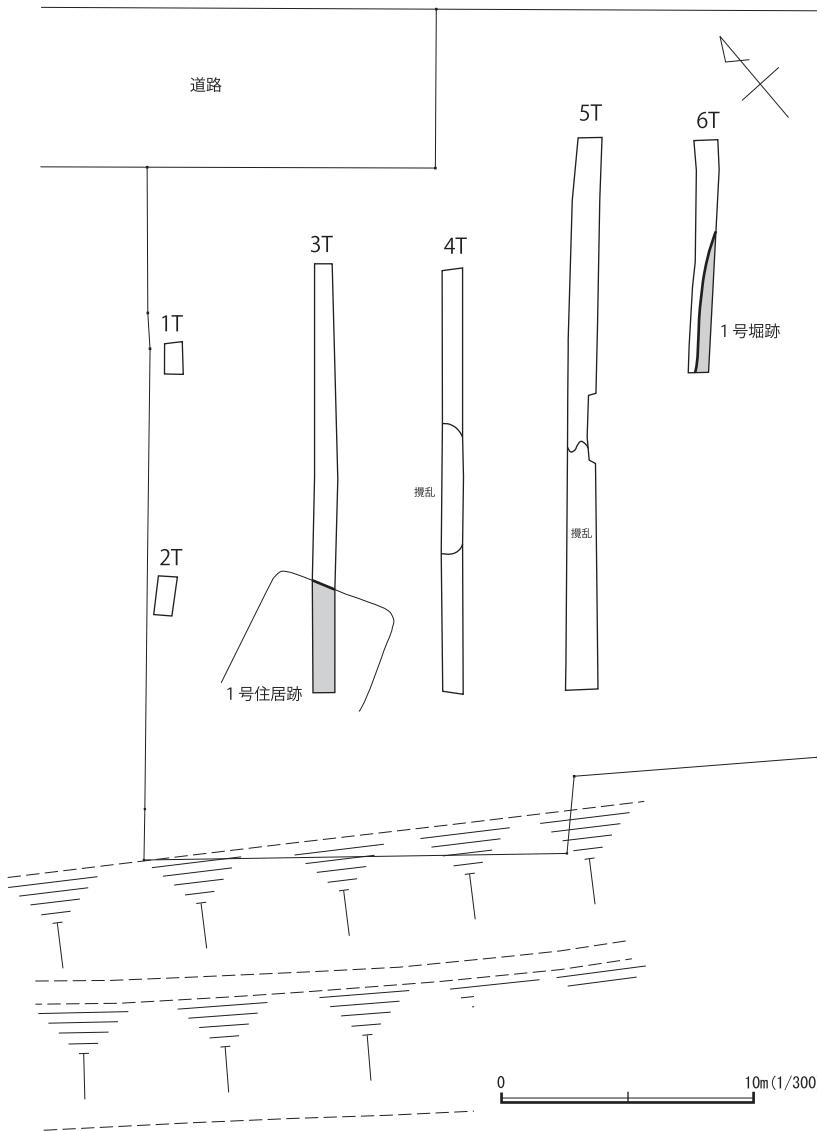
第16図 堀口遺跡の調査地点(トーン部が堀口館跡の範囲)

第4表 堀口遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1979	勝田市教委	本調査	住居跡 17 (十王台 1, 古墳中期 3, 古墳後期 2, 奈良 4, 平安 3, 時期不明 4)	1
2	1979	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (平安)	2
3	1983	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (古墳中期 1, 古墳後期 1, 平安 1)	3
4	1984	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳 1, 時期不明 1)	4
5	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 4 (古墳中期 1, 平安 2, 時期不明 1)	5
6	1992	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳中期 1, 奈良 1)	6
7	1993	勝田市教委	本調査	住居跡 8 (十王台 1, 古墳中期 4, 古墳後期 1, 平安 2)	7
8	1996	市教委	本調査	住居跡 6 (古墳前期 2, 古墳中期 2, 奈良 1, 平安 1)	8
9	2006	市教委	試掘	なし	9
10	2007	市教委	本調査	住居跡 7 (古墳前期 1, 古墳後期 1, 奈良 1, 平安 4)	10
11	2008	公社	試掘	住居跡 2 (奈良・平安 1, 時期不明 1), 溝 1	11
12	2009	公社	試掘	住居跡 25 (弥生中期 1, 古墳 8, 奈良・平安 2, 時期不明 14), 土坑 3 (古墳 2, 時期不明 1), 溝 1	11
13	2013	公社	試掘	住居跡 2 (古墳)	12
14	2013	公社	試掘	住居跡 2 (古墳中期 1, 平安 1), 溝 2 (時期不明)	12
15	2014	公社	本調査	住居跡 4 (古墳中期 1, 古墳後期 1, 平安 2), 溝 1	13

文献

- 1 茨城県勝田市堀口遺跡発掘調査報告書
- 2 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 54 年度)
- 3 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 58 年度)
- 4 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 59 年度)
- 5 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 60 年度)
- 6 平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 5 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 8 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 10 堀口遺跡発掘調査報告書
- 11 平成 20 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 12 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 13 本報告書



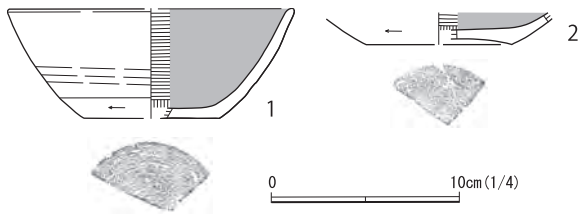
第 17 図 堀口遺跡第 16 次・堀口館跡第 1 次調査区

跡である。堀口館跡の範囲内では、過去に堀口遺跡としての調査が 6 度ほど実施されているが、中世の遺構・遺物は確認されていないため、堀口館跡の実態の再検討が必要であろう。

(2) 堀口遺跡第 16 次・堀口館跡第 1 次調査報告

調査経緯 堀口字表坪 127 番 1 外 6 筆に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は堀口遺跡及び堀口館跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 4 月 16 日～24 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川を望む台地



第18図 堀口遺跡第16次・堀口館跡第1次調査区出土遺物

縁辺部に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。

今回の調査は、6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2～0.5mを測る。調査の結果、平安時代の住居跡1基、時期不明の堀跡1条を確認した。1号住居跡の覆土からは土師器杯が出土した。1号堀跡は、6トレンチ南西端部を一部掘り込んでみたところ、遺構の壁が斜めに落ち込んでいく様子が確認され、規模の大きな遺構になるのではないかと予想されたため、堀跡と考えた。堀跡からの出土遺物はない。堀口館跡では過去の調査において中世と考えられる遺構は見つかっていない。もし今回の堀跡が館跡に関わる遺構ならば、館跡是那珂川低地と那珂川から延びる小支谷に挟まれた台地の先端部付近に立地している可能性があるろう。

なお、調査地は攪乱が多く入り、3トレンチの遺構確認面ではキャタピラー痕も見られたため、調査地は全体的に重機による削平を受けていると考えられる。

遺物説明

第18図

- 1 台帳：1住 材質：土師器 器種：杯 残存：底部30% 法量：底径(7.7) 色調：外面褐色、一部黒色。内面黒色 胎土：砂(暗灰少、透) 技法等：底・体部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ(底1方向)・黒色処理。
- 2 台帳：1住 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(15.0)、器高5.8、底径(7.2) 色調：外面橙褐色・口縁部部分的に黒色、内面黒色 胎土：礫(灰少、白少)、砂(白褐、灰、透) 技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ(底1方向)・黒色処理。

5 小砂遺跡

(1) 過去の調査

小砂遺跡においては、これまでに3次の調査が実施されているが、住居跡は未検出であり、遺構の密度はか

なり薄いと考えられる。

(2) 第4次調査報告

調査経緯 小砂町1丁目5番18,19,41に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は小砂遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行った。これに従い宅地造成に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は5月8日～13日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、中丸川に臨む台地縁辺部から



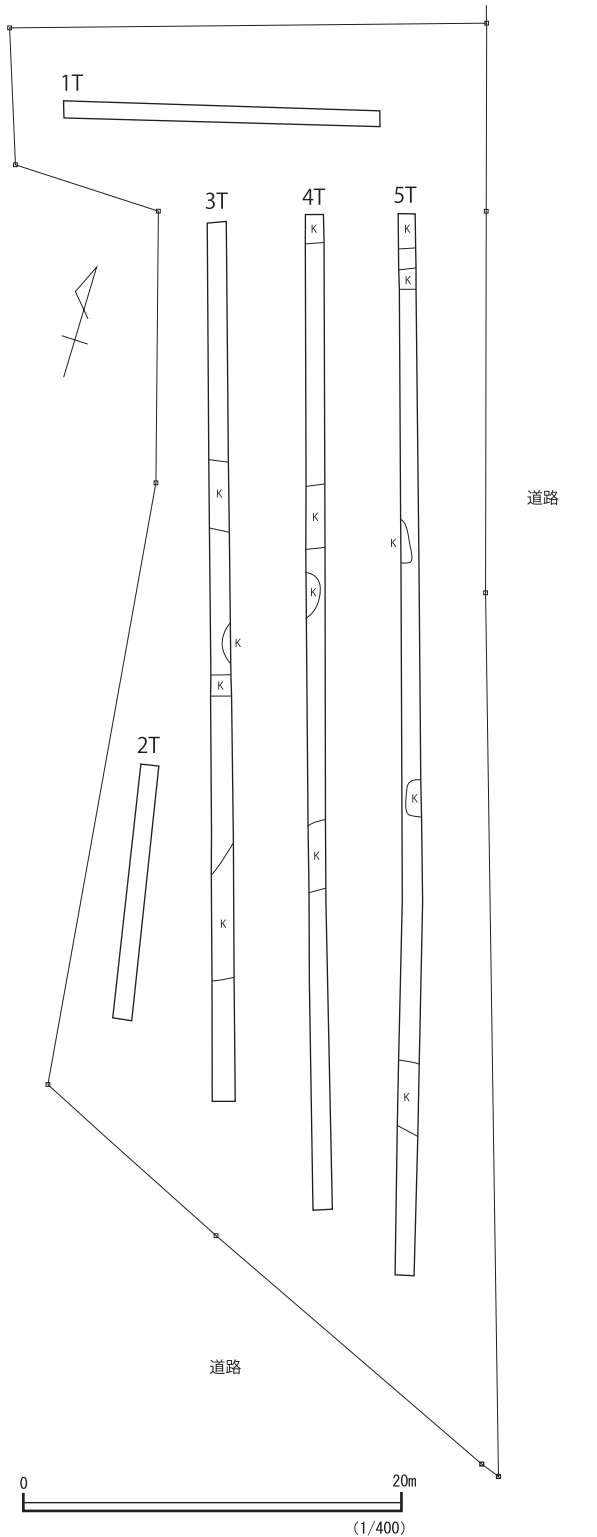
第19図 小砂遺跡の調査地点

第5表 小砂遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1991	勝田市教委	試掘	なし	
2	2009	公社	試掘	溝1(時期不明)	1
3	2012	公社	試掘	なし	2

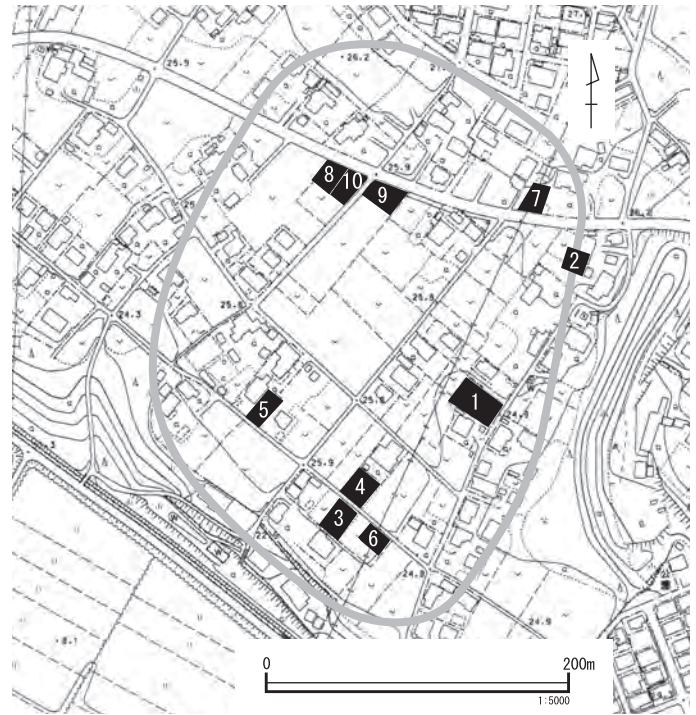
文献

- 1 平成21年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
2 平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第20図 小砂遺跡第4次調査区

200 mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は、5か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.7 mを測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。



第21図 津田若宮遺跡の調査地点

第6表 津田若宮遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1981	勝田市教委	本調査	住居跡2 (古墳前期1, 奈良1), 土坑墓2 (江戸)	1
2	1982	勝田市教委	本調査	住居跡1 (古墳前期1)	1
3	1983	勝田市教委	本調査	住居跡3 (古墳中期1, 古墳後期1, 時期不明1), 土坑1 (弥生中期1)	2
4	1985	勝田市教委	本調査	住居跡2 (縄文1, 古墳前期1)	3
5	1993	勝田市教委	試掘調査	なし	4
6	1997	市教委	本調査	住居跡4 (縄文中期1, 時期不明3)	5
7	2001	市教委	本調査	住居跡2 (古墳前期1, 時期不明1)	6
8	2011	公社	試掘	掘立1 (時期不明)	7

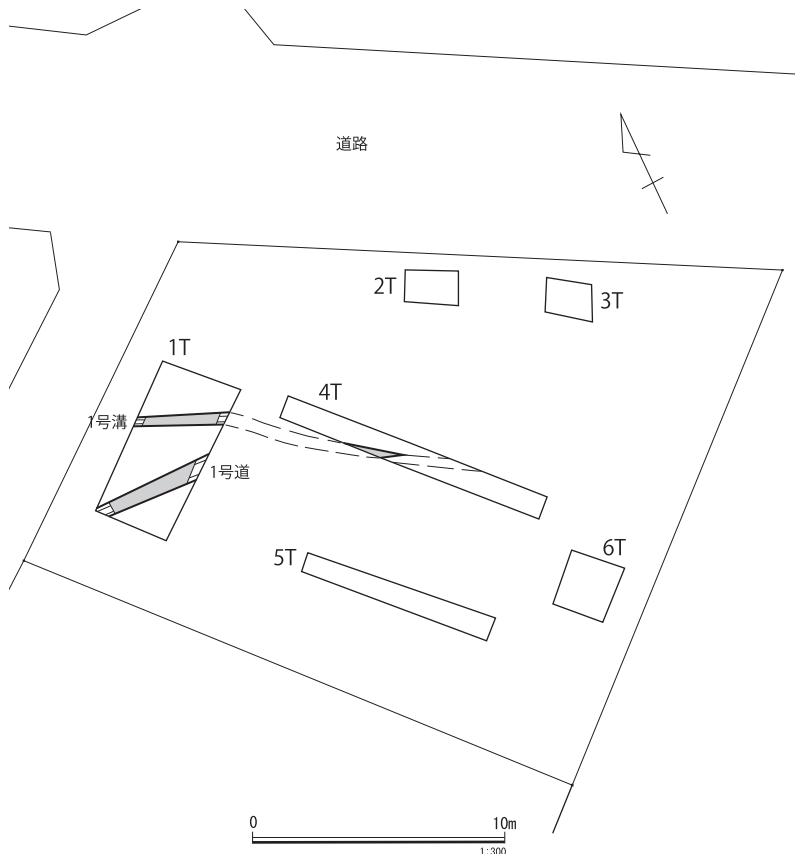
文献

- 1 昭和56年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和58年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成5年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 津田若宮遺跡発掘調査報告書
- 6 平成13年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成23年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

6 津田若宮遺跡

(1) 過去の調査

津田若宮遺跡においては、これまで8次に及ぶ調査が実施され、14基の住居跡が検出されている。その住居跡数を時期別にみると、縄文時代2基、古墳時代6基(前期4, 中期1, 後期1), 奈良時代1基, 時期不明5基となる。縄文時代の住居跡は中期を主体とするようであり、遺跡南東部の4・6次調査区で確認されて



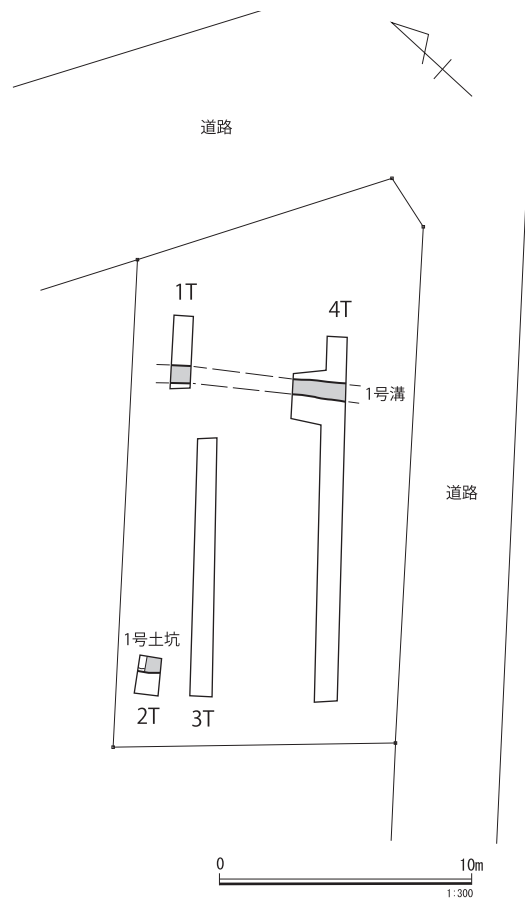
第 22 図 津田若宮遺跡第 9 次調査区

いる。古墳時代前期の住居跡は、第 1・2・4・7 次調査区で確認されており、遺跡東方の谷沿いに集落域が広がるようである。

(2) 第 9 次調査報告

調査経緯 津田字若宮 3464 番 2 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は津田若宮遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 5 月 8 日～ 14 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺部から 180 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。今回の調査は 6 カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.7 ～ 1.1 m を測る。調査の結果、溝跡 1 条、道跡 1 条が確認された。いずれも時期は不明である。溝跡は、幅 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m を測る。4 号トレンチでは 1 号溝跡が消えているようにみえる。これは溝底部が遺構確認面より高い位置にあったためであろう。道跡は、床面が硬化しており、幅 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m を測る。道跡の覆土より土師器小片が 10 片出土した。



第 23 図 津田若宮遺跡第 10 次調査区

(3) 第 10 次調査報告

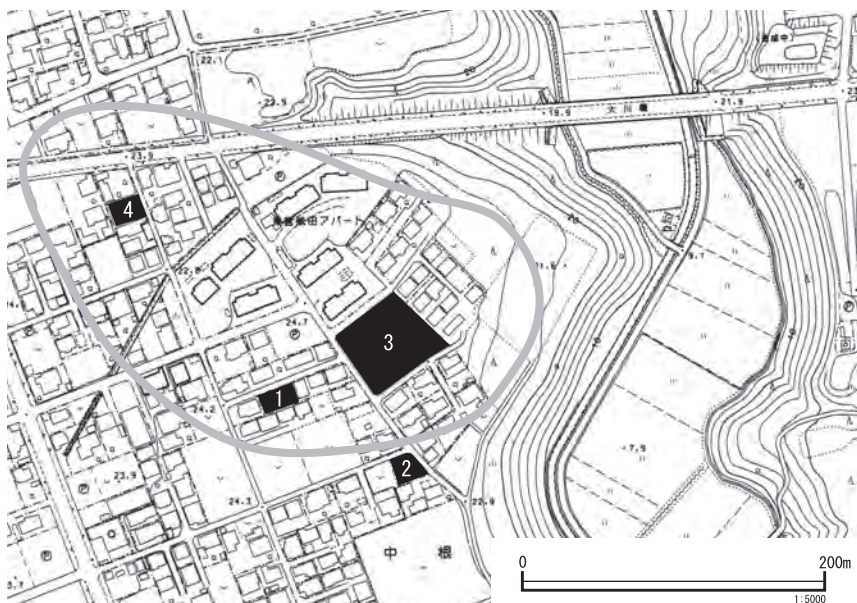
調査経緯 津田字若宮 3445 番 2 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は津田若宮遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法

93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は7月1日～3日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁部から

180mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。今回の調査は4カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.8～1.2mを測る。調査の結果、溝跡1条、土坑1基が確認された。いずれも時期は不明である。

溝跡は、幅0.7mを測り、位置からみて第9次調査区の1号溝の延長部分と考えられる。土坑は、床面が平坦で、深さ0.3mを測る。調査区から遺物は出土しなかった。



第24図 枯松戸遺跡の調査地点

7 枯松戸遺跡

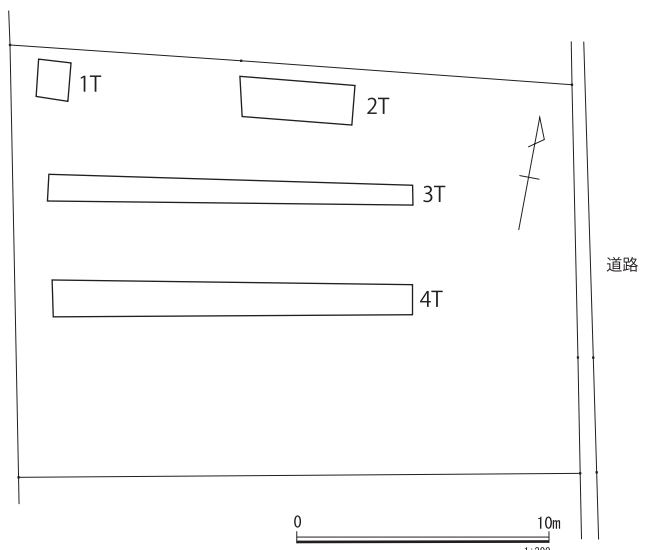
(1) 過去の調査

枯松戸遺跡においては、これまで3次の調査が実施されているが、住居跡は確認されていない。枯松戸遺跡における遺構密度は薄いものと考えられる。

(2) 第4次調査報告

調査経緯 中根字柴田5277番1に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は枯松戸遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は5月8日～16日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、大川の谷から西方に入る小支谷から100mほどのところに位置する。地形は平坦であり、調査時は荒地であった。今回の調査は4カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.8mを測る。調査の結果、遺構・遺物は認められなかった。



第25図 枯松戸遺跡第4次調査区

第7表 枯松戸遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1984	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1985	勝田市教委	試掘	なし	1
3	2013	公社	試掘	溝1(時期不明)	2

文献

- 1 昭和59年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

8 西並木下遺跡

(1) 第1次調査報告

調査経緯 馬渡字西並木下 1131-14 外 4 筆に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は西並木下遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い土砂採取に伴う文化財保護法



第 26 図 西並木下遺跡の調査地点

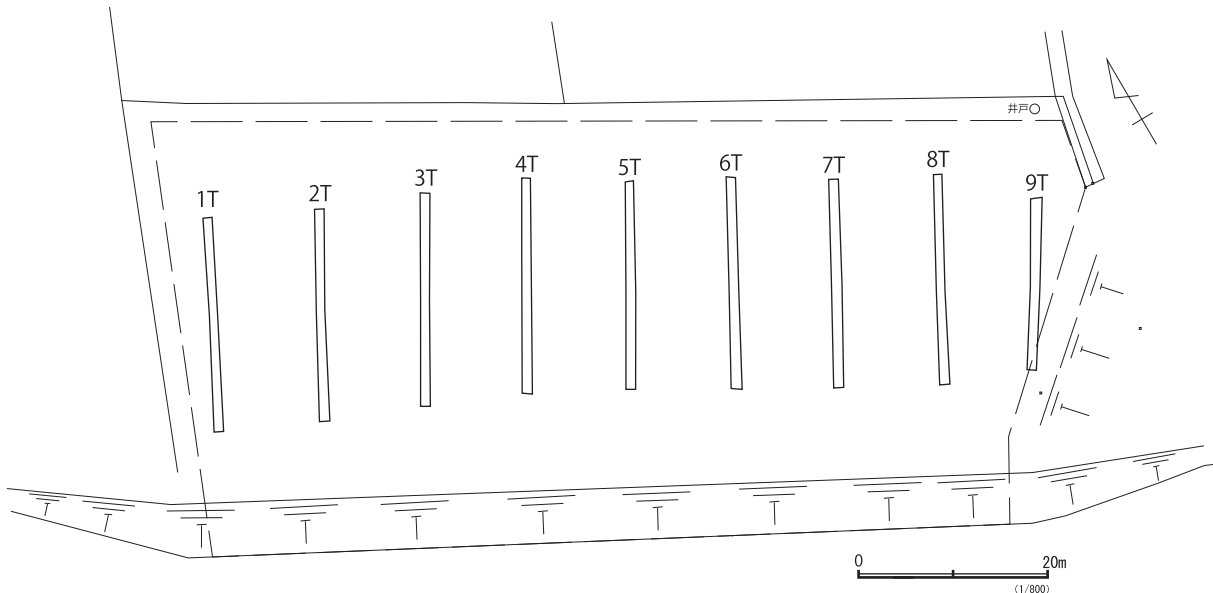
93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 5 月 20 日～ 23 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、本郷川の谷から東方に延びる支谷を望む台地縁辺部に位置する。現在、遺跡南方の谷は工業団地で造成されており、往時の谷の風景を想像することは難しい。調査地は平坦な地形を呈するが、これはかつて当地が陸田として利用されていたためであり、その際の造成によるものであろう。各トレンチのローム上面の高さからもそれはうかがうことができ、本来は谷に向かってゆるく傾斜する地形であったようである。調査地の現状は畑地であった。今回の調査は 9 カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2～1.3 m を測る。調査の結果、遺構は認められなかった。遺物は表土から縄文土器小片が若干出土したにとどまる。

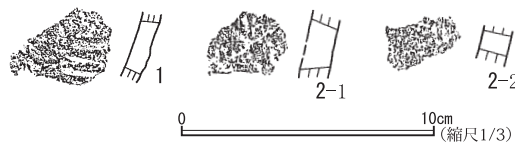
遺物説明

第 28 図

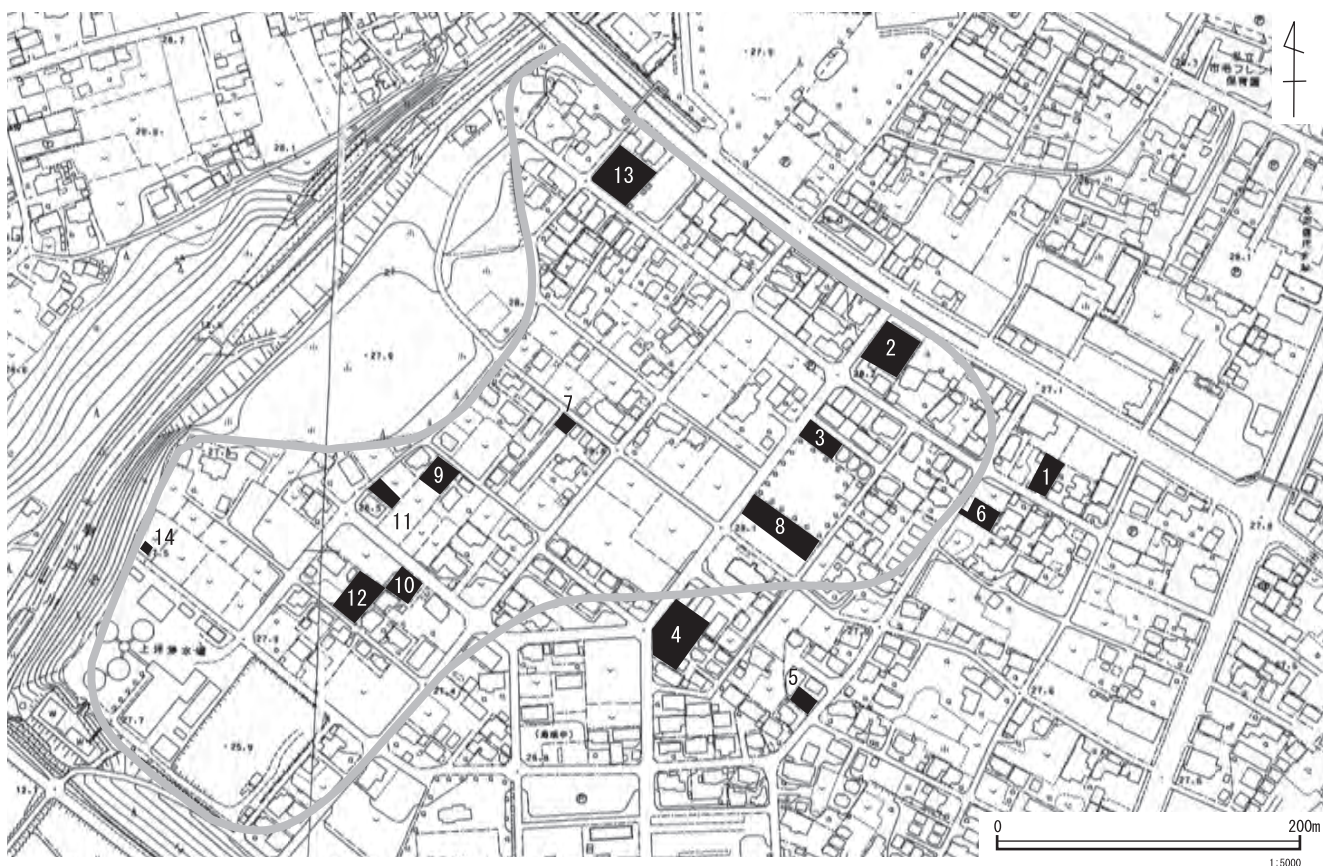
- 1 出土位置：8 トレ 注記：8 トレ 時代時期：縄文時代早期か 文様：条痕文か
- 2 出土位置：9 トレ 注記：9 トレ 時代時期：縄文時代早期か 文様：無文



第 27 図 西並木下遺跡第 1 次調査区



第 28 図 西並木下遺跡第 1 次調査区出土遺物



第 29 図 市毛上坪遺跡の調査地点

第 8 表 市毛上坪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1980	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳後期)	1
2	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳)	なし
3	1985	勝田市教委	試掘調査	なし	2
4	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (平安), 溝跡 1 (時期不明), 土坑 10	2
5	1986	勝田市教委	試掘	なし	3
6	1991	勝田市教委	試掘	なし	4
7	1992	勝田市教委	本調査	溝跡 1 (時期不明)	5
8	1996	市教委	試掘	なし	6
9	2006	市教委	試掘	なし	7
10	2006	市教委	本調査	住居跡 2 (古墳後期 1, 平安 1), 土坑 1	7
11	2006	市教委	試掘	住居跡 2 (古墳後期 1, 平安 1), 溝跡 1 (時期不明)	7
12	2012	公社	試掘	住居跡 14 (古墳時代か)	8
13	2013	公社	試掘	住居跡 1 (古墳前期)	9

文献

- 1 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 55 年度)
- 2 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 61 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 3 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 8 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

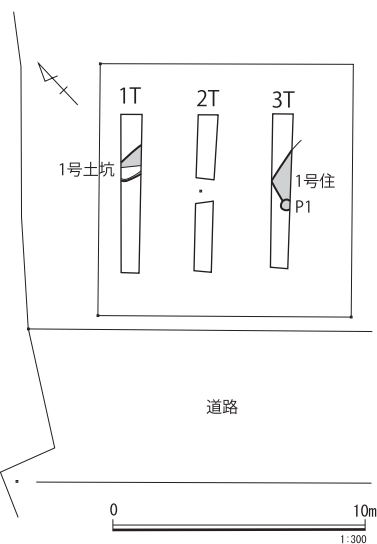
9 市毛上坪遺跡

(1) 過去の調査

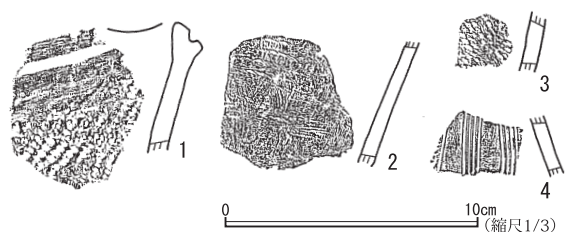
市毛上坪遺跡においては、これまで 13 次及び調査が実施され、23 基の住居跡が検出されている。そのなかで時期が判明している住居跡は、古墳時代前期が 1 基、後期が 3 基、平安時代が 3 基である。なお、第 12 次調査で確認された 14 基の住居跡は、プラン確認にとどめ

たため時期不明となっているが、覆土中から出土した土器をみると、すべて古墳時代の住居跡である可能性が高い。このようにこれまでの調査からみると、市毛上坪遺跡は古墳時代の大集落と捉えることができる。

遺構分布をみると、古墳時代は台地縁辺からやや奥に入った地区である遺跡北東部と、台地縁辺に近い遺跡南西部にわかれて集落が展開するようである。第 12 次調



第30図 市毛上坪遺跡第14次調査区



第31図 市毛上坪遺跡第14次調査区出土遺物

調査区は南西部の集落域に該当し、その地区の遺構密度が高かったことからみて、市毛上坪遺跡の古墳時代集落の中心は遺跡南東部にあると思われる。なお平安時代の集落域もこの南東部集落域に重なるようである。

(2) 第14次調査報告

調査経緯 市毛字上坪 1208 に所在する土地について、通信用無線基地局建設の計画があり、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は市毛上坪遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 6 月 10 日～13 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺部から 100 m ほどのところに位置する。地形は平坦であり

調査時は畑地であった。調査対象地内に 1～3 トレンチとした 3 本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約 0.6～0.7 m ほどを測る。確認された遺構は、住居跡 1 基、土坑 1 基である。1 号住居跡は床面のみが遺存しており、床面はやや硬化する。時期は不明であるが、3 トレンチ出土の遺物に古墳時代後期の土師器片が認められることからみて、当該期の住居跡になる可能性がある。1 号土坑は、幅 0.9 m、深さ 0.2 m ほどを測り、時期は不明である。土坑床面がやや硬化していた。

調査区からの出土遺物はトレンチから、縄文土器、弥生土器、土師器、近世陶器の小片が少量出土するのみである。

遺物説明

第31図

- 1 出土位置：3トレ 注記：3トレ 時代時期：縄文時代後期（堀之内 1 式） 文様：沈線文、単節縄文（LR）
- 2 出土位置：1トレ 注記：1トレ 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文（L-S） 備考：器内面炭化物付着
- 3 出土位置：3トレ 注記：3トレ 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文（LR+R）
- 4 出土位置：3トレ 注記：3トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 文様：櫛描文（端数 4 本）

10 赤坂遺跡

(1) 過去の調査

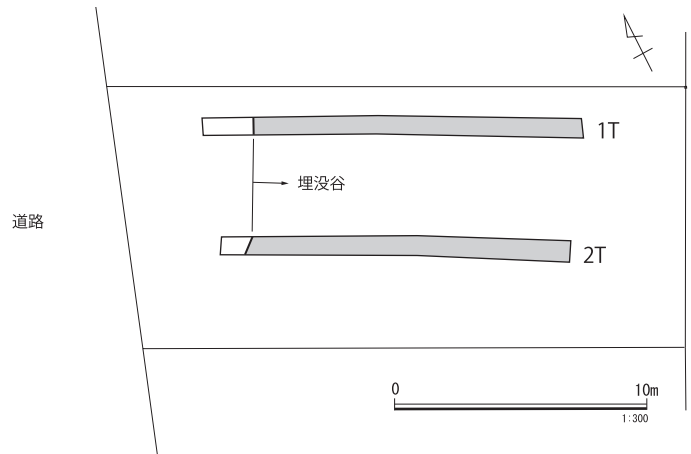
赤坂遺跡においては、平成 24 年に第 1 次調査が今回の調査区の隣接地で実施されたが、遺構・遺物ともに検出されなかった（『平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』2013）。

(2) 第2次調査報告

調査経緯 赤坂 12251 に所在する土地について、建築指導課より建築確認申請が提出された旨連絡が入ったため確認したところ、現地は赤坂遺跡の範囲内に当たっており、かつ埋蔵文化財有無の照会がなされておらず未調査であったため、事業者と連絡を取り建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨伝えた。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1



第 32 図 赤坂遺跡の調査地点



第 33 図 赤坂遺跡第 2 次調査区

項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は6月10日～17日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、中丸川を望む台地縁辺部から680mほど離れた地点に位置し、南にゆるく傾斜する地形を呈する。調査時は荒地であった。調査対象地内に2本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。その結果、調査区は大部分が埋没谷のなかにあることが判明した。埋没谷の深さを1トレンチ東端部において確認したところ、地表から2メートル掘削しても谷底面は現れず、黒色土が続いたため、それ以上の掘削はしていない。市教育委員会の判断を受け、埋没谷部分のトレンチは地表から60～80cmほどの掘削にとどめ、そのレベルで遺構確認作業を実施した。調査の結果、遺構・遺物ともに認められなかった。



第 34 図 勝倉若宮遺跡の調査地点

11 勝倉若宮遺跡

(1) 過去の調査

勝倉若宮遺跡においては、これまで3次に及ぶ調査が実施され、4基の住居跡が検出されている。そのなかで時期が判明している住居跡は、弥生時代後期が1基、古墳時代前期が1基、奈良・平安時代が2基であることから、弥生時代後期から平安時代にかけての集落が広がっているものと考えられる。

(2) 第4次調査報告

調査経緯 勝倉字地蔵根前2700番1外7筆に所在

第 9 表 勝倉若宮遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1984	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1985	勝田市教委	本調査	住居跡3 (弥生後期1, 古墳前期1, 平安1)	2
3	1987	勝田市教委	本調査	住居跡1 (奈良・平安)	3

文献

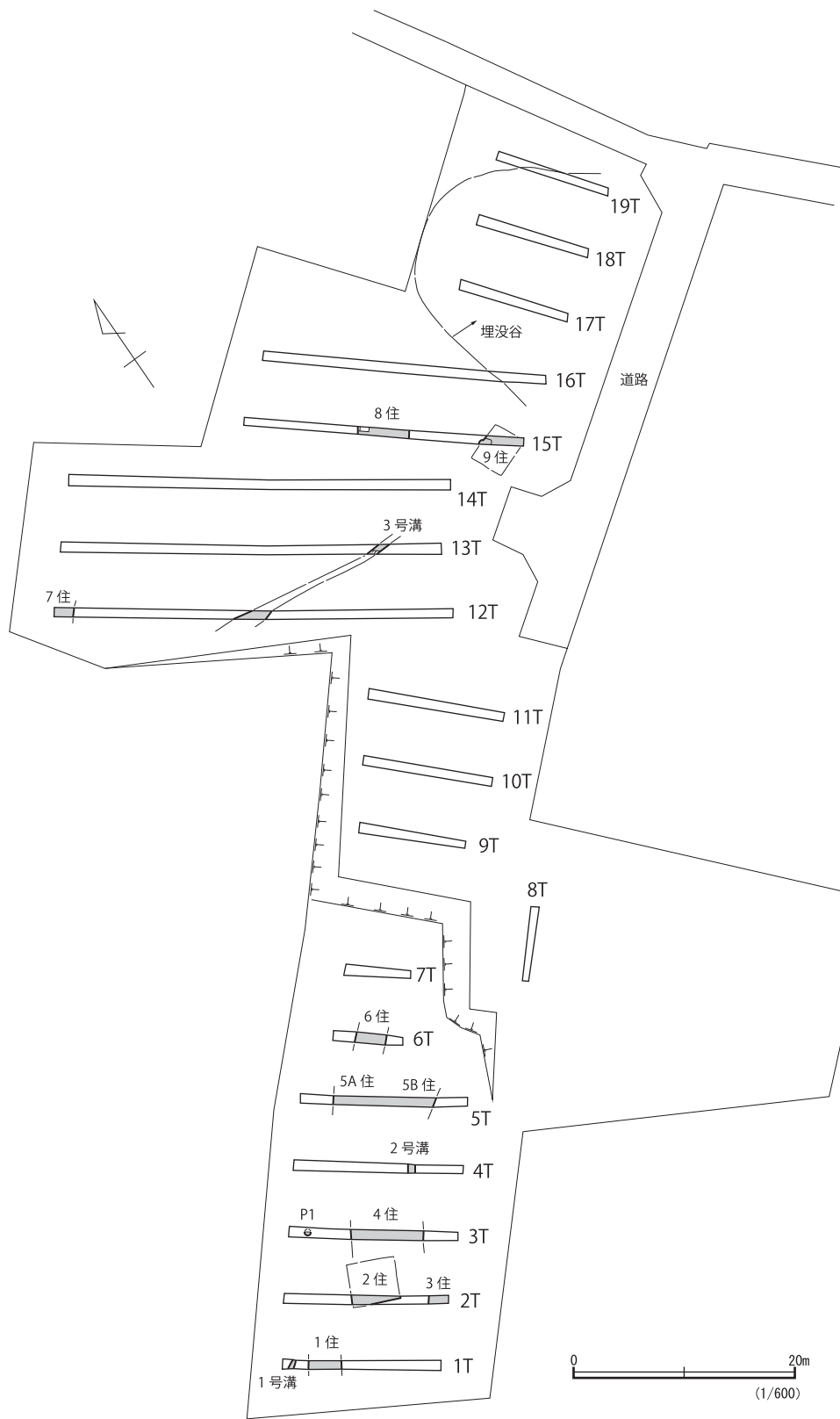
- 1 昭和59年度市内遺跡発掘調査報告書 2 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書
3 昭和62年度市内遺跡発掘調査報告書

する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は勝倉若宮遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認

ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は6月25日～7月11日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地から北方に入り込む小さな谷の谷頭に位置する。調査区の地形は大部分がその谷に向かいゆるく傾斜する地形を呈しており、調査時は畑地であった。調査対象地内に1～19トレンチとした19本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約0.2～0.9mほどを測る。確認された遺構は、住居跡10基（古墳時代：5A・5B・6・8住、奈良・平安時代：1～4・7・9住）、溝跡3条（時期不明）、ピット1基（時期不明）である。出土遺物は、各トレンチより、弥生土器、石器、土師器、須恵器が出土している。

なお、8～11トレンチ付近は大きく削平されている。現状地形の段差からみて、深いところでは地表から2mぐらい削られたものと考えられる。8トレンチでは、地表から20cmほど掘り下げたところで鹿沼パミス層を認めている。また、調査区東部は南から延びてくる谷の谷頭部分にあたっており、谷底まで掘



第35図 勝倉若宮遺跡第4次調査区

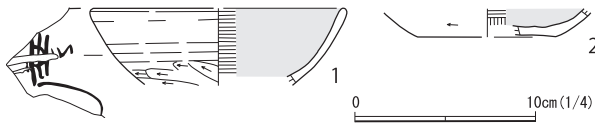
調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い宅地造成に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査について

ると危険なため、トレンチ掘削をある程度の深さで止めている。

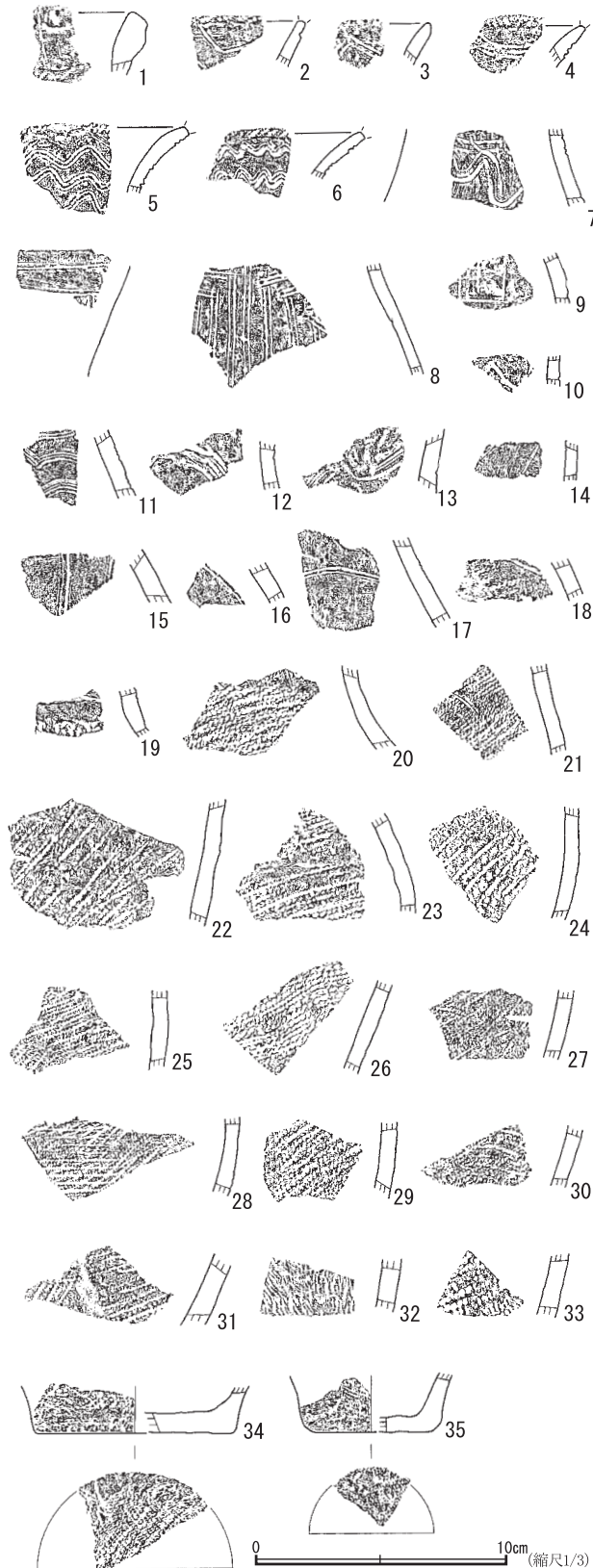
遺物説明

第36図

1 台帳：13T表土 材質：土師器 器種：杯 残存：底部外周30%



第36図 勝倉若宮遺跡第4次調査区出土遺物(1)



第37図 勝倉若宮遺跡第4次調査区出土遺物(2)

法量：底径(7.6) 色調：外面褐色，内面黒色 胎土：砂(白褐，透，灰少) 技法等：外面体・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ・黒色処理。

2 台帳：3T表土 材質：土師器 器種：椀 残存：体部20% 法量：口径(13.8) 色調：外面明褐色・褐色，口縁部外面～内面黒色 胎土：礫(灰少) 技法等：外面体部下手持ちヘラ削り。体部外面横位墨書(文字不明)。内面ヘラミガキ・黒色処理。

第37図

- 1 出土位置：10トレ 注記：10T 時代時期：縄文時代早期(田戸下層式) 文様：口唇部刺突文(半竹)，細沈線
- 2 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 文様：口唇部縄文，沈線(筥) 備考：沈線部分に赤彩の痕跡あり
- 3 出土位置：13トレ 注記：13T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 文様：口唇部施文不明，平行沈線(半竹)
- 4 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 文様：口唇部縄文，平行沈線(3本)
- 5 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 文様：口唇部縄文，平行沈線(半竹)
- 6 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：弥生時代中期 文様：口唇部縄文，平行沈線(4本)
- 7 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：(細頸)壺形土器 文様：平行沈線(半竹)
- 8 出土位置：2トレ，3トレ 注記：2T，3T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：(広口)壺形土器 文様：平行沈線(半竹) 備考：器外面に炭化物付着
- 9 出土位置：14トレ 注記：14T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 文様：平行沈線(半竹)
- 10 出土位置：5トレ 注記：5T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線(半竹か)
- 11 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線(4本)
- 12 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線(半竹)
- 13 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線(4本)
- 14 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線(先割れ工具による条線状)
- 15 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器(大型) 文様：平行沈線(先割れ工具による条線状，4本)
- 16 出土位置：13トレ 注記：13T 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 文様：平行沈線(半竹か)

17 出土位置：2トレ 注記：2T 時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：壺形土器（大型）文様：平行沈線（半竹）

18 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：壺形土器（大型）文様：平行沈線（半竹か），付加条縄文

19 出土位置：10トレ 注記：10T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線（半竹か），付加条縄文

20 出土位置：16トレ 注記：16T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線（先割れ工具による条線状），付加条縄文 備考：胎土に金雲母を含む

21 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線（先割れ工具による条線状），付加条縄文 備考：胎土に金雲母を含む

22 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線付加条縄文 備考：器内面が黒化している

23 出土位置：16トレ 注記：16T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

24 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 備考：器外面に炭化物付着

25 出土位置：1トレ 注記：1T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

26 出土位置：6トレ 注記：6T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

27 出土位置：3トレ 注記：3T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

28 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

29 出土位置：5トレ 注記：5T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

30 出土位置：4トレ 注記：4T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

31 出土位置：14トレ 注記：14T 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文

32 出土位置：13トレ 注記：13T 時代時期：弥生時代中期 文様：反撚り縄文

33 出土位置：2トレ 注記：2T 時代時期：弥生時代中期 文様：単節縄文



第38図 市毛下坪遺跡の調査地点

第10表 市毛下坪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1985	勝田市教委	本調査	土坑1（時期不明）	1
2	1987	勝田市教委	本調査	溝1（9世紀）	2
3	1987	勝田市教委	本調査	住居1（8世紀），溝2（時期不明）	2
4	1989	勝田市教委	本調査	住居1（9世紀），溝1（時期不明）	3
5	1989	勝田市教委	本調査	溝2（時期不明）	3
6	1989	勝田市教委	本調査	住居2（8世紀），溝2（時期不明）	3
7	1991	勝田市教委	本調査	住居3（古墳後期2，9世紀1）	4
8	1993	勝田市教委	試掘調査	なし	5
9	2006	市教委	試掘調査	なし	—
10	2012	公社	試掘	住居3（9世紀），溝5・土坑1・ピット5（時期不明）	6

文献

- 1 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書 4 平成3年度市内遺跡発掘調査報告書
 2 昭和62年度市内遺跡発掘調査報告書 5 平成5年度市内遺跡発掘調査報告書
 3 平成元年度勝田市内遺跡発掘調査報告書 6 平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

34 出土位置：15トレ8住 注記：15T8住 時代時期：弥生時代中期
 法量：底径78mm（残存率32%）文様：付加条縄文，底面布目痕

35 出土位置：6トレ 注記：65T 時代時期：弥生時代中期 法量：
 底径50mm（残存率24%）文様：縄文，底面布目痕

12 市毛下坪遺跡

(1) 過去の調査

市毛下坪遺跡においては、過去に10次の調査が実施され、10基の住居跡が確認されている。そのなかで時期が判明している住居跡は、古墳時代後期が2基、奈良・平安時代が8基であることから、古墳時代後期から平安時代にかけての集落が広がっているものと考えられる。とくに9世紀の住居跡が多く、その時期が集落形成の中心時期となる可能性が高い。

(2) 第11次調査報告

調査経緯 市毛字下坪416番3に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は市毛下坪遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い集合住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は8月19日～22日にかけて行われた。

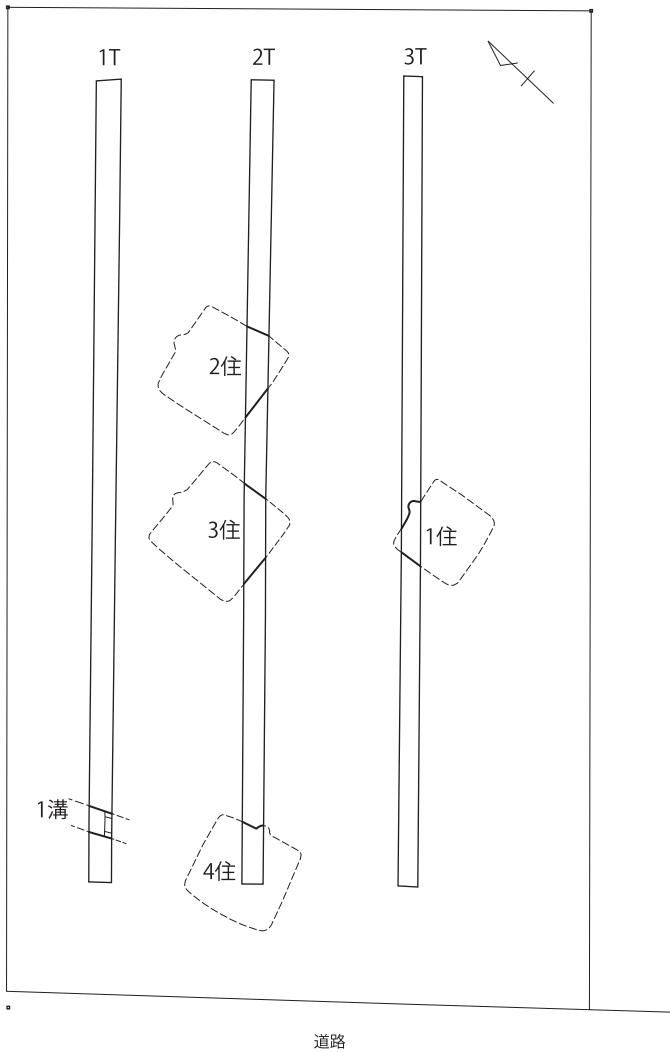
調査結果 調査地は、台地縁辺部から200mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であったが、近年まで調査区北西部の宅地内に掘られた

井戸の水を利用した陸田であった。調査対象地内に1～3トレンチとした3本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約0.5～0.7mほどを測る。確認された遺構は、竪穴住居跡4基（平安時代）、溝跡1条（時期不明）である。出土遺物は、各住居跡から土師器、須恵器、敲石が出土したほか、各トレンチより土師器、須恵器が出土している。

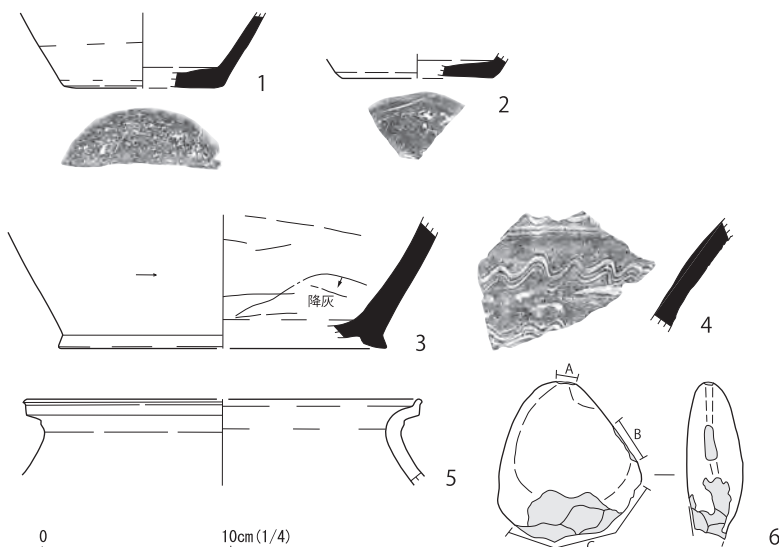
遺物説明

第40図

1 出土位置：1住覆土 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周40%、体部下半25% 法量：底径(8.3) 色調：



第39図 市毛下坪遺跡第11次調査区



第40図 市毛下坪遺跡第11次調査区出土遺物

白褐色 胎土：礫（明灰（泥岩？）少），砂（透，灰（チャート？）），骨針微量 技法等：底部外面不定方向手持ちへら削り。備考：木葉下窯産か

2 出土位置：3 住覆土 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部 20% 法量：底径（7.9）色調：灰色 胎土：礫（白少，明灰少），砂（白）技法等：底部外面手持ちへら削り。焼成硬質。

3 出土位置：2 住覆土 材質：須恵器 器種：短頸壺 残存：高台径（17.1）色調：灰色，内面の一部白褐色（降灰による）胎土：礫（明灰少，白），砂（白），骨針微量 技法等：胴部外面回転へら削り。胴部内面横方向ナデ。焼成硬質。内面の降灰位置からみて、口が大きく開いた短頸壺になるものと思われる。備考：木葉下窯産か

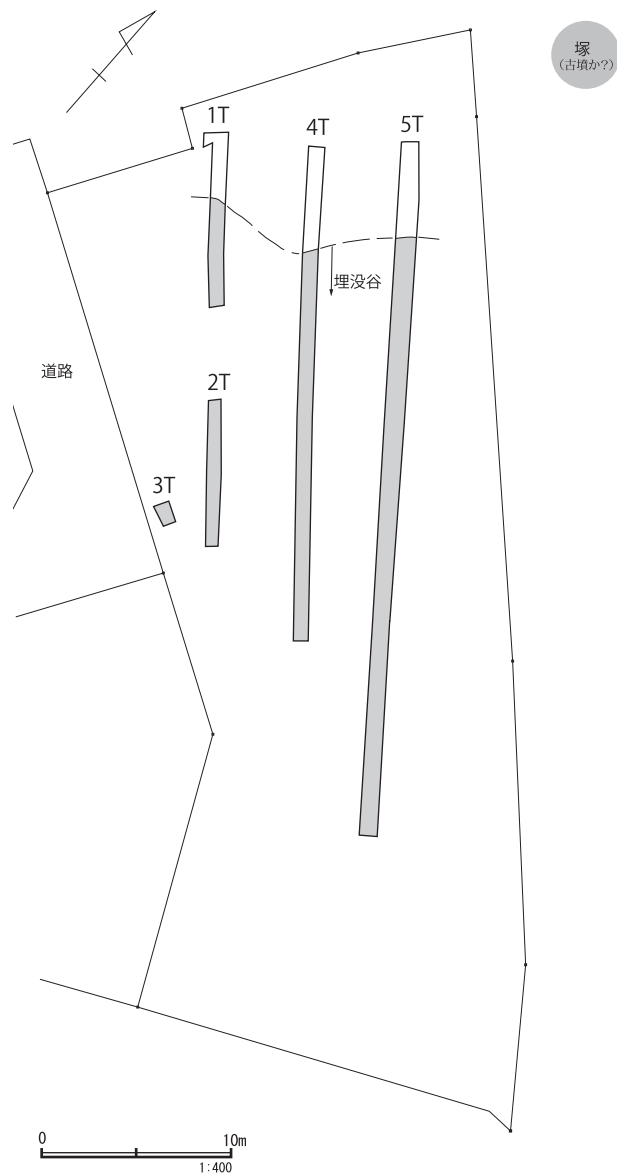
4 出土位置：2 トレ表土 材質：須恵器 器種：甕 残存：頸部片 法量：一 色調：外面茶色，内面黒灰色，内面上部に白褐色自然軸付着 胎土：砂（白透，透），骨針少 技法等：頸部外面に櫛目数 4 本の櫛描波状文を 3 段以上施す。焼成硬質。備考：木葉下窯産か

5 出土位置：3 住覆土 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 15% 法量：口径（20.7）色調：赤橙色，暗褐色 胎土：砂（白透多，白），



第 41 図 田彦古墳群の調査地点

（●は『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書昭和 56 年度版』に記された古墳の位置）



第 42 図 田彦古墳群第 1 次調査区

白雲母多 技法等：内外面ヨコナデ 備考：新治窯付近産

6 出土位置：2 住覆土 材質：石（石英斑岩か）器種：敲石 残存：一部欠失 法量：高 8.8，幅 7.5，厚 2.9，重量 222g 色調：明褐色 使用痕：側面 3 ヲ所に敲打痕（A～C）。とくに敲打痕 C は大きく欠失している。

13 田彦古墳群

（1）過去の調査

田彦古墳群は，前方後円墳 1 基，円墳 21 基が存在したといわれており，昭和 50 年発行の『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』には，「かつて那珂湊一高史学会が発掘調査を実施しており，その時の話では小形の前方後円墳で粘土床が発見されたといい，いくつかの古墳は

埴輪列がまわっていた模様である。」とあり、詳細は不明であるが発掘調査が実施されたようである。

昭和 57 年発行の『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和 56 年度版』で改めて古墳の所在確認を実施したところ 10 基ほどが確認され、遺跡地図にそのおおよその位置が記されている。今回の調査区に隣接して所在する塚は、地図上の位置からみて確認された古墳の 1 基になろう。その塚の表面を観察したが、埴輪片らしきものは確認できなかった。

現在、田彦古墳群からの出土遺物は、『ひたちなか埋文だより』第 10 号（平成 11 年 3 月発行）・第 20 号（平成 16 年 3 月発行）に掲載された、市埋蔵文化財調査センター所蔵の武人埴輪 2 点が知られるのみである。

(2) 第 1 次調査報告

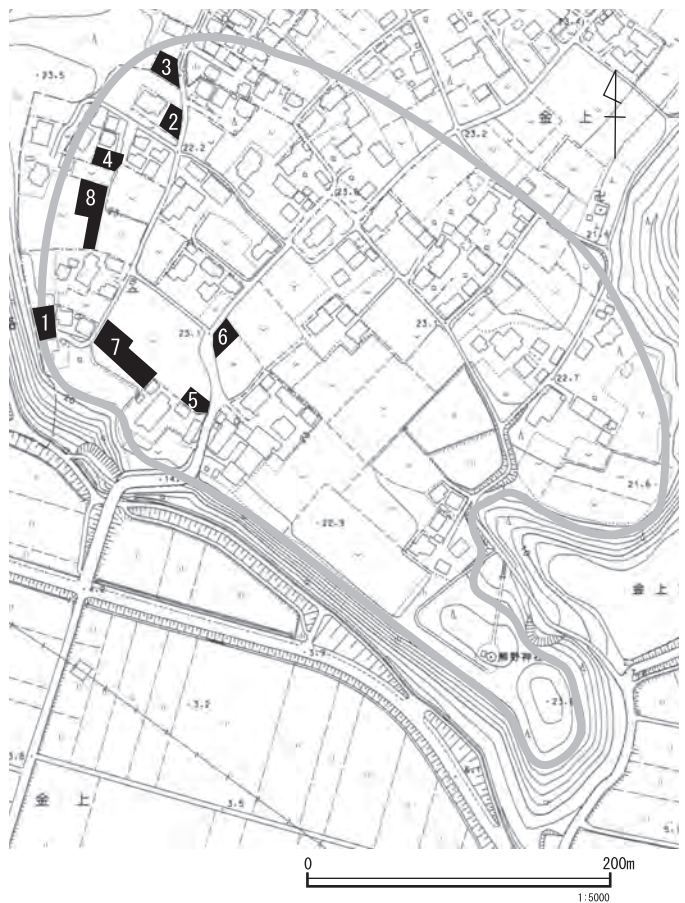
調査経緯 田彦字後原 650-1 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は田彦古墳群の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い集合住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 10 月 7 日～ 10 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、中丸川流域の低地から 300m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査対象地内に 1～5 トレンチとした 5 本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。トレンチ調査の結果、調査区に南東方向より浅い埋没谷が大きく入りこむことが判明した。埋没谷部分は、地表から 50～60cm ほどで湧水がみられたため、それ以上掘削しての調査は不可能であった。なお調査区から遺構・遺物は検出されなかった。

14 金上埴遺跡

(1) 過去の調査

金上埴遺跡は、過去に 7 次の調査が実施され、奈良・



第 43 図 金上埴遺跡の調査地点

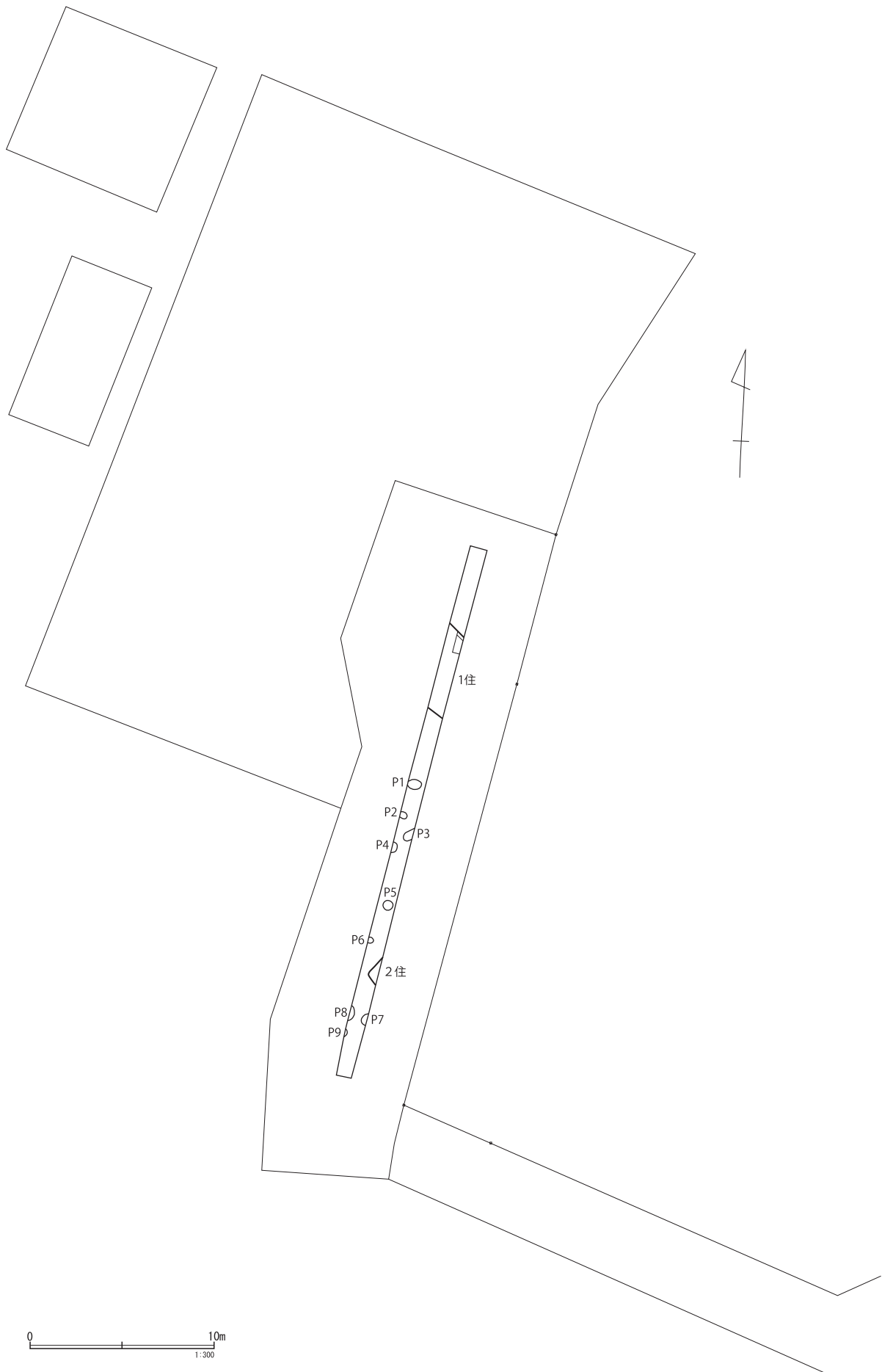
第 11 表 金上埴遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1984	勝田市教委	試掘	住居跡 1 (奈良)	1
2	1985	勝田市教委	試掘	なし	2
3	1988	勝田市教委	試掘	なし	3
4	1999	市教委	試掘	土坑 2	4
5	2003	市教委	試掘	住居跡 2 (奈良), 溝 1 (中世)	5
6	2007	市教委	試掘	住居跡 1 (平安), 井戸 (7c 末)	6
7	2012	公社	試掘	住居跡 4 (平安 2, 時期不明 2), 溝跡 4 (時期不明)	7

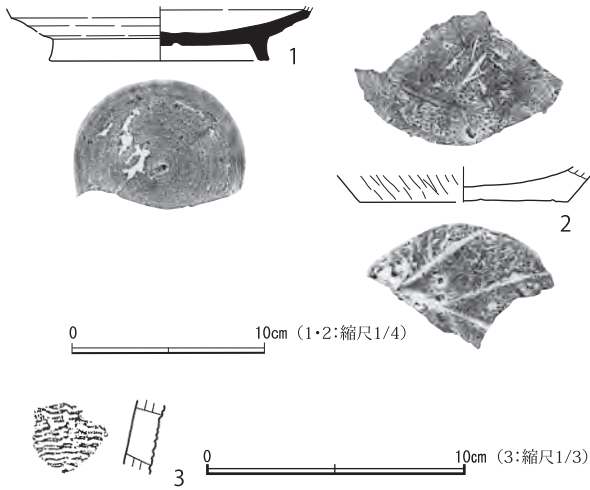
文献

- 1 昭和 59 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 63 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 11 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 15 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 23 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

平安時代の住居跡が 6 基検出されている。住居跡は第 1・5・6・7 次調査区で検出されていることから、那珂川を臨む台地縁辺部に集落域が広がるようである。今回の調査区もそうした集落域であり、試掘の結果、やはり奈良・平安時代の住居跡が確認された。なお第 6 次調査



第 44 図 金上埜遺跡第 8 次調査区



第45図 金上埴遺跡第8次調査区出土遺物

区では、7世紀末の大型井戸と推定される遺構が確認されていることから、この付近に当該期の有力者の居宅が存在する可能性は高いであろう。

(2) 第8次調査報告

調査経緯 金上字埴 812-1, 勝倉字吹上 2617-5 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は金上埴遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い宅地造成に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は11月11日～14日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、台地縁辺部から200mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査対象地内に1トレンチとした1本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約0.5～0.6mほどを測る。確認された遺構は、竪穴住居跡2基（奈良・平安時代1基，時期不明1基），ピット9基（時期不明）である。遺構確認のため、第1号住居跡とピット8を一部掘り込んでおり、その際、第1号住居跡から土師器、須恵器が出土している。このほかトレンチ表土より、土師器、須恵器の小片が出土している。

遺物説明

第45図

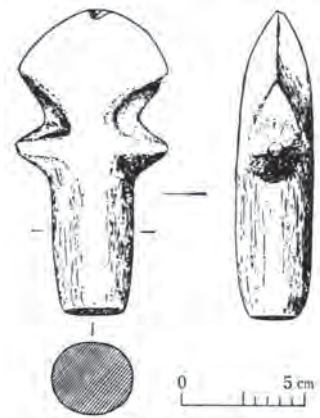
1 出土位置:1住 材質:土師器 器種:甕 残存:底部30% 法量:底径(10.8) 色調:内外面褐～黒褐色,断面褐色 胎土:礫(白),砂(白多,白透多),白雲母多 技法等:底部外面木葉痕。外面胴部下端斜方向ヘラミガキ。底部内面中央部にヘラ圧痕。胴部外面に焼土が付着する。備考:新治窯付近産か。

2 出土位置:1住 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部60% 法量:高台径11.1 色調:灰色 胎土:礫(白,灰少,透少),骨針少 技法等:底部外面回転ヘラ削り,爪形圧痕めぐり。焼成硬質。高台接地面及び内面やや磨滅。重ね焼きIII類か。備考:木葉下窯産か。

3 出土位置:1住 注記:1住 時代時期:縄文時代前期(興津式か) 文様:櫛歯状工具による波状文



第46図 田彦西原遺跡の調査地点



第47図 田彦西原遺跡出土の有角石斧

(『勝田市史原始・古代編』より)

15 田彦西原遺跡

(1) 過去の調査

田彦西原遺跡は過去に発掘調査は実施されたことはないが、今回の試掘地点付近から出土した有角石斧が志田諄一氏により『貝塚』58号(1956年)に紹介されている。当資料は明治大学に所蔵されており、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターでは、そのレプリカが展示されている。

(2) 第1次調査報告

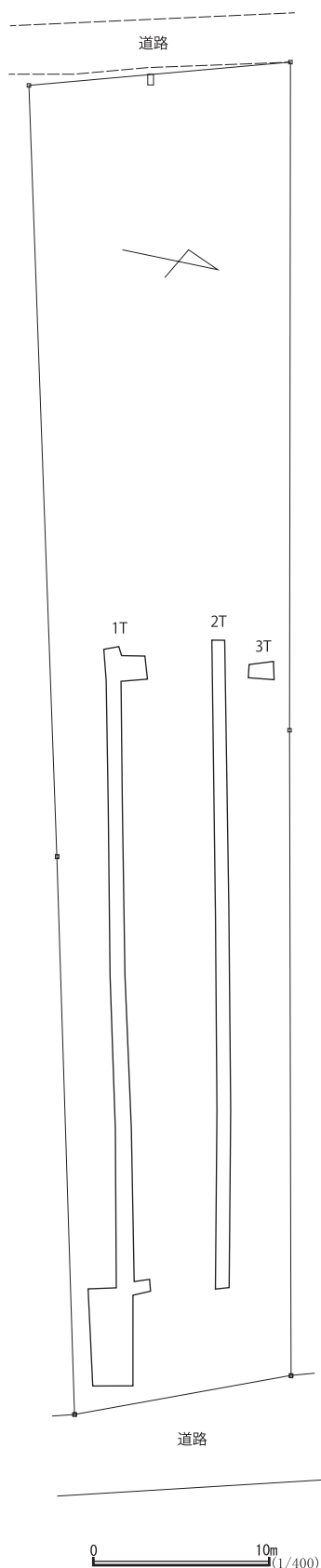
調査経緯 田彦字西原 773-1,2,3 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は田彦西原遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い集合住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は11月28日～12月2日にかけて行われた。

調査結果 調査地は中丸川から200mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査対象地内に1～3トレンチとした3本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約0.5～0.7mほどを測る。調査の結果、遺構・遺物ともに確認されず、過去に出土した有角石斧の手掛かりを得ることはできなかった。

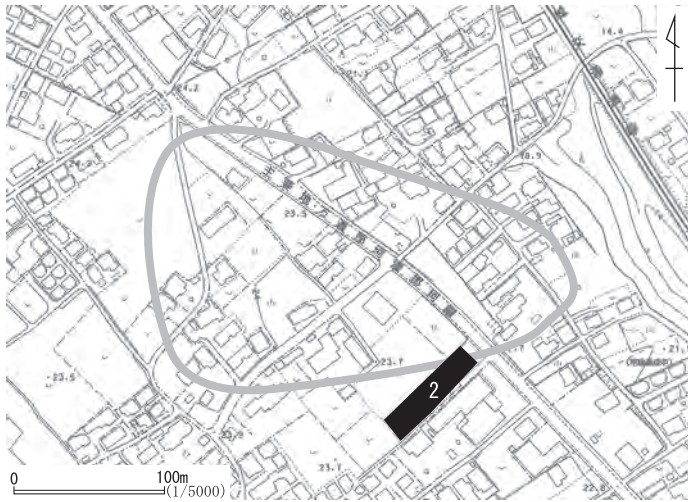
16 平井遺跡

(1) 過去の調査

平井遺跡は、昭和49年ごろ、ゴボウ耕作の際に7～8m離れて2個の蔵骨器が出土し、土器内には小児骨と思われる火葬骨が入っていたという(『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和56年度版』)。その後、平成14年5月頃に、第1次調査が市教育委員会により実施されて須恵器・土師器が出土しているが未報告である。



第48図 田彦西原遺跡第1次調査区



第 49 図 平井遺跡の調査地点

(2) 第 2 次調査報告

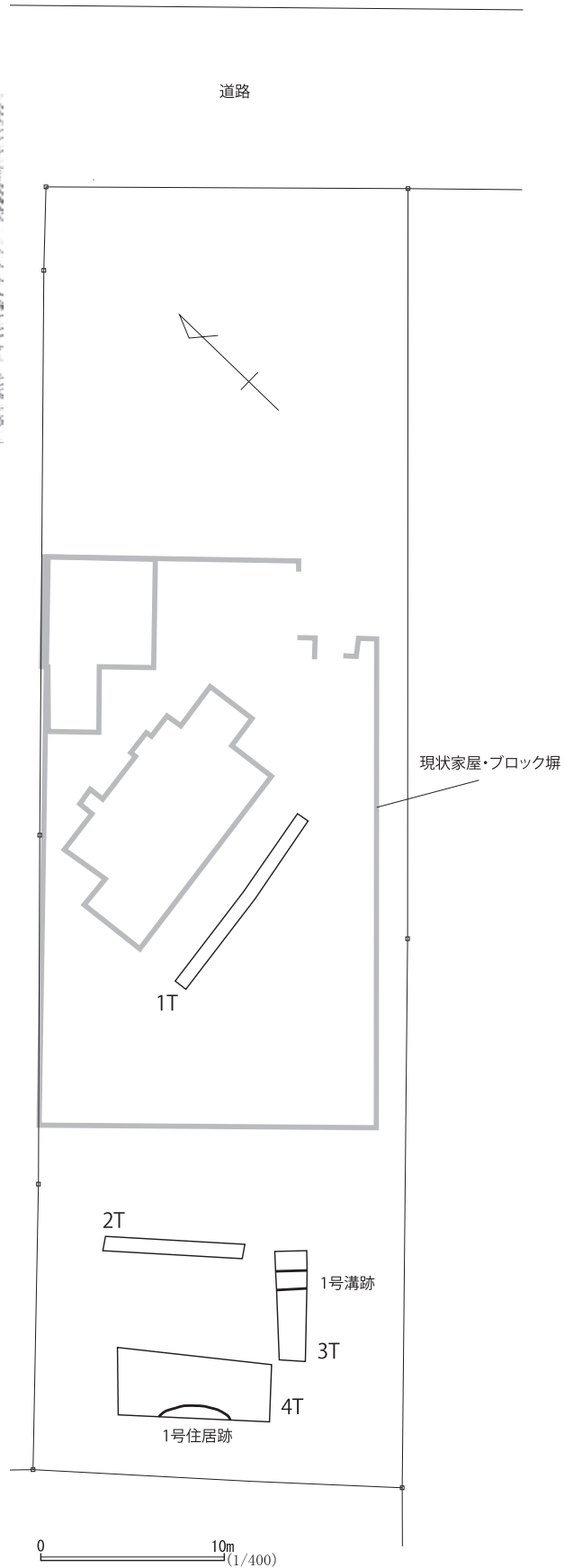
調査経緯 金上字平井 1010 番地, 1011 番地に所在する土地について, 埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は平井遺跡の範囲内に当たっており, 現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため, 教育委員会は建築・土木工事を行なう際は, 事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い集合住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため, 茨城県教育委員会にそれを進達するとともに, 試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 12 月 16 日～ 19 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は中丸川を望む台地縁辺から 150m ほど離れた地点に位置し, 平坦な地形を呈する。調査時は畑地と宅地であった。調査対象地内に 1～4 トレンチとした 4 本のトレンチを設定し, 重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約 0.5～0.7 m ほどを測る。調査の結果, 縄文時代の住居跡 1 基, 時期不明の溝が 1 条検出された。住居跡は一部のみの検出であり, 覆土中から縄文前期の土器片が, 床面から石器が出土している。ただし石器にはローム土の付着が顕著にみられるため, 旧石器時代の剥片の可能性がある。表土からの出土遺物は, 縄文土器 (前期), 須恵器の破片が少量みられた。

遺物説明

第 52 図

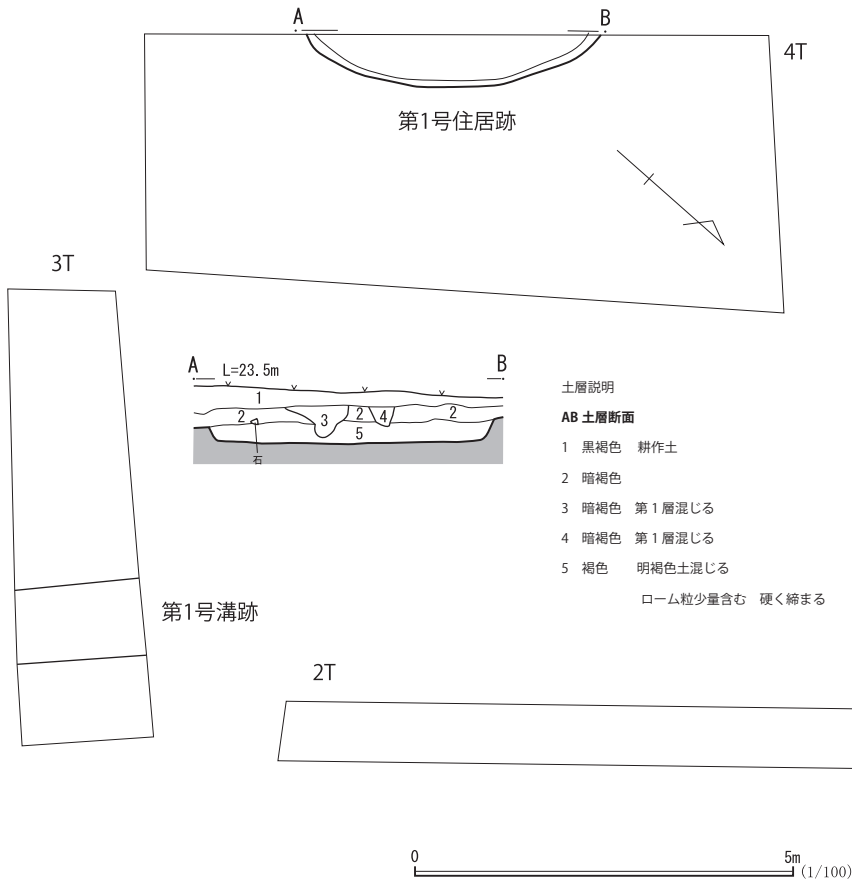
1 出土位置: 1 住 注記: 1 住 時代時期: 縄文時代前期中葉 器種: 深鉢形土器 法量: 口径 244 mm (残存率 11%) 文様: 単節縄文 (LR),



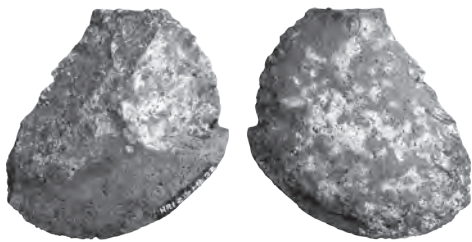
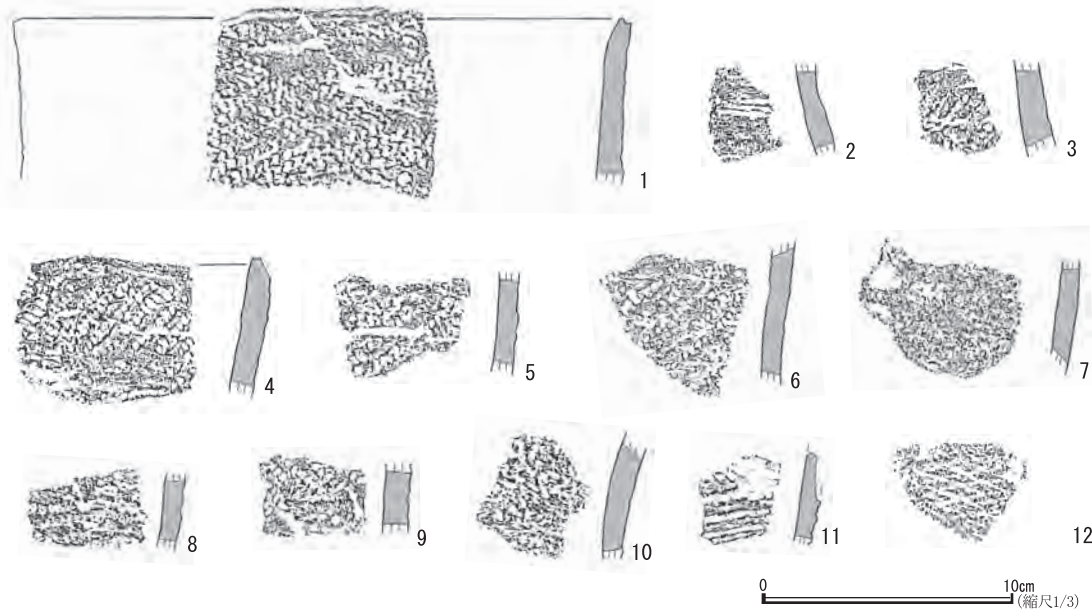
第 50 図 平井遺跡第 2 次調査区

ループ文 備考: 胎土に繊維を含む

2 出土位置: 4 トレ 注記: 4 トレ 時代時期: 縄文時代前期 (植房式?)



第 51 図 平井遺跡第 2 次調査区第 1 号住居跡



13 (縮尺 1/2)

第 52 図 平井遺跡第 2 次調査区出土遺物

文様：櫛描文？ 備考：胎土に繊維を含む

3 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期（植房式？） 文様：櫛描文？，単節縄文 (LR) 備考：胎土に繊維を含む

4 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：単節縄文 (LR) 備考：胎土に繊維を含む

5 出土位置：1 トレ 注記：1 トレ 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：単節縄文 (LR) 備考：胎土に繊維を含む，2 と同一個体か

6 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：単節縄文 (LR) 備考：胎土に繊維を含む，器外面に炭化物付着

7 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：単節縄文 (LR)？ 備考：胎土に繊維を含む

8 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：単節縄文 (LR)？ 備考：胎土に繊維を含む

9 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：単節縄文 (RL) 備考：胎土に繊維を含む

10 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：縄文（原体不明） 備考：胎土に繊維を含む

11 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：撚糸文 (L) 備考：

胎土に繊維を含む

12 出土位置：1 住 注記：1 住 時代時期：縄文時代前期中葉 文様：網目状撚糸文 備考：胎土に繊維を含む

13 出土位置：1 住 注記：1 住 S2 器種：剥片 石材：トトロ石 法量：長さ 61mm，幅 59mm，厚さ 14mm，重量 40.2g 備考：打面は剥離面，背面に自然面あり，表面にローム土が付着しており，旧石器時代のものと考えられる。

Ⅲ 本調査報告

1 堀口遺跡第 15 次調査報告

(1) 発掘調査の経緯

堀口字新地坪 163 番 1 に所在する土地について、平成 25 年 12 月 17 日から 21 日にかけて行われた試掘調査で遺構を確認し、保護が図れないことが判明したため、本調査をすることとなった。調査は 2 月 18 日から 3 月 7 日にかけて行われた。

(2) 調査の経過

調査期間 / 平成 26 年 2 月 18 日～3 月 7 日

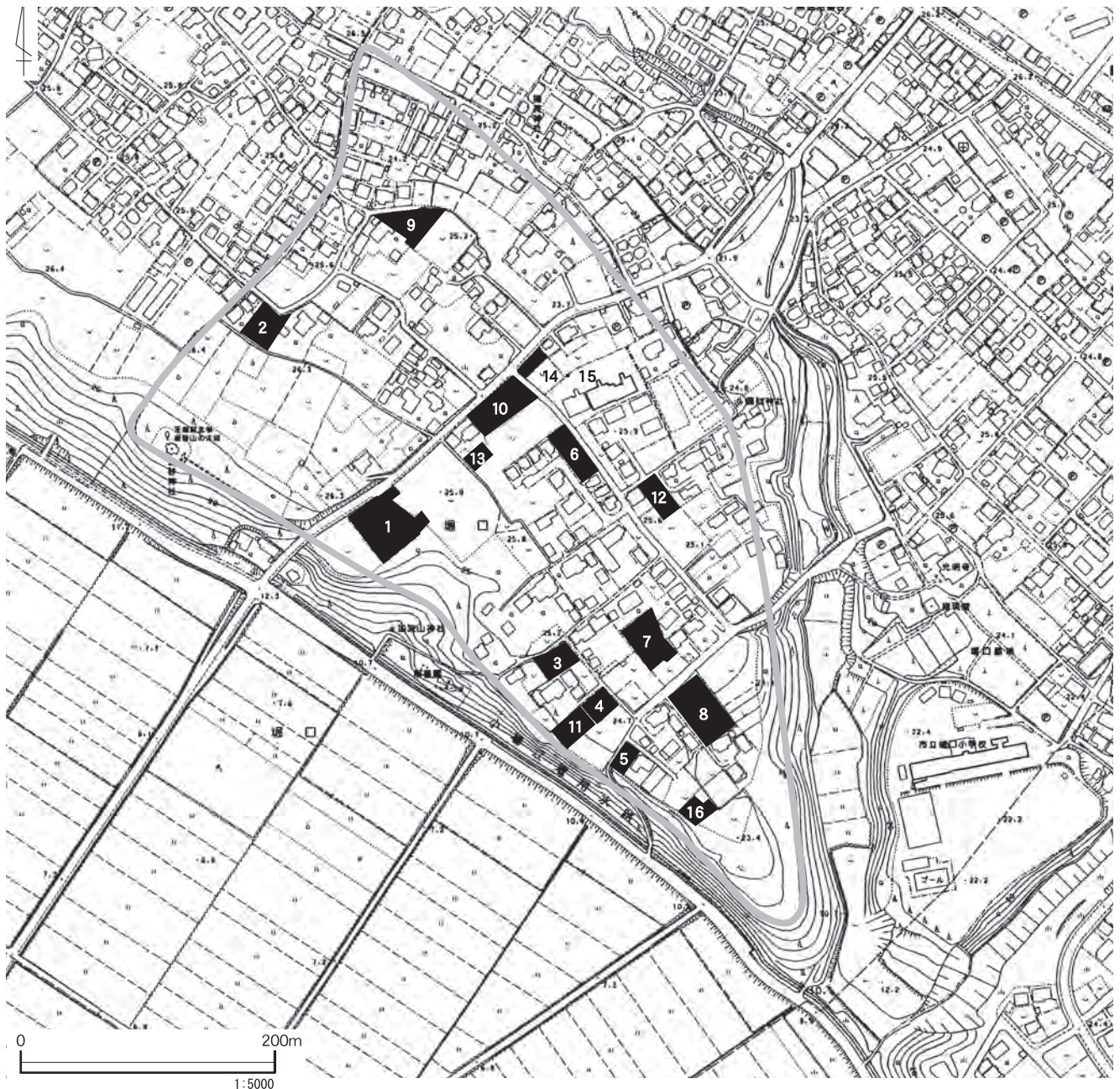
調査担当 / 佐々木義則

調査面積 / 115 m²

時代 / 古墳・平安時代

遺構 / 竪穴住居跡 4 基 (古墳時代 2 基, 平安時代 2 基), 溝跡 1 条 (時期不明), ピット 6 基 (時期不明)

調査地は、那珂川を望む台地縁部から 210 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり、建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は試掘調査(『平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』19～20 頁)により遺構分布は把握されていたため、今回の調査区に係る遺構はおおよそ予想が



第 53 図 堀口遺跡の調査地点



写真1 遺構確認状況



写真2 調査風景

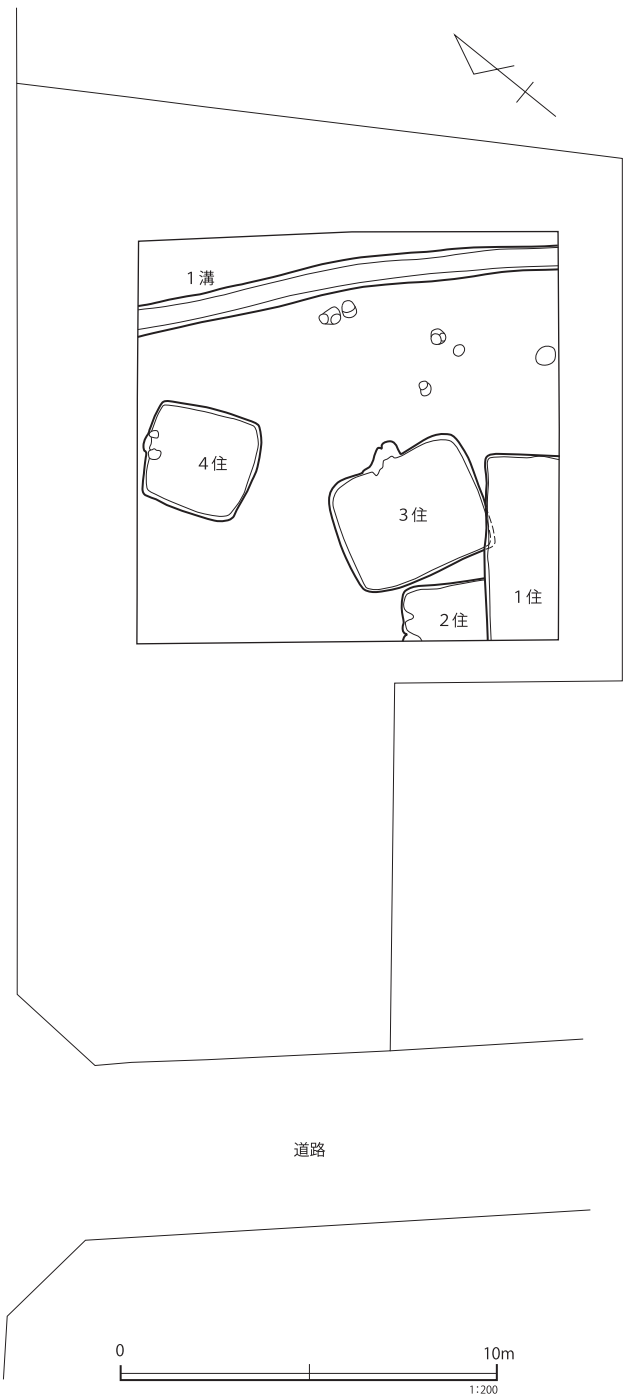
いた。しかし第3号住居跡や第4号住居跡などは過去の試掘トレンチから外れており、今回の調査によって明確になった遺構であった。なお今回検出された遺構番号は、過去の試掘時に付された番号に従っている。それでは以下、簡単に調査の経過を記す。

- 2月18日：重機による表土除去開始。遺構確認作業。
- 2月19日：遺構確認状況撮影。遺構掘り込み開始。
- 2月20日第1号溝跡平面図・覆土土層断面図作成。
- 2月21日：全ての住居跡の掘り込みを着手。
- 2月24日～28日：住居跡の撮影・図面作成。
- 3月4日：調査区全体図作成。器材撤収
- 3月7日：重機による埋め戻し。

(3) 住居跡

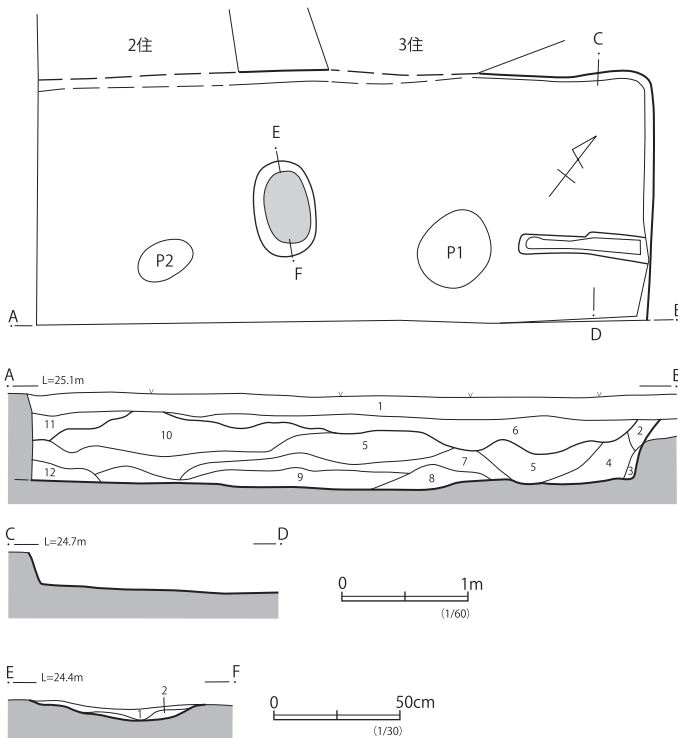
第1号住居跡

遺構 第2・3号住居跡と重複する。新旧は、切り合い関係から第1号住居跡→第2号住居跡、遺物から第1号住居跡→第3号住居跡である。住居跡の大部分が調査区外に位置するため、住居北東隅を中心とした調査となった。当住居跡の主軸方向は、N-37°-Wを測る。竪穴部の規模は不明であるが、炉の位置が北壁中央付近と



第54図 堀口遺跡第15次調査区

みれば、東西5.8mほどになる。壁高は北壁36cm、東壁33cmを測る。壁周溝は認められなかった。支柱穴はプランのみの確認であり、P1、P2が該当しよう。支柱穴P1と東壁の間に、深さ2cmほどの間仕切り溝が認められた。床面は全体的に硬化する。支柱穴間の中間やや北壁寄りに、75×45cmほどの楕円形の炉跡が存在する。竪穴部覆土は、床上からすぐにロームブロックを多量に含む土で覆われていることから、廃絶後すぐに埋め戻されたようである。



土層説明

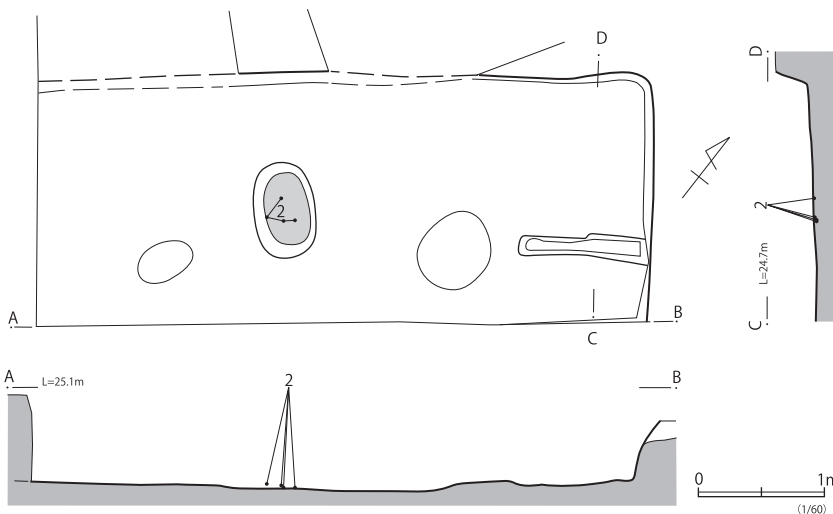
AB 土層断面

- 1 暗褐色 表土
- 2 褐色 ローム粒含む
- 3 明褐色 ローム粒多量含む
- 4 褐色 ローム粒多量含む 暗褐色土混じる
- 5 褐色 ロームブロック多量含む 黒褐色土混じる
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量含む
- 7 褐色 ローム小ブロック多量含む 黒褐色土混じる
- 8 明褐色 ローム小ブロック多量含む 黒褐色土少量混じる
- 9 明褐色 ロームブロック少量含む 黒褐色土少量混じる
- 10 褐色 ロームブロック含む 黒褐色土混じる
- 11 黒褐色 ローム粒少量含む
- 12 黒褐色 ローム粒含む

EF 土層断面

- 1 暗褐色 焼土粒・ローム粒含む
- 2 橙色 焼土

第55図 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡



遺物説明

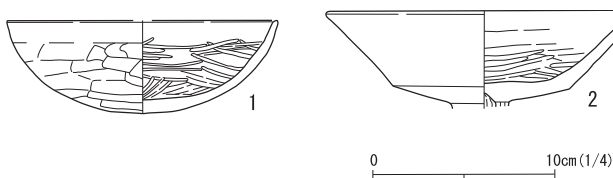
第57図

1 出土位置:1住 台帳:P1 材質:土師器 器種:杯 残存:40% 法量:口径(14.8),器高5.1 色調:橙~暗褐~黒褐色 胎土:礫(白微),砂(白多,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ,体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕:- 備考:-

2 台帳:P2~5, No.3 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部30% 法量:口径17.4,器高5.4 色調:橙~鈍い橙~黒褐色 胎土:礫(白少),粒(白極多,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヨコナデ?,

内面ヘラナデ・ヘラミガキ 使用痕:- 備考:外面器面が摩滅している。砂粒を多く含んだ胎土

第56図 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡遺物出土状況

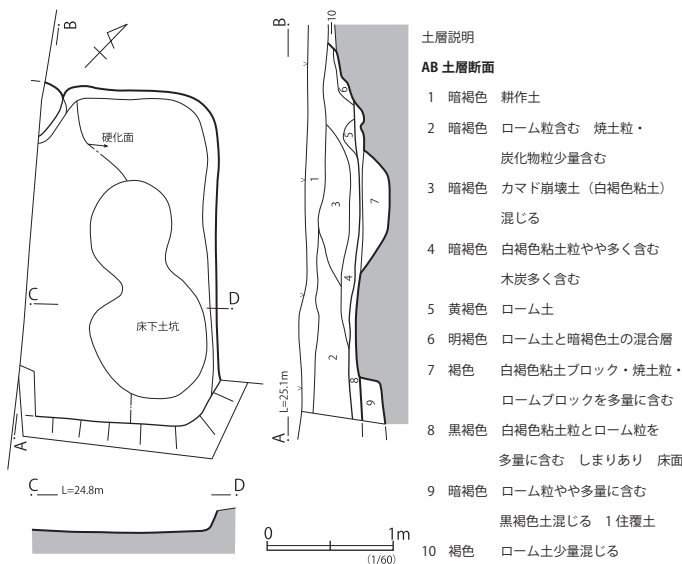


第57図 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡出土遺物

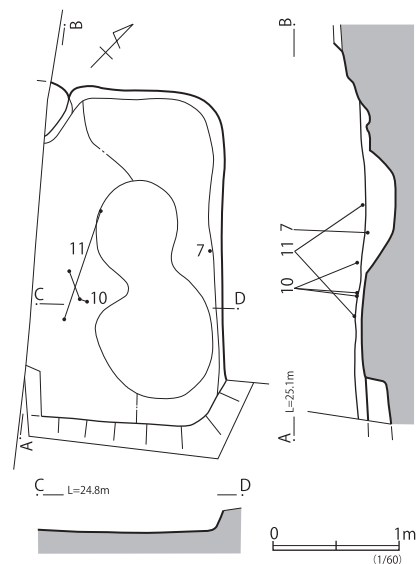
遺物出土状況 1は確認調査(第14次調査)時に覆土中から出土した土師器杯である。2は炉内焼土面上から破片で出土した土師器高杯の杯部である。このほか覆土より土師器甕破片が出土している。出土土器からみて古墳時代中期の住居跡であろう。

第2号住居跡

遺構 第1号住居跡と重複しており,新旧は切り合い関係から,第1号住居跡→第2号住居跡である。住居西半分は調査区外のため未調査である。当住居跡の主軸方向は, N -43° - Wを測る。竪穴部の規模は南北2.8mほどと推定される。壁高は北壁13cm,東壁12cmを測る。壁周溝や支柱穴は認められなかった。床面は竈前から南壁中央部にかけて硬化していた。なお床面東側に



第 58 図 堀口遺跡第 15 次調査区第 2 号住居跡



第 59 図 堀口遺跡第 15 次調査区第 2 号住居跡遺物出土状況

径 1 m ほどの円形土坑プランが 2 カ所接するように認められた。おそらく床下土坑と思われる。(なお今回の調査は地権者からの要望があったため、市教育委員会からの指示のもと住居掘形調査は実施していない。) 竈穴部覆土は竈崩壊後、自然埋土と思われる第 2 層が堆積している。

遺物出土状況 床面付近より遺物が出土している。とくに有台皿 7 は完形品で底部を上向けになった状態で出土している。東壁上に置かれていたものが落下したのだろうか。その皿の体部外面には「久□ (高カ)」と大きく墨書されていた。皿 8 の外面にも「□高」の墨書が認められるが、あるいはこれも「久高」になる可能性があるだろう。土器 6 の墨書は「本」(=奉?) かもしれない。竈前床面からは土師器甕破片が多数出土した。竈崩壊土中からの出土であり、おそらく竈補強材として用いられた破片類が、廃絶時の竈解体に伴い竈前面に散乱したものでないかと考えられる。

土器は、土師器杯の調整技法や、須恵器有台杯の存在などからみて、9 世紀第 3 四半期頃に位置づけられる資料であろう。当住居跡の廃絶時期もその頃になると考えられる。

遺物説明

第 60 図

1 台帳: No. 5 材質: 須恵器 器種: 有台杯 残存: 底部 法量: 高台径 (6.3) 色調: 灰色 胎土: 礫 (白, 灰), 砂 (白, 白透), 骨針微量, 黒色吹き出し多 技法等: 焼成硬質。高台端部が細かく欠失。備考:

木葉下窯産か

2 台帳: No. 2 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 15% 法量: 口径 (11.8), 器高 4.5, 底径 (5.1) 色調: 外面褐色, 内面黒褐色・茶褐色 胎土: 砂 (灰透), 骨針微量 技法等: 回転糸切り。外面体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理 (不十分)。

3 台帳: 14 次 1 住フク土, 15 次 2 住 No. 1・2 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 底部 40%, 体部下半 15% 法量: 底径 (6.6) 色調: 外面黒褐色・暗褐色, 内面黒色 胎土: 細砂 技法等: 回転糸切り。内面ヘラミガキ (底部不定方向)・黒色処理。体部外面墨書。

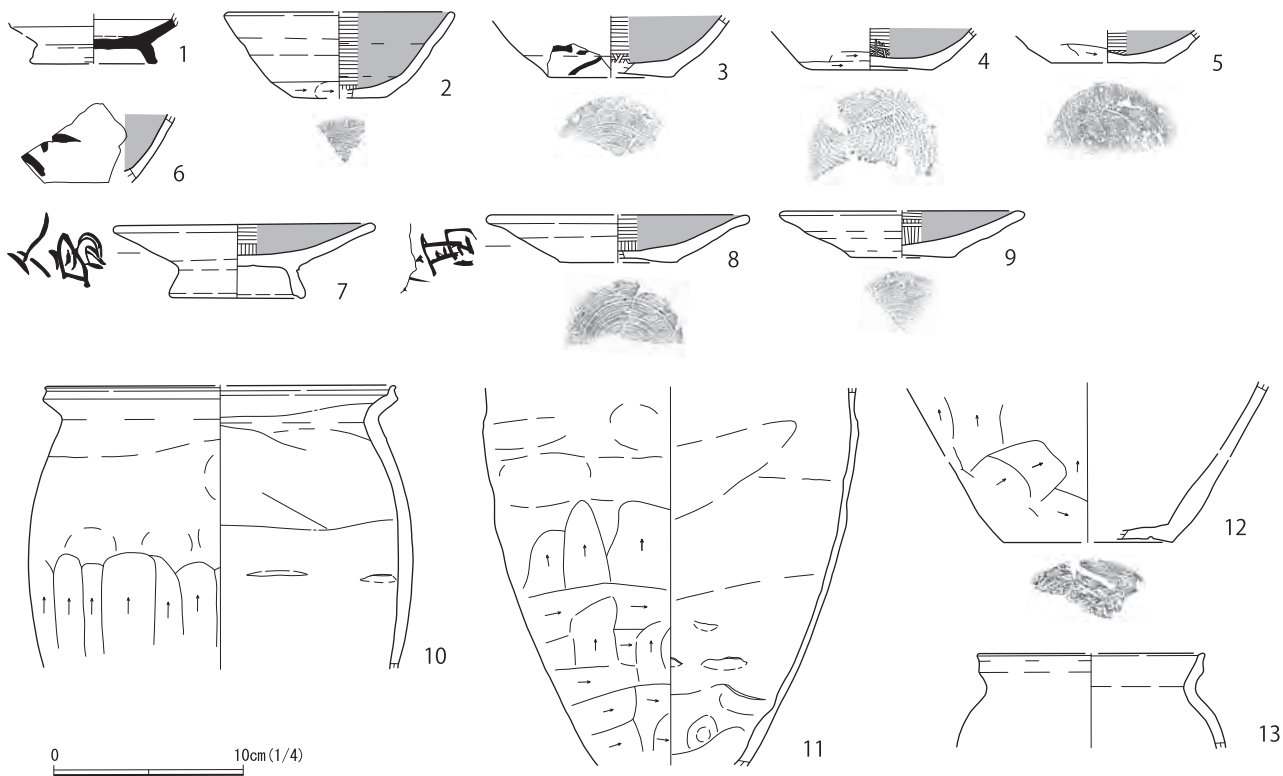
4 台帳: No. 1・2, 表土 No. 1 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 底部 60% 法量: 底径 6.2 色調: 外面褐色・黒褐色・橙褐色, 内面黒色 胎土: 礫 (白褐少) 技法等: 回転糸切り。外面体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部不定方向)・黒色処理。外面体部下端および内面底部中央部が摩滅。破碎後に火を受けたか。

5 台帳: No. 1 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 底部 30% 法量: 底径 (5.9) 色調: 外面褐色, 砂 (透, 白少, 灰少) 技法等: 外面底部一方向・体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部放射状)・黒色処理。

6 台帳: No. 2 材質: 土師器 器種: 碗か 残存: 体部下半小片 法量: 一 色調: 外面褐色, 内面黒色 胎土: 砂 (透) 技法等: 内面黒色処理。内面にヘラミガキは施されない。外面横位墨書。

7 台帳: P2 材質: 土師器 器種: 有台皿 残存: 完形 法量: 口径 13.2, 器高 3.9, 高台径 6.8 色調: 外面橙色・褐色, 内面黒色 胎土: 礫 (灰少), 骨針微量 技法等: 底部中央に糸切り痕残る。内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理。体部外面横位墨書「久□ (高カ)」。使用痕なし。

8 台帳: No. 1・2 材質: 土師器 器種: 皿 残存: 40% 法量: 口径 (13.4), 器高 2.5, 底径 (6.2) 色調: 外面褐色・橙褐色, 内面黒色 胎土:



第60図 堀口遺跡第15次調査区第2号住居跡出土遺物

礫（白少，灰少），砂（透明，白少）骨針少，黒雲母少 技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部1方向）・黒色処理。体部外面横位墨書「□（久カ）高」。

9 台帳：No.1 材質：土師器 器種：皿 残存：底部25%，体部15%
法量：口径（12.1），器高2.4，底径（5.4）色調：外面褐色，内面黒色 胎土：礫（灰少）技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部1方向）・黒色処理。口唇部内側と底部周縁がやや摩滅。

10 台帳：P7・9・10，No.2 材質：土師器 器種：甕 残存：上半部25% 法量：口径（18.2）色調：外面橙褐色，内面口縁部橙褐色・肩部黒色，胴部明褐色 胎土：砂（透多，白透少，白少）技法等：口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラ削り。胴部内面横方向ナデ。肩部内側が黒色に汚染される。

11 台帳：P6・11，No.1・2・6，表土No.1 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部40% 法量：— 色調：外面上部橙褐色・下部褐色，内面褐色（やや暗色）胎土：砂（透少，白透多，白少，灰少）技法等：外面胴部下半ヘラ削り（縦方向の後，横方向）。内面横方向ナデ。

12 台帳：2住No.1，1住No.1 材質：土師器 器種：甕 残存：底部外周20%，胴部下端15% 法量：底径（8.8）色調：橙色 胎土：礫（白透），砂（透多）技法等：底部外面1方向ナデ。胴部外面ヘラ削り。胴部内面横方向ナデ。底部内面円周方向ナデ。

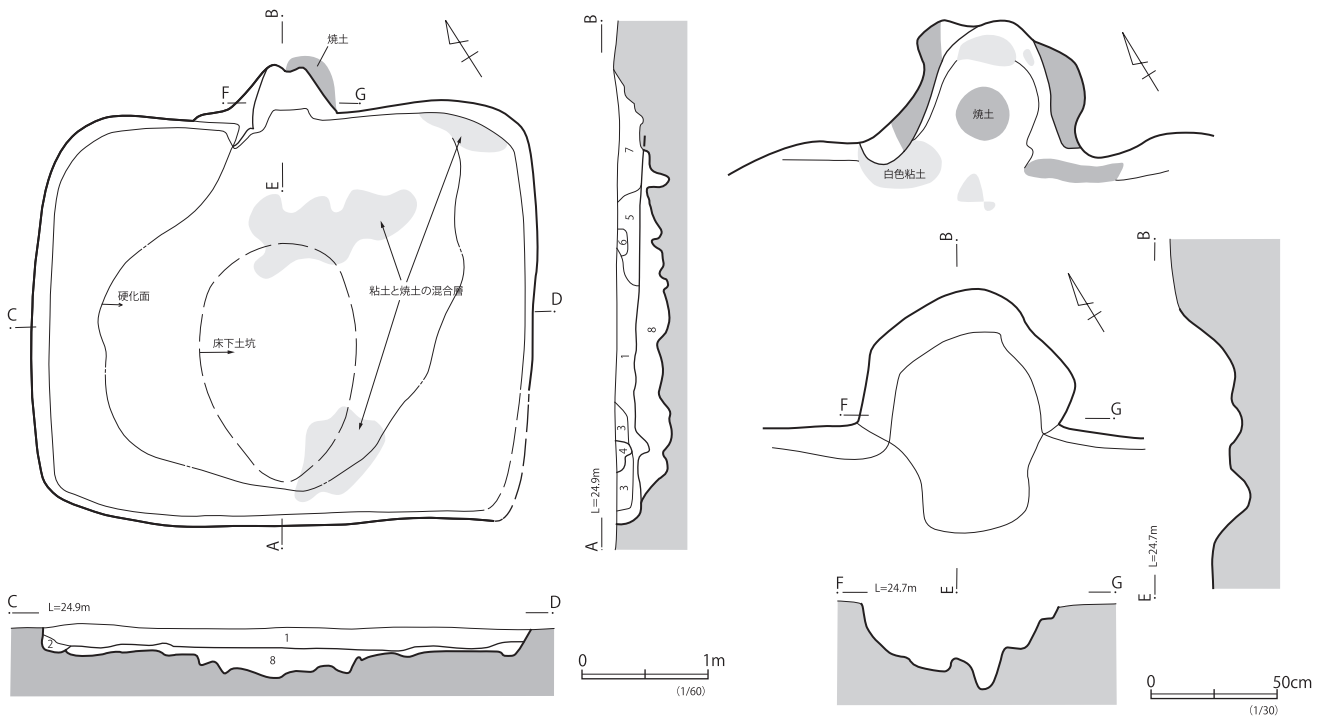
13 台帳：No.2 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部15% 法量：口径（11.7）色調：口縁部橙色，胴部外面明褐色，胴部内面暗褐色 胎土：

礫（灰少），砂（透多，白褐少）技法等：口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ナデ。胴部内面横方向ナデ。胴部内面汚染。

第3号住居跡

遺構 第1号住居跡と重複しており，新旧は遺物からみて，第1号住居跡→第3号住居跡である。当住居跡の主軸方向は，N -33° - Eを測る。竪穴部の規模は南北3.2m，東西4.0mで，壁高は北壁18cm，東壁15cm，南壁19cm，西壁13cmを測る。壁周溝や支柱穴は認められなかった。床面は竈前から南壁中央にかけて硬化しているが，北壁付近では東側に硬化面が片寄るのが確認される。これは竈から東側が炊事場となるためであろう。床面上には部分的に粘土と焼土の混合層が堆積していた。これらは竈解体時に捨てられたものかもしれない。竈の遺存状況は悪い。竈内の焼土の位置からみて，掛け口は北壁外に位置したものと考えられる。住居掘形は，竪穴部土層断面でみると，全体的に掘り込まれるタイプのものである。竪穴部覆土は暗褐色土を基調とし，自然埋土と思われる。

遺物出土状況 竈内及び床面付近より遺物が出土している。杯6は完形であり，住居南東隅壁下より2つに割れて出土した。体部外面に大きく「□（百カ）」と墨



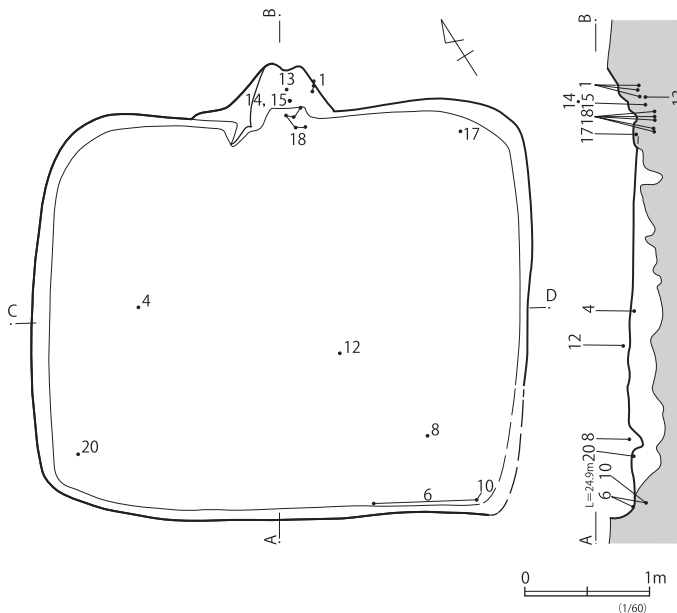
土層説明

AB・CD 土層断面

- 1 暗褐色 ローム粒含む
- 2 明褐色 ローム粒・ローム小ブロック多量に含む
- 3 暗褐色 白褐色粘土粒やや多量に含む 白褐色粘土ブロック含む 焼土少量混じる

- 4 黒褐色
- 5 暗褐色 白褐色粘土混じる 焼土粒含む
- 6 白褐色 白褐色粘土
- 7 暗褐色 ローム粒・白褐色粘土粒含む
- 8 黒褐色 黒褐色土とロームブロックの混合層 しまりあり 住居掘形埋土

第 61 図 堀口遺跡第 15 次調査区第 3 号住居跡



第 62 図 堀口遺跡第 15 次調査区第 3 号住居跡遺物出土状況

書されている。砥石 20 は、かなり使用痕が残るが、全体形はよく残している。住居南東隅から出土した。遺物出土状況図では床面出土のようにみえるが、床面からやや浮いて出土しているので、おそらく住居廃絶後に投棄されたものであろう。竈内からは 1・13・14・15・18 が出土するが、いずれも破片であるので、竈補強材とし

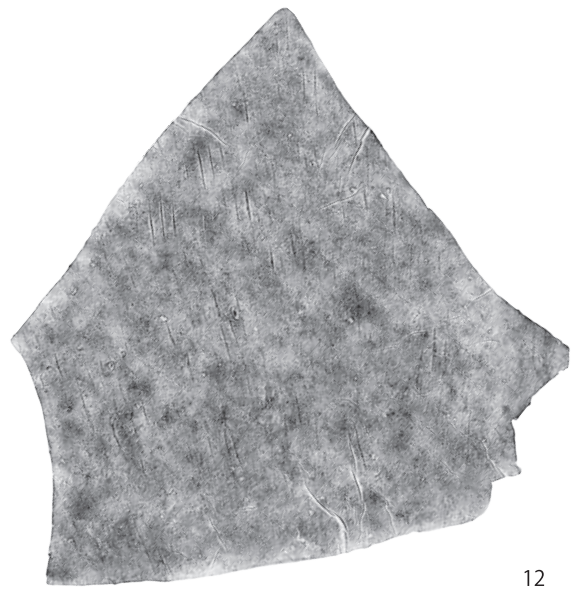
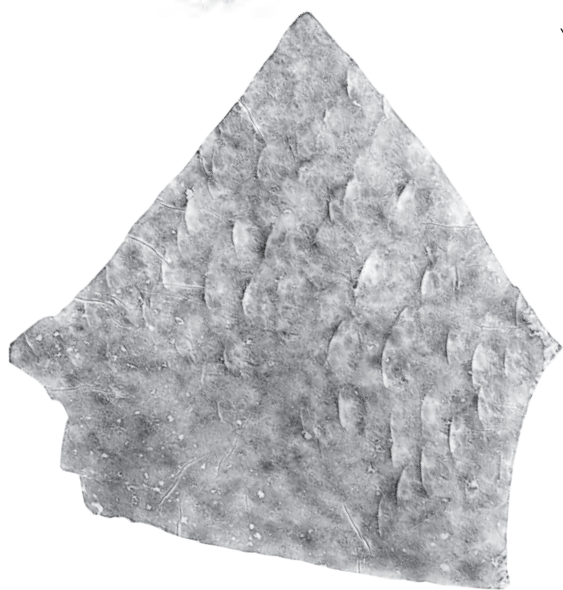
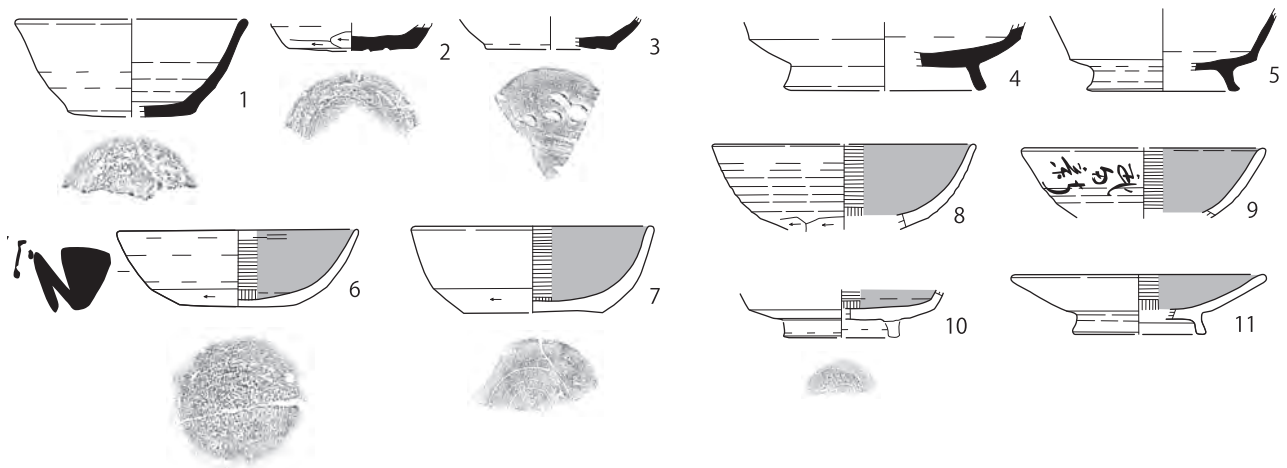
て用いられたものである可能性は高い。

土器は、須恵器杯の形、土師器杯の調整技法、土師器有台杯や椀の存在などからみて、9 世紀第 2 四半期頃に位置づけられる資料であろう。当住居跡の廃絶時期もその頃になると考えられる。

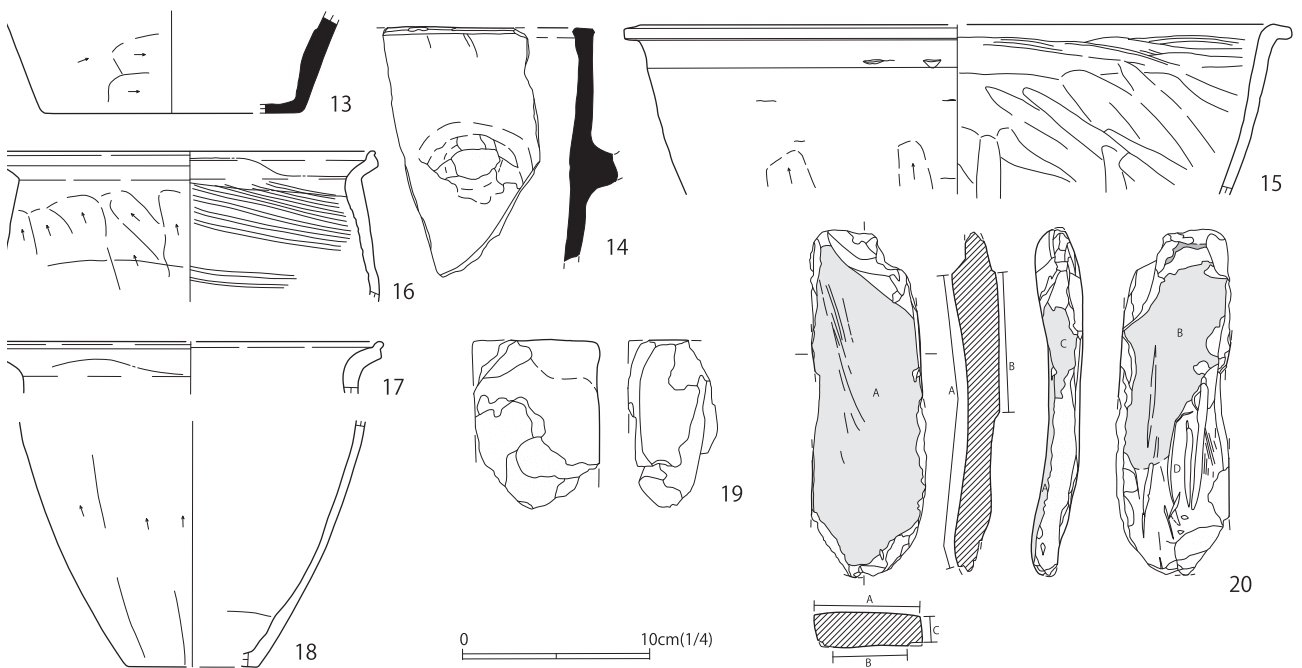
遺物説明

第 63 図

- 1 台帳:P26・28・29, カマド No.1 材質:須恵器 器種:杯 残存:40% 法量:口径(12.0), 器高 5.2, 底径(6.8) 色調:外面橙褐色・褐色, 内面橙色・灰褐色 胎土:砂(白透, 灰少), 骨針 技法等:2 次焼成。内外面に焼土付着。底部外面摩滅。備考:木葉下産か
- 2 台帳:No.3・9 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周 45% 法量:底径(6.7) 色調:褐色 胎土:礫(灰少, 白少, 白透少), 砂(白), 骨針多 技法等:回転ヘラ切り。焼成硬質。備考:木葉下産か
- 3 台帳:No.10 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 40% 法量:底径(6.6) 色調:暗灰色 胎土:砂(白透), 白雲母多 技法等:外面底部 1 方向・体部下端手持ちヘラ削り。焼成軟質。
- 4 台帳:P1, No.4 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部 40%(高台部 30%) 法量:高台径(10.0) 色調:灰色 胎土:礫(白



12



第63图 堀口遺跡第15次調査区第3号住居跡出土遺物

多, 灰少), 骨針少 技法等: 底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。高台設置面が摩滅。

5 台帳: №2・4 材質: 須恵器 器種: 有台杯 残存: 底部外周 15%, 体部下半若干 法量: 高台径 (7.6) 色調: 灰色 胎土: 礫 (白), 砂 (白), 黒色吹き出し 技法等: 焼成硬質

6 台帳: P6・8, 表土№1・2 材質: 土師器 器種: 杯 残存: ほぼ完形 (体部下半若干欠失) 法量: 口径 12.6, 器高 4.1, 底径 6.2 色調: 外面黒色・暗褐色・明褐色, 内面黒色 胎土: 礫 (白透, 白少), 黒雲母少 技法: 外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理。体部外面横位墨書「□ (百カ)」。外面煤ける。口縁部内面摩滅顕著。

7 台帳: №13 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 底部 40%, 体部 10% 法量: 口径 (12.5), 器高 4.6, 底径 (7.4) 色調: 外面褐色, 黒色, 内面黒色 胎土: 一 技法等: 外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理。備考: 破片№1 は床面出土

8 台帳: P7 材質: 土師器 器種: 椀 残存: 体部 30% 法量: 口径 (13.8) 色調: 外面褐色・口縁部黒色, 内面黒色 胎土: 黒雲母細片多, 骨針多 技法等: 外面体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部 1 方向?)・黒色処理。口縁部内面摩滅。

9 台帳: №2 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 体部 20% 法量: 口径 (12.7) 色調: 外面褐色, 内面黒色 胎土: 砂 (白, 白透), 黒雲母少 技法等: 内面ヘラミガキ・黒色処理。体部外面横位墨書「武田新」。

10 台帳: P8 材質: 土師器 器種: 有台杯 残存: 底部 50% (高台部 15%) 法量: 高台径 (5.6) 色調: 外面明褐色, 内面黒色 胎土: 細砂 (白透) 技法等: 底部中央に静止糸切り痕残る。内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理。

11 台帳: №1 材質: 土師器 器種: 有台皿 残存: 底部外周 30%, 体部 10% (口縁部若干) 法量: 口径 (13.2), 器高 3.2, 高台径 (6.8) 色調: 外面褐色・明褐, 内面黒色 胎土: 砂 (白透) 技法等: 内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理。

12 台帳: P4 材質: 須恵器 器種: 甕 残存: 胴部片 法量: 一 色調: 灰色 胎土: 礫 (灰多, 白多, 白透), 骨針少 技法等: 外面平行線文叩き。内面円形無文当て具痕。備考: 木葉下窯産か。

13 台帳: №1 材質: 須恵器 器種: 鉢? 残存: 胴部下端 10%, 底部外周 20% 法量: 底径 (13.5) 色調: 外面灰褐色・黒灰色, 内面黒灰色 胎土: 砂 (白, 白透), 白雲母多 技法等: 胴部外面横方向ヘラ削り。胴部内面縦方向ナデ。

14 台帳: P21 材質: 須恵器 器種: 甕 残存: 上半部片, 把手先端部欠失 法量: 一 色調: 灰色 胎土: 礫 (灰少), 骨針 技法等: 外面に把手が付く。内外面ヨコナデ。焼成やや軟質。口縁端部摩滅。備考:

木葉下窯産か

15 台帳: P20 材質: 土師器 器種: 鉢 残存: 口縁部 15% 法量: 口径 (33.7) 色調: 外面橙褐色・暗褐色, 内面茶褐色 胎土: 砂 (透, 白褐), 角閃石・輝石類 技法等: 内面胴部上端横方向ヘラナデ後、胴部斜方向ナデ。外面胴部叩き整形? の後ナデ。その後胴部下半縦方向ヘラ削り。口縁部ヨコナデ。口縁部内面汚染。

16 台帳: P11, №1 材質: 土師器 器種: 甕 残存: 口縁部 20% 法量: 口径 (19.4) 色調: 外面から口縁部内面にかけて橙色。頸部内面黒褐色。胴部内面暗褐色。胎土: 礫 (透少, 白褐少, 灰少), 砂 (透多, 白褐少) 技法等: 口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラ削り。胴部内面横方向ヘラナデ (木目状の擦痕残る)。胴部外面白褐色粘土付着。内面頸部以下汚染。

17 台帳: №2 材質: 土師器 器種: 甕 残存: 口縁部 10% 法量: 口径 (20.1) 色調: 褐色 胎土: 礫 (白多, 白透多), 白雲母多 技法等: 内外面ヨコナデ。外面に白褐色粘土付着。

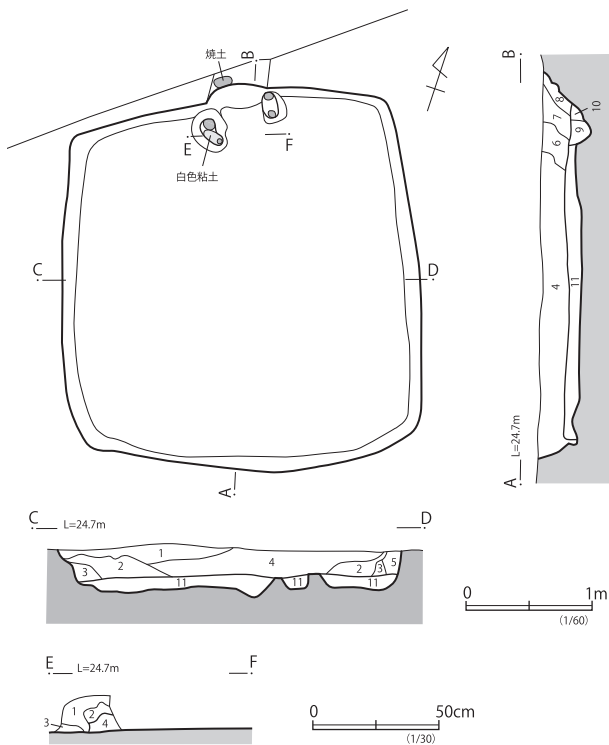
18 台帳: P14・17・23・24・30, №2, カマド№1・2 材質: 土師器 器種: 甕 残存: 胴部下半 30% 法量: 底径 (6.9) 色調: 内面・底部外面黒色・黒褐色, 胴部外面褐色・橙褐色 胎土: 礫 (白透多, 灰少) 技法等: 胴部外面縦方向ヘラ削り。胴部内面ナデ? (不明瞭)。内面と破面に焼土が付着し、内面から底部外面にかけて破面を含め煤けている。備考: 全体的に火を受けているようであり、竈材に転用された可能性がある。

19 台帳: №1 材質: 石 (凝灰質泥岩) 器種: 竈材 残存: 破片 法量: 一 色調: 白褐色主体。部分的に赤褐色 特徴: 非常に軟質。

20 台帳: S1 材質: 珪質頁岩 器種: 砥石 残存: 周囲を細かく欠失する 法量: 長 18.3, 幅 6.0, 厚 2.3, 重量 360.5 g 色調: 緑灰色 技法等: 3 面使用。A 面と D 面に刻線あり。とくに D 面には幅 3~4 mm の沈線状の研磨痕がみられる。B 面にも浅い沈線状の研磨痕がある。備考: 「珪質頁岩。帯褐緑灰色, 薄い葉理が発達。ごく細粒できめが細かい。石英 ++, 白雲母, 不透明鉱物。外形は長板状で 3 面に研磨, 1 面に叩きによる調整痕あり。1 面の研磨部には溝状の削り痕が数条。端部にわずかに被熱? による赤褐変色。砥石としては鳴滝砥様の質の良い岩石。中生界? 産地不明。」(矢野徳也氏による)

第 4 号住居跡

遺構 他遺構との重複はない。当住居跡の主軸方向は N -19° - W を測る。竪穴部の規模は南北 3.0m, 東西 2.8m で, 壁高は北壁 15cm, 東壁 20cm, 南壁 25cm, 西壁 24cm を測る。壁周溝や主柱穴は認められなかった。床面は全体的に硬化するが, 特に硬い面は認められな



土層説明

AB・CD 土層断面

- 1 暗褐色 黒褐色土混じる ローム粒含む
- 2 褐色 ローム粒含む
- 3 褐色 ローム粒やや多量を含む
- 4 暗褐色 ローム粒含む
- 5 暗褐色 黒褐色土混じる
- 6 暗褐色 炭化物粒・焼土粒・白褐色粘土粒含む
- 7 明褐色 焼土と白褐色粘土が多量に混じる 炭化物粒含む
- 8 暗灰褐色 炭化物粒・ローム粒含む
- 9 明褐色 ロームブロック・黒色土多量を含む
- 10 明褐色 ローム粒多量を含む 黒色土粒含む
- 11 黄褐色 ロームブロックと黒色土の混合層

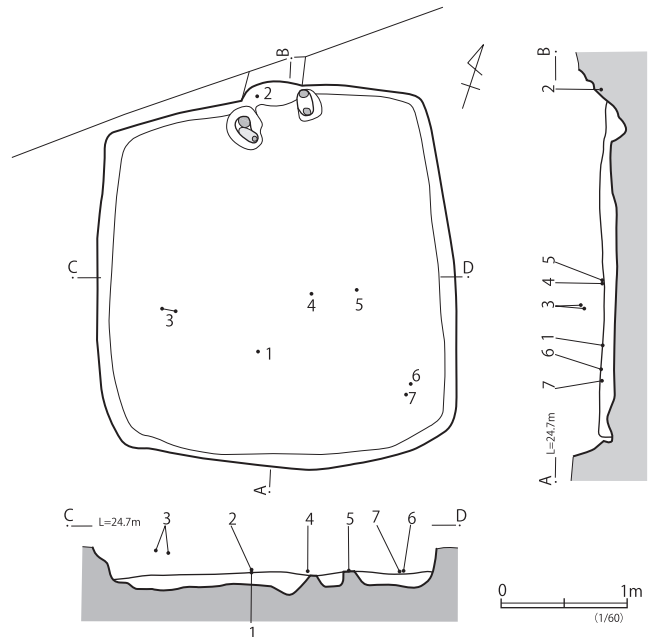
EF 土層断面

- 1 白褐色 白褐色粘土
- 2 橙色 第1層が焼けた土
- 3 明褐色 白褐色粘土粒多量を含む
- 4 褐色 焼土粒・白褐色粘土粒やや多量を含む

第64図 堀口遺跡第15次調査区第4号住居跡

かった。竈は遺存状況が悪く、部分的に白色粘土や焼土がみられる程度である。西側の竈袖部が比較的良好に残っていたので、その部分で土層断面図を作成している。住居掘形は、竪穴部土層断面でみると、全体的に掘り込まれるタイプのようなのである。竪穴部覆土は暗褐色土を基調としており、自然埋土と思われる。

遺物出土状況 床面より、てづくね土器1、竈材と思われる焼けた礫4、台石5・6、敲石7が出土している。また、やや西寄りのところから、土製支脚2が立ったまま出土している。鉄鎌3は床上15cmほどから出土しているので、住居埋没時の廃棄品であろう。



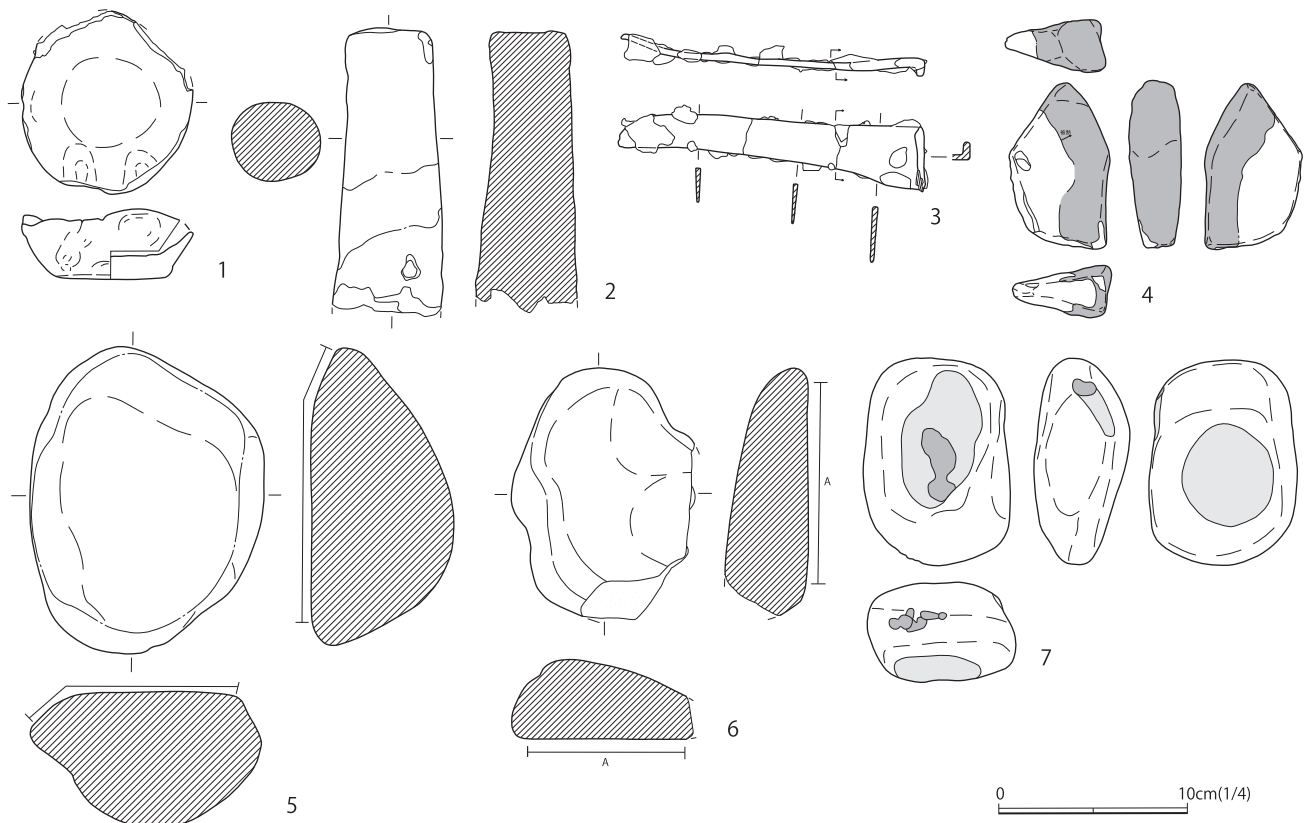
第65図 堀口遺跡第15次調査区第4号住居跡遺物出土状況

遺物の時期は不明であるが、覆土中から出土した土器小片はほぼ土師器片であるが、1点だけ須恵器大甕片が含まれている。土師器小片の中には常陸型甕も数点認められる。須恵器供膳器がみられない点は古墳時代的であるが、常陸型甕の存在を考慮すると7世紀後半から8世紀初頭頃の遺物群になるのかもしれない。当住居跡の廃絶時期もその頃であろうか。

遺物説明

第66図

- 1 台帳：P2 材質：土師器 器種：杯（手づくね土器） 残存：口縁部40%欠失 法量：口径8.8、器高3.4、底径5.8 色調：灰色、灰黒色 胎土：砂（透、灰少） 技法等：体部内面から口縁部外面にかけて横方向ナデ。底部内面不定方向ナデ。底部外面軽いナデ。体部外面に指頭圧痕。焼成軟質。
- 2 台帳：P1 材質：土師器 器種：支脚 残存：基部欠失 法量：残存長14.7、先端部径4.0 色調：黒色、灰色、橙褐色 胎土：— 技法等：上半部が煤けて黒色を呈している。
- 3 台帳：I1・2 材質：鉄 器種：鎌 残存：ほぼ完形 法量：長16.1、中央部幅2.0、基部幅3.4、重さ47.5g
- 4 台帳：S3 材質：粗粒砂岩 器種：竈材か 残存：若干欠失 法量：17.6×10.6×5.4、重量985.4g 色調：灰褐色、被熱部は茶褐色 使用痕：片側が茶褐色に変色しており、火を受けたものと思われる。被熱範囲からみて竈焚口の補強材かもしれない。備考：「粗粒砂岩（アルコーズ質）。帯褐灰白色、淘汰やや悪い。塊状。砂粒の円磨やや悪い。強く固結。



第 66 図 堀口遺跡第 15 次調査区第 4 号住居跡出土遺物

砂粒;石英(灰,透,白)++,長石。岩片(チャート)。円磨されたチャートの細礫を含む。外形はくさび板状の自然礫(亜角礫)。被熱による弱い変色あり。白亜系?(那珂湊層群?)。(矢野徳也氏による)

5 台帳:S4 材質:デイサイトもしくは安山岩 器種:不明 残存:完形 法量:16.2×12.3×7.5 重量1943.6g 色調:褐色 使用痕:平坦面が平滑化し、やや光沢を帯びる。備考:「デイサイト乃至安山岩。赤褐灰色,斑晶。石基は塊状で隠微晶質。斑晶;石英(β-石英),長石,長柱状変質有色鉱物(外形は短柱状)。石基は微粒物質で変質を受けている。外形は亜円礫の大礫で自然礫。類三角錐形の底部はやや凹み研磨がみられる。全体に被熱による弱い黄褐~赤褐変色。」(矢野徳也氏による)

6 台帳:S2 材質:流紋岩 器種:不明 残存:一部が大きく欠失 法量:13.2×9.5×4.2,重量776.2g 色調:明褐色 使用痕:平坦なA面がやや摩滅する。備考:「流紋岩(珪化変質)。帯褐白色。斑状,流理が発達。石基は細粒で珪化変質が進んでいる。流理は明色,暗色の2相の縞状構造からなり,暗色部は緑色に変質。斑晶;長石+,石英,微粒の暗緑色鉱物に置換された鉱物。石基;白色微粒物質,暗緑色微粒物質。外形は厚い小判形の亜円礫,一部欠損。水酸化鉄様の黄褐色物質が一部に付着。被熱による変色?第三系~白亜系?産地不明。(群馬~栃木~福島)(源岩は茨城県内に産せず,河川礫としては産する)」(矢野徳也氏による)

7 台帳:S1 材質:中粒砂岩 器種:敲石 残存:完形 法量:10.9×7.6

×4.9,重量593.6g 色調:灰褐色 使用痕:4カ所に敲打痕(A・C・Fは深く、B・D・Eは浅い)。備考:「中粒砂岩(アルコース質)。帯褐灰白色,塊状,淘汰やや良い,円磨やや悪い。強く固結。石英(白,透,灰)++,長石,岩片(チャート)。外形は類箱形の自然礫(亜円礫)。2面に敲打痕あり。中生界(産地不明)。」(矢野徳也氏による)

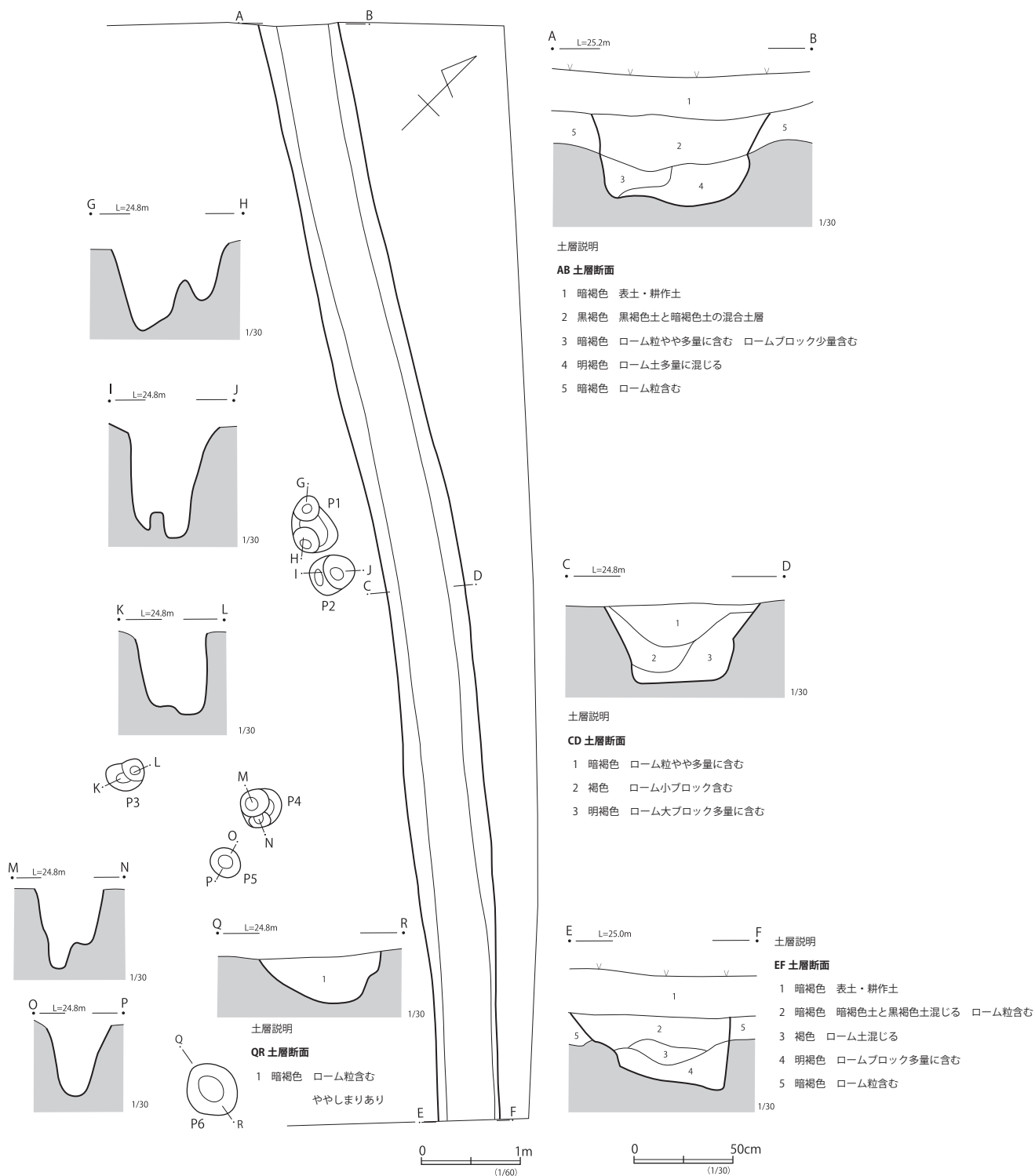
(4) 溝跡・ピット

第1号溝跡

調査区北東部で検出された溝である。幅0.8m,深さ0.4mを測る。底面の高さは南東から北西へと少しずつ低くなっており,調査部分両端での比高差は33cmである。また溝底面は硬化していなかった。溝覆土をみると,すべての土層断面において,下層部に北東方向から,ローム土が多く混じる土が流れ込んでいる。おそらく溝掘削の際の土を,溝の北東側に盛土したものが,崩壊して溝内に流れ込んだのではないかと考えられる。なお,出土遺物がなかったため,当溝の時期は不明である。

ピット

ピットは第1号溝跡の南方から6基ほど検出された。ピットに規則的な配置は見いだせないが,P1~4では複数のピットの重複が認められるので,柱の建て替えが



第 67 図 堀口遺跡第 15 次調査区第 1 号溝跡およびピット

あったようである。いずれのピットも時期を決定できる出土遺物はなかった。

IV 柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利 E 式」の集落跡について (続)

1. はじめに

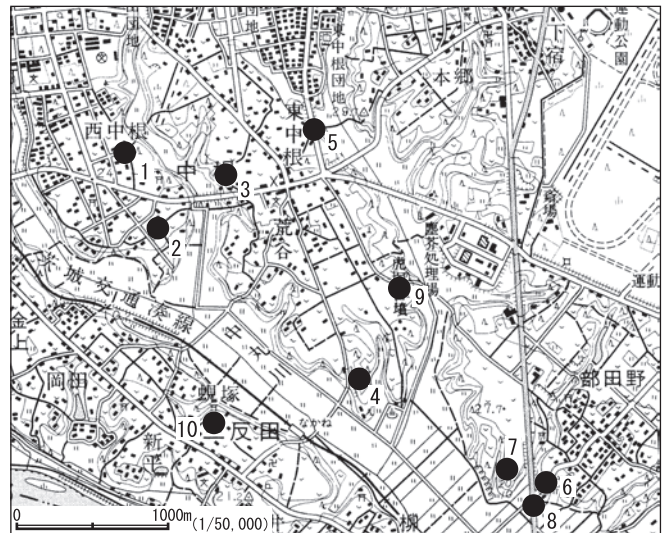
柴田遺跡の第 4 次調査は、第 3 次調査の北側に隣接する地点を対象に実施された。この調査で検出された縄文時代中期の第 2 号住居跡も「加曽利 E 4 式」と推定され、「柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利 E 式」の集落跡は、「加曽利 E 3 式」と「4 式」とで、地点を変えて形成されている」[鈴木 2014]ことを追認した。一方で、第 1 号住居跡は、縄文時代後期「称名寺式」と推定され、後期初頭の集落跡も重複するという新たな知見が得られている。

本稿は、柴田遺跡を起点として検討を進めている、中丸川流域における縄文時代中期後葉の遺跡群についての続編である。まずは、柴田遺跡と同じく大川流域に形成された石光遺跡を紹介する。次に、石光遺跡に近接する君ヶ台貝塚から、上ノ内貝塚、尼ヶ柵遺跡、釜神遺跡までの、柴田遺跡より東方向に展開する遺跡について既往の調査を概括するとともに、君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚の貝層を分析し、当該時期の貝塚形成について特徴を把握しておきたい。

2. 石光遺跡

柴田遺跡(第 68 図 1)と西中根遺跡(2)は、中丸川支流の大川の右岸に形成された遺跡であり、左岸には、「古くから石器多出するところから好事家の関心を集めて来た」[川崎他 1975]という、石光遺跡(3)が位置する。「検出された土器は縄文中期・加曽利 E 式から堀之内式に及ぶものであり、西中根遺跡、君ヶ台貝塚とほぼ同時期の所産となるものである。石光遺跡からは特に石器の出土が多く石棒・石皿・石斧・石錘、石鏃・石匙などがある」[鴨志田 1979]という記載もあるが、現在まで発掘調査は実施されておらず、資料が公表されたのは、1969 年の井上義による報告だけである。それには、縄文時代前期「浮島式」2 点、中期の「阿玉台式」2 点と「加曽利 E 式」14 点の破片が拓本で掲載されていた[井上 1969]。

石光遺跡を訪れていた「好事家」の 1 人ということに



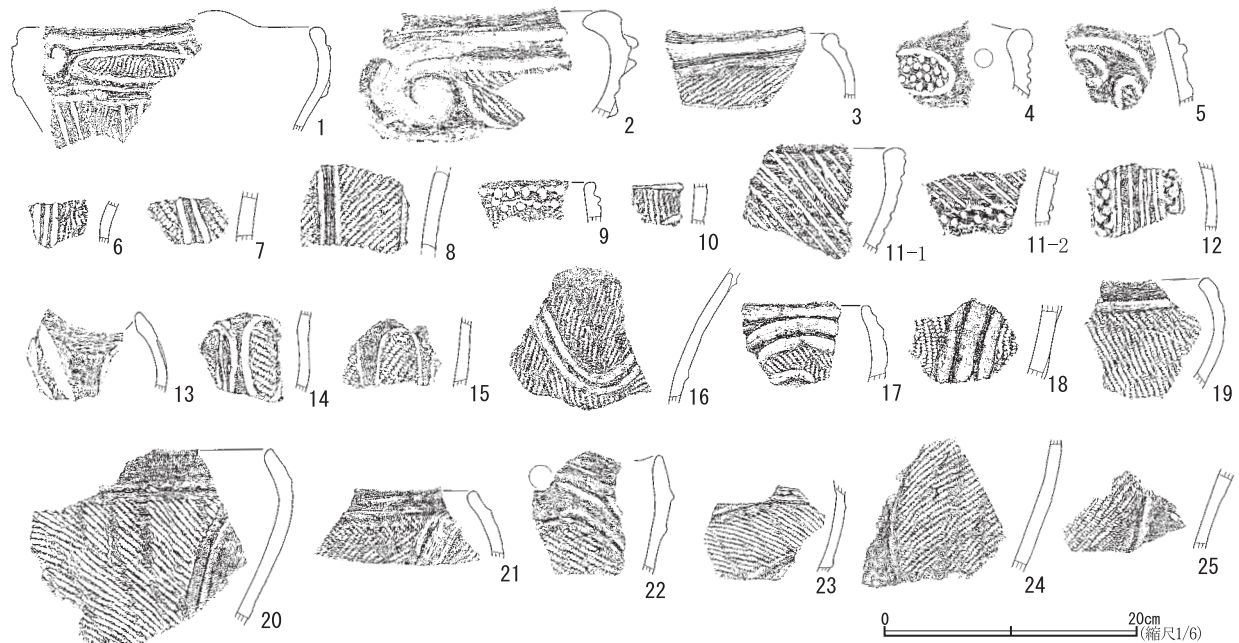
1. 柴田遺跡 2. 西中根遺跡 3. 石光遺跡 4. 館出遺跡 5. 君ヶ台貝塚
6. 上ノ内貝塚 7. 尼ヶ柵遺跡 8. 釜神遺跡 9. 下原遺跡 10. 三反田蛭塚貝塚

第 68 図 遺跡の位置

なるのであろう、高瀬正夫^{註1}により採集された資料がひたちなか市埋蔵文化財調査センターに寄贈されており、その中から「加曽利 E 式」の土器を掲載する(第 69 図)。この資料には、「加曽利 E 2 式新段階」「3 式古段階」「3 式新段階」「4 式古段階」の各時期の土器が含まれており、井上が掲載した「加曽利 E 式」を追認するとともに、細別段階の一部を補足することができる。

後期も重複することから中期に限定はできないものの「石棒・石皿」が採集されており、石光遺跡についても、集落跡を想定してよいのであろう。柴田遺跡、西中根遺跡と同じく中期の貝塚は確認されておらず、大川流域に形成された「加曽利 E 式」の集落跡には貝塚が伴わないと見られる。これは、台地の先端部付近に位置し、「加曽利 E 2 式新段階」の住居跡が調査された館出遺跡(第 68 図 4)を大川の左岸として括っても変わらない[川崎他 1975]。

石光遺跡では、井上が 1 点を採集し、「石錘の豊富さが注目される」[鴨志田 1979]と記載があるように、高瀬の資料にも 19 点の礫石錘が含まれていた^{註2}。対して土器片錘は、記載がなく、高瀬の資料にも全く含まれていない。今後発掘調査の機会があれば、この現象の当否を見極めることも課題となろう。君ヶ台、上ノ内、三反田蛭塚貝塚では、礫石錘とともに、土器片錘が多量に出土しているのである。



第 69 図 石光遺跡採集土器 (高瀬正夫氏採集, 大和田恵子氏寄贈資料)

3. 君ヶ台貝塚の形成

君ヶ台貝塚は、石光遺跡から北東方向へ 500 m 余りと近くに位置する (第 68 図 5)。この距離は、東中根台地の幅であり、君ヶ台貝塚は、中丸川支流でも本郷川の右岸に形成されている。9 次に及ぶ発掘調査については、既に概括してあるので [鈴木 2014]、今回は、第 6 次調査で報告された台地北側斜面の貝塚を対象に分析を進める。

貝塚は、工事で削られた斜面に、東西の幅約 6 m、高さ約 4.5 m で断面が露出していた^{註 3}。台地の縁辺を挟む谷状の地形に貝層が堆積しており、その西側に偏在する。地山にほぼ接して 50° の急傾斜を埋めるように堆積が進行していることは、地崩れが形成した谷状の窪みを埋めるように貝殻等の投棄が繰り返されたことを想像させる。また、断面においてほぼ水平な堆積が見られる貝層 1～4 と、左下がりの堆積が見られる貝層 5・6 という堆積方向の変化からは、貝層 4 の後にも、以前の貝層を削るような地崩れが起きたことが推定され、その窪みを埋めるような貝殻等の投棄が再び繰り返されたと考えられる。まずは、このような貝塚形成の地点選択と、規則的に混貝土層 (第 70 図では「土層」と表記) の間層を挟む貝層の堆積を、特徴として捉えておきたい。

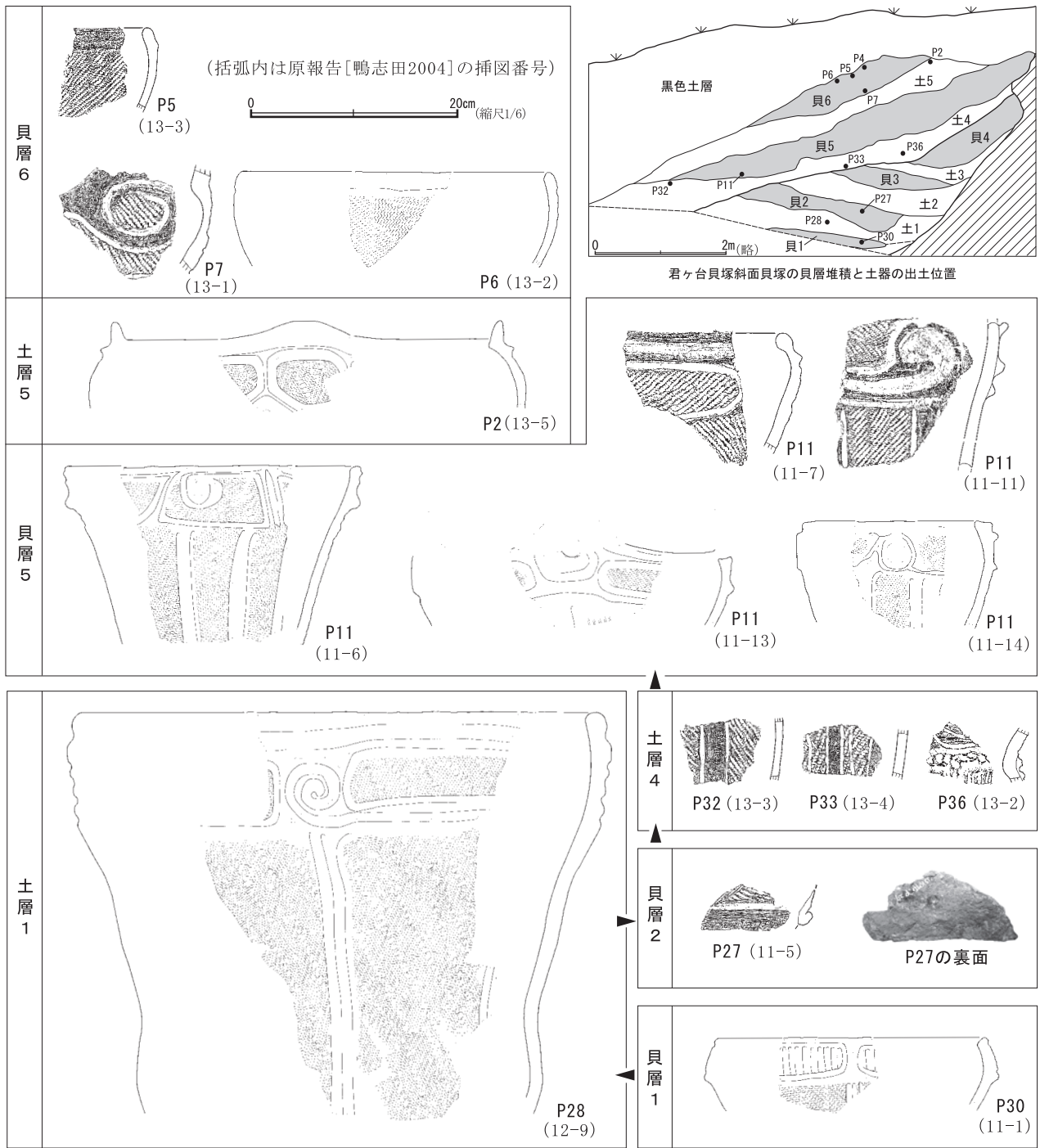
貝層に露出していた土器については、断面図に位置を記録して採取されたので、これをもとに貝層の堆積時期を検討することができる。「1 類 口縁部と胴部とに区

分される文様構成の土器」[鈴木 2014] が主体であり、「加曾利 E 2 式古段階」から「加曾利 E 3 式古段階」までを区分する指標のうち胴部文様について、典型を次のように規定して観察する。

加曾利 E 2 式古段階 胴部全体に縄文が施文される。縦回転を基本とするが、やや斜め方向に回転施文されるものも少なくない。懸垂文と呼ばれる縦位の沈線文が、縄文の上に施文される。これは、4 単位を基本として、その倍数の 8 単位もある。沈線は 2 本もしくは 3 本を単位として施文され、沈線の間隔は狭く、そこには磨消されずに縄文が残る。

加曾利 E 2 式新段階 縄文と懸垂文の施文、その順序も「古段階」と変わらない。縄文の施文が先行することは、やや斜め方向に回転施文された縄文が、懸垂文に規制されず連続することから読み取れる。懸垂文の沈線間は磨き調整され、縄文が消されている。これは、磨消縄文が成立した段階である。

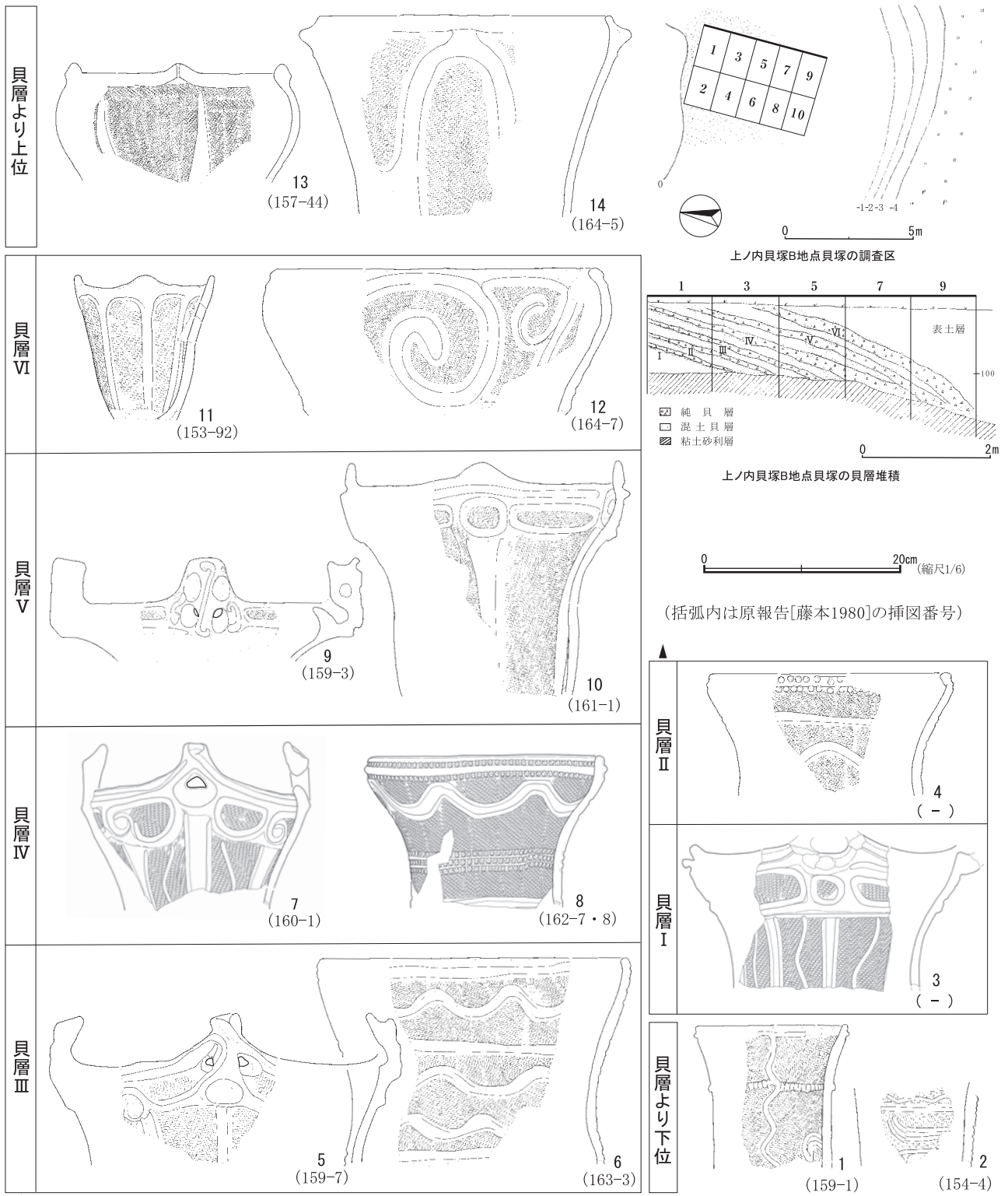
加曾利 E 3 式古段階 おそらくは下書きの沈線があって、これが区画した範囲にのみ縄文が施文される。その後には縄文を区画する仕上げの沈線を施文、沈線間は調整されている。磨消縄文から変化して、充填縄文が成立した段階であり、以後の「加曾利 E 式」は、充填縄文を採用している。縄文を囲うように沈線の上端が連結した区画が出現しており、これは、懸垂文から区画文への変化と表現できよう。区画され交互に配置される縄文帯と無



第70図 君ヶ台貝塚第6次調査斜面貝塚出土土器

文帯には、8単位を超えるものが見られるようになる。
 君ヶ台貝塚の貝層1にはP30が含まれており、これは、「磨消縄文」の成立以前であることから、「加曾利E2式古段階」である。貝層1が最下位の貝層とは確定できておらず、さらに下位に貝層が埋没していることも推定されるが、貝塚が形成された時期は、少なくとも「加曾利E2式古段階」までは遡る。土層1のP28が「加曾利E2式新段階」であり、貝層2から貝層4までは、この時期に堆積したものと推定される。これは、第

8次調査で確認された住居跡の時期に相当する。さらに「加曾利E2式新段階」の貝層が堆積していたのかもしれないが、地崩れにより削られて、痕跡は残されていない。貝層5と貝層6は「加曾利E3式古段階」であり、上下の土層にも小破片が混じる。これは、第2次調査で確認された1号遺構・3号住居址の時期に相当する。貝層5は1号遺構に、土層5と貝層6は3号住居址に、土器群の特徴がよく一致している。この貝層6が最上位の貝層であり、第2次調査で確認された4号住居址の「加



第71図 上ノ内貝塚B地点貝塚出土土器

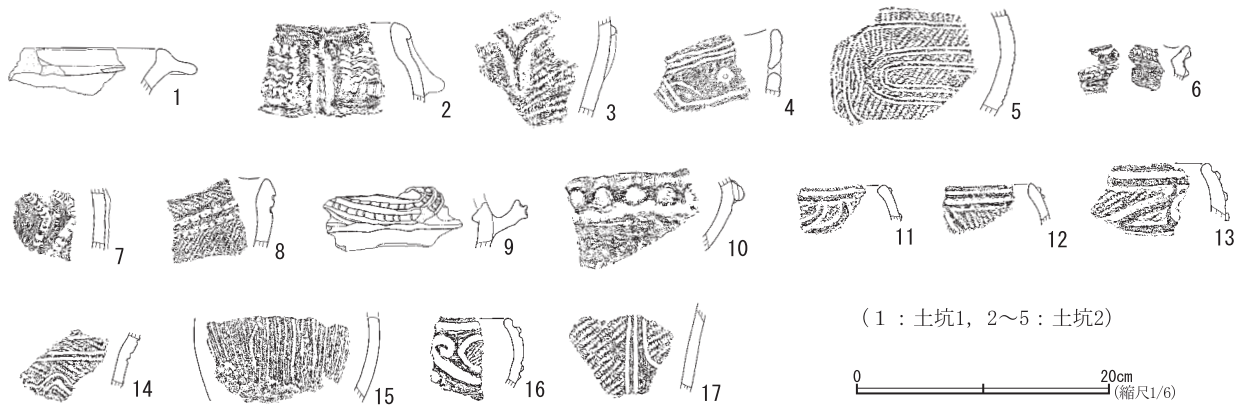
曾利E 4式古段階」及び「4式新段階」に相当する貝層は見られない。台地上の遺構内に地点貝塚が形成されたのは、「加曾利E 3式古段階」と「4式古段階」であり、ごく小規模な貝塚に姿を変えつつ、君ヶ台貝塚における貝塚の形成は終了している。

貝塚を構成する貝類の組成については、上ノ内貝塚と

比較しながら後述する。

4. 上ノ内貝塚の形成

上ノ内貝塚は、本郷川の左岸に相当する台地の連続ではあるが、君ヶ台貝塚から南西方向へ5.5 kmほどの距離を隔て、もはや広い低地と中丸川を見晴らす位置にある



第72図 尼ヶ柵遺跡第2次調査出土土器

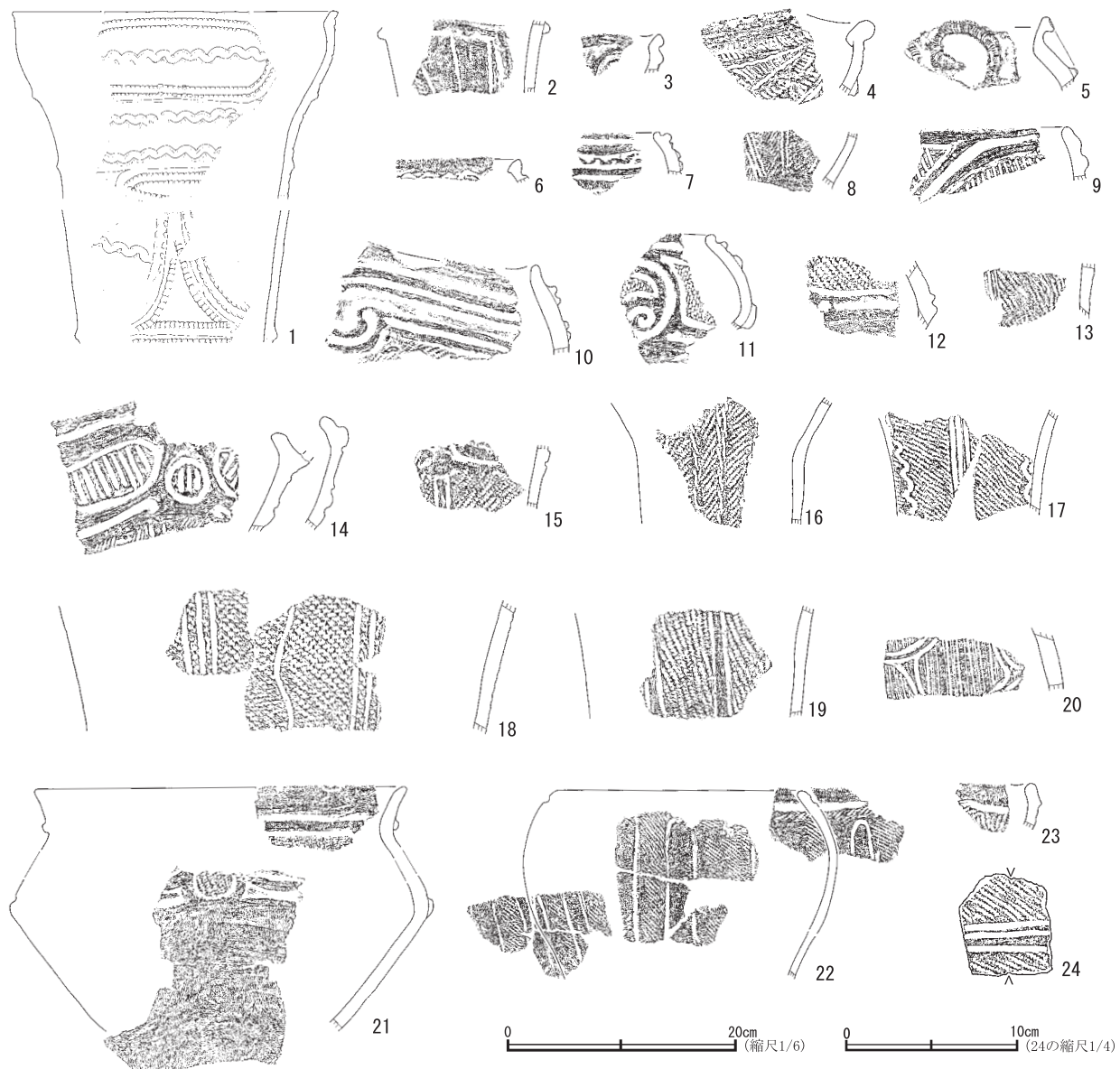
(第68図6)。部田野地区には、藤本弥城により部田野A～Dと仮称された4つの貝塚が集合し、そのうち部田野A貝塚が宮前貝塚、部田野B貝塚が上ノ内貝塚という名称で、発掘調査が報告されている[藤本1980]。斜面に形成された上ノ内貝塚も、さらに2地点に分かれて貝塚が分布し、台地に近いA地点と、低地に近いB地点がある。今回は、藤本により1971年に発掘調査が実施されたB地点貝塚を対象に分析を進める。

B地点貝塚は、標高12m前後、低地の水田面との比高差が4mほどの緩斜面にあったという。貝層の広がりには「約4×6m」、斜面の傾斜に合致した南北方向のみ断面図が報告されている。A地点貝塚については、「傾斜面の凹地に形成された」という所見が記述されているが、B地点貝塚についても、下底面に地山の「褐色粘土砂利層」が露出し、1mを超える厚さの貝塚が地表を隆起させることなく堆積していることから、地崩れの窪みに形成されたことが考えられよう。このような貝塚形成の地点選択は、君ヶ台貝塚に共通している。また、B地点貝塚では、貝層Ⅰ～Ⅵが規則的に土層を挟んで堆積していることも、君ヶ台貝塚によく似ている。君ヶ台貝塚と異なるのは、間層が黒色土ではなく、地山の「褐色粘土層」であること。これは、君ヶ台貝塚が台地際の急崖斜面、上ノ内貝塚が緩斜面の裾部という立地の違いによるのであろう。君ヶ台貝塚では、台地上から当時の表土が供給されていたことが想定されるのである。

藤本は、発掘調査の所見として「これらの層から加曽利E2式・3式(4式か)が層位をなして出土した」[藤本1973]と記述したが、個々の土器の出土位置は報告に明記されなかった。藤本の資料は、ひたちなか市埋蔵

文化財調査センターに収蔵されているので、土器の内面に鉛筆書き等で書かれた出土位置の注記を頼りに、その層序に従い配列することで、貝層の堆積時期を検討することにした。上ノ内のB地点貝塚では、貝層堆積以前の層序に縄文時代中期中葉「大木8a式」が出土しているが、この量は僅かである。貝層Ⅰから貝層Ⅴまでは、「加曽利E2式新段階」に堆積したものと捉えられた。貝層Ⅵのみ「加曽利E3式」であり、ここには「3式古段階」と「3式新段階」が混在する。貝層堆積より上位の土層からは「加曽利E3式古段階」と「3式新段階」、さらに「4式古段階」が主に出土している。上ノ内のA地点貝塚も「加曽利E2式新段階」と「加曽利E3式」に形成されたものらしく、貝塚の形成期間も、君ヶ台貝塚に並行した時期にある。上ノ内貝塚より北方向200mに位置する部田野C・D貝塚は、台地上の「加曽利EⅣ式を出土する小貝塚」と記述されており、これを含めた縄文時代中期の貝塚の消長にも一致を見るのである。

藤本の資料には礫石錘が20点、土器片錘が36点ある。礫石錘の注記からは、貝層Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵと、貝層より上位の包含層から、これが出土していることを知り得る。礫石錘が「加曽利E2式新段階」と「加曽利E3式」に伴うことは確実であるが、「加曽利E4式」については定かでない。また、土器片錘の素材とされた土器は、「加曽利E2式新段階」が最も多く、「加曽利E3式」もあるが、「加曽利E4式」は見られない。君ヶ台貝塚が「加曽利E4式」にも礫石錘と土器片錘を伴うのとは異なるあり方を示すのか、あるいは部田野C・D貝塚に、礫石錘や土器片錘が残されたのか、興味を持たれるところである。



第73図 尼ヶ柵遺跡採集土器 (高瀬正夫氏採集, 大和田恵子氏寄贈資料)

貝塚を構成する貝類の組成については、これも君ヶ台貝塚と比較しながら後述する。

5. 尼ヶ柵遺跡と釜神遺跡

上ノ内貝塚の周辺には縄文時代中期に、尼ヶ柵遺跡、釜神遺跡も形成されている。

尼ヶ柵遺跡 国道245号線が通る小さな谷を挟んで、上ノ内貝塚に対峙した台地上に位置する(第68図7)。藤本弥城により、上ノ内貝塚と同年の1971年11～12月に発掘調査が実施された[藤本1973]。「この遺跡は広大な分布を形成し弥生時代後期と古墳時代の遺物が各所に散在し、包含地または住居跡等をとらえることがむづかしい」という記述は、縄文時代の調査が目的

であったとも読める。調査の詳細な内容は報告されていない。これが尼ヶ柵遺跡の第1次調査に相当する。

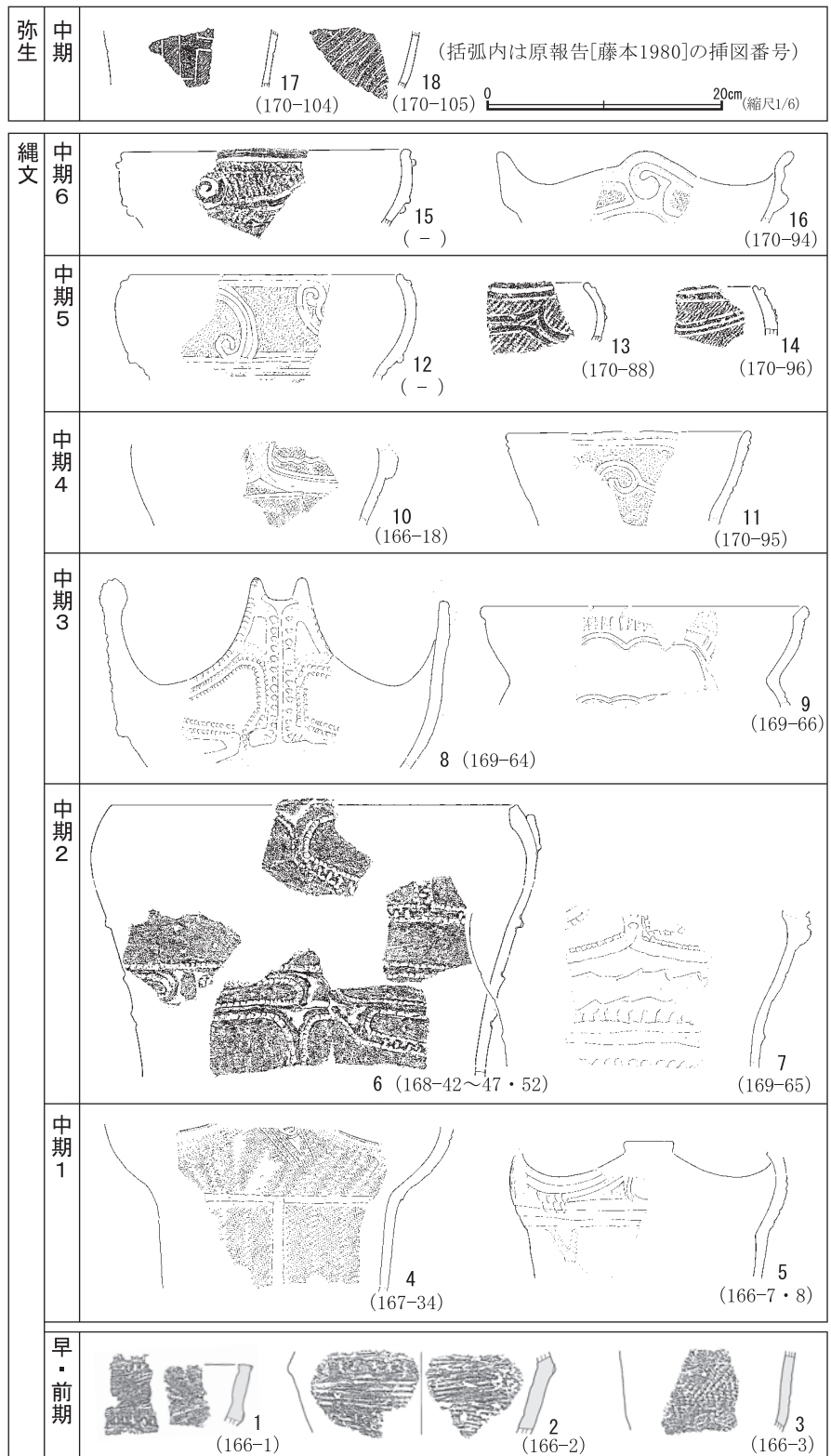
1999年に、ひたちなか市教育委員会が第2次調査を実施した。調査区の配置と検出された遺構の輪郭が図示され、縄文時代の遺物が遺跡の南側を中心に散布することは記述されたが、遺物が掲載されておらず、これも詳細な内容は報告されないままになっていた。出土した遺物を整理してみると、調査区3に設定された6トレンチの土坑1からは第72図1、土坑2からは2～5の土器片が出土しており、縄文時代中期中葉と推定される遺構の形成が明らかになった。その時期は「阿玉台Ⅲ式・大木8a式」と捉えられ、調査区からは、「加曾利E2式新段階」までの土器が出土している(第72図)。し

たがって、尼ヶ砦遺跡は、縄文時代中期でも上ノ内貝塚を遡る時期の遺跡と考えられた。礫石錘と土器片錘は出土していない。

高瀬正夫の資料にも尼ヶ砦遺跡が含まれていたため、これも主要なものについて掲載しておく(第73図)。「阿玉台Ⅱ-Ⅲ式」から「加曽利E2式新段階」までの土器を追認するとともに、「加曽利E3式」が含まれ、1点だけではあるが「加曽利E2式新段階」の土器片錘が抽出されたことを、知見として追加できる。

釜神遺跡 「上ノ内貝塚下の水田中の遺跡」として藤本が報告した遺跡であり、所在地の小字名から釜神遺跡という名称を付与する。上ノ内貝塚と尼ヶ砦遺跡を隔てる谷部にあり、上ノ内貝塚の台地下に位置する(第68図8)。「昭和46年11月末国道245号線の基礎工事中、水道管埋設に際し幅約2m、深さ約2mの溝が台地縁から直角に掘られ、多量の土器破片の出土をみた」という遺物が、報告されている。ほとんどが縄文時代中期前・中葉の土器であり、上ノ内貝塚とは大きく異なる内容であった。「何故この水田中に多く、これらの土器が含まれているのか不思議」という遺跡の成立について考えるために、藤本は尼ヶ砦遺跡の発掘調査を実施したのではないかとと思われる。尼ヶ砦遺跡に中世の城館があって、その築成により土砂が移動した可能性も記述されている。

「約60～80cmの水田黒色耕作土層の下に、砂層が縞状に堆積し、土器破片はその砂層中に最も多く出土し、下層は青色の粘土層に移行していた」と、藤本は記述した。近接した地点のボーリング調査は、標高4.87～4.27mを暗褐色の表土層、標高4.27～3.77mを青灰色の細砂層、標高3.77～2.37mを暗



第74図 釜神遺跡(「上ノ内貝塚下の水田中の遺跡」)出土土器

褐色のシルト層と報告^{註4}しており、堆積層の観察はほぼ一致している。砂層中に黒色土やローム土が混在しないことから、これは、台地上からの崩落土や客土とは見做し難く、標高4m前後の低地に形成された遺跡として、今後調査と検討が必要である。

第12表 君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚から検出された貝類

1. 君ヶ台貝塚斜面貝塚の貝類と個体数

種 類	貝層1	貝層5	
多板綱	ヒザラガイ類	1	1
腹足綱	カサガイ類	30	12
	アワビ類	1	1
	クボガイ	146	117
	パテイラ	2	3
	イシダタミ	8	10
	サザエ	5	0
	スガイ	13	5
	カワアイ	1	0
	レイシ	7	8
	イボニシ	4	8
二枚貝綱	イガイ	1	1
	ムラサキインコ	28	111
	カキ類	1	1
	シラトリガイ類	2	2
	イソシジミ	1	1
	ヤマトシジミ	1,034	1,020
	アサリ	1	1
	ハマグリ	29	4
ヌマコダキガイ	2	1	
合 計	1,317	1,307	

2. 君ヶ台貝塚における生息域から見た貝類組成

生息域	種 類	貝層1	貝層5
外海(岩礁)	ヒザラガイ類	1	1
	カサガイ類	30	12
	アワビ類	1	1
	クボガイ	146	117
	パテイラ	2	3
	イシダタミ	8	10
	サザエ	5	0
	スガイ	13	5
	レイシ	7	8
	イボニシ	4	8
	イガイ	1	1
	ムラサキインコ	28	111
内湾(砂泥)	シラトリガイ類	2	2
	イソシジミ	1	1
	アサリ	1	1
	ハマグリ	29	4
内湾～汽水	カワアイ	1	0
	カキ類	1	1
汽水	ヤマトシジミ	1,034	1,020
合 計		1,317	1,307

3. 上ノ内貝塚B貝塚の貝類と個体数

種 類	貝層I	貝層VI	
腹足綱	ベッコウガサ	11	2
	ヒメコザラ	2	0
	クロアワビ	2	0
	クボガイ	101	56
	コシダカガンガラ	22	6
	パテイラ	20	4
	イシダタミ	36	11
	サザエ	37	1
	スガイ	78	6
	カワアイ	1	0
	タマキビ	0	1
	ボウシュウボラ	0	1
	レイシ	38	8
	イボニシ	8	8
アカニシ	1	2	
二枚貝綱	イガイ	1	0
	ムラサキインコ	6	1
	マガキ	30	13
	イワガキ	1	2
	シオフキ	0	1
	シラトリガイモドキ	12	1
	イソシジミ	0	4
	ヤマトシジミ	16	19
	ウネナシトマヤガイ	0	1
	アサリ	25	2
	ハマグリ	35	20
オキシジミ	1	1	
合 計	484	171	

4. 上ノ内貝塚B貝塚における生息域から見た貝類組成

生息域	種 類	貝層I	貝層VI
外海(岩礁)	ベッコウガサ	11	2
	ヒメコザラ	2	0
	クロアワビ	2	0
	クボガイ	101	56
	コシダカガンガラ	22	6
	パテイラ	20	4
	イシダタミ	36	11
	サザエ	37	1
	タマキビ	0	1
	スガイ	78	6
	ボウシュウボラ	0	1
	レイシ	38	8
	イボニシ	8	8
	イガイ	1	0
ムラサキインコ	6	1	
イワガキ	1	2	
内湾(砂泥)	アカニシ	1	2
	シオフキ	0	1
	シラトリガイモドキ	12	1
	イソシジミ	0	4
	ウネナシトマヤガイ	0	1
	アサリ	25	2
	ハマグリ	35	20
オキシジミ	1	1	
内湾～汽水	カワアイ	1	0
	マガキ	30	13
汽水	ヤマトシジミ	16	19
合 計		484	171

*種名、配列は[奥谷 喬司編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会]による。 *陸産貝類は除いた。

*腹足綱は殻頂数、二枚貝綱は左右の殻の多い方の殻頂数を個体数とし、殻頂を含まない破片の種類についてはこれを1個体とみなした。

*生息域は、海進時期の那珂川流域周辺における想定である。

採集された土器(第74図)には、古くは縄文時代・前期(1~3)、新しくは弥生時代中期(17・18)も少量ずつが混じるが、主体は、縄文時代中期にある。縄文時代中期には、中期1「五領ヶ台式」(4・5)、中期2「阿玉台I b式」(6・7)、中期3「阿玉台II式」(8・9)、中期4「阿玉台IV式、大木8a式」(10・11)、中期5「加曾利E 1式」(12~14)、中期6「加曾利E 2式」(15・16)の各時期のものがあ、大きな破片も少なくない。石器には礫石錘が2点含まれていた。これは「加曾利E 2式」に伴ったものと考えられようか。

低地における生活が貝類を採捕していたとしても、よ

り標高の高い斜面や台地上に、貝殻等を持ち上げて投棄し貝塚を形成するようなことは考え難い。「加曾利E 1式」の住居跡が調査された^{しもはら}下原遺跡(第68図9)には貝塚が確認されておらず、中丸川流域における縄文時代中期の貝塚の形成は、「加曾利E 2式」が開始の時期とも捉えられるのであるが、これは台地上及びその斜面に形成された貝塚に限定されることを注意しておきたい^{註5}。

6. 君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚の貝類

君ヶ台貝塚斜面貝塚の貝層を構成する貝類について

第13表 君ヶ台貝塚第4号住居址内貝層の貝類

生息域	種 類	重量(g)	比 率
外海(岩礁)	クロアワビ	163	8.5%
	クボガイ	1152	
	パテイラ	62	
	イシダタミ	286	
	クロツケガイ	203	
	タマキビ	62	
	イボニシ	287	
	イガイ	291	
内湾(砂泥)	ハマグリ	51	0.6%
	オキシジミ	135	
内湾～汽水	マガキ	72	0.2%
汽 水	ヤマトシジミ	26,681	90.6%
合 計		29,445	100.0%

は、貝層1～6の各貝層についてサンプルが採取されて、個体数が報告されている[鴨志田2004]。そのうちサンプルの総個体数が1000点を超える貝層1と貝層5を抽出する(第12表1)。貝層1は「加曽利E2式古段階」、貝層5は「加曽利E3式古段階」のものである。種類の主体はヤマトシジミであり、これが全体の約80%、次いで、クボガイが約10%という占有率が大幅に捉えられる。他の貝層でも、この順位は変わらない。さらに、第2次調査で検出された4号住居址内貝層について、貝殻重量で算出された貝種組成^{註6}も、同じ順位を示している(第13表)。生息域で区分して見ると、君ヶ台貝塚においては、ヤマトシジミの汽水域、クボガイ等の外海岩礁域、ハマグリ等の内湾砂泥域という順位で、貝類の採集場所が推定されることになる(第12表2)。

上ノ内貝塚B地点貝塚の貝層を構成する貝層について、貝層I～VIの各貝層についてサンプルが採取されて、個体数が報告されている[藤本1980]。そのうちサンプルの総個体数が比較的多い貝層Iと貝層VIを抽出する(第12表3)。貝層Iは「加曽利E2式新段階」、貝層VIは「加曽利E3式」のものである。種類の主体はクボガイであり、全体の20～30%という占有率が大幅に捉えられる。順位は移動するが、ともにハマグリも少なくない^{註7}。生息域で区分して見ると、上ノ内貝塚においては、クボガイ等の外海岩礁域、ハマグリ等の内湾砂泥域、ヤマトシジミの汽水域という順位で、貝類の採集場所が推定されることになる(第12表4)。

さて、これらの中期貝塚について、貝種組成の特徴をより鮮明にするため、縄文時代前期中葉の貝塚と比較してみる。中丸川流域には、三反田蜆塚貝塚の3kmほど上流に遠原貝塚が位置している。第5次調査で検出されたJ7号住居跡には、前期中葉「森東1式」の貝塚が形成されていた。貝殻重量による貝種組成の比率では、ヤマ

トシジミが95.4%で主体を占め、マガキが2.9%、ハマグリが1.5%、その他が0.2%^{註8}。生息域で区分して見ると、遠原貝塚においては、ヤマトシジミの汽水域、マガキの汽水～内湾砂泥域、ハマグリ等の内湾砂泥域という順位になる(第14表)。外海岩礁域は極めて少なく、しかもクロアワビ、サザエ、イガイといった、貝殻が大きく肉量の多い貝種に限られている。貝殻が小さく肉量の小さなクボガイ等の貝種は含まれていない。一方、太平洋岸域に位置する和田ノ上貝塚[鈴木2008]において、遠原貝塚とはほぼ同時期の前期中葉「森東3式・植房1式」の第1貝層には、クボガイ等の外海岩礁域の貝類が、個体数の比率で37.1%、貝殻重量の比率で18.1%含まれている(第15表)。したがって、遠原貝塚における外海岩礁域の貝種は、選択によるものであることが明らかである。また、遠原貝塚、和田ノ上貝塚ともに、貝塚を形成した遺跡からの距離の遠近により、採取された貝類の生息域が順位されていると、全体的な傾向を読み取ることができる。

第14表 遠原貝塚J7号住居跡内貝層の貝類

生息域	種 類	重量(g)	比 率
外海(砂)	コタマガイ	15.3	0.1%
	チョウセンハマグリ	150.4	
外海(岩礁)	クロアワビ	181.5	0.1%
	サザエ	3.6	
	イガイ	173.9	
内湾(砂泥)	ツメタガイ	13.4	1.6%
	アカニシ	11.9	
	ハイガイ	1.2	
	シオフキ	6.1	
	ムラサキガイ	0.1	
	ワスレイソシジミ	5.3	
	マテガイ	0.3	
	アサリ	34.1	
	オキシジミ	78.2	
	ハマグリ	4897.7	
汽水～内湾	オオノガイ	40.8	2.9%
	カワアイ	0.4	
	マガキ	9132.5	
	ウネナシトマヤガイ	2.3	
汽 水	イシマキガイ	13.1	95.4%
	ヤマトシジミ	304428.0	
淡 水	カワニナ	2.6	0.0%
合 計		319192.7	100.0%

第15表 和田ノ上貝塚第1貝層の貝類

生息域	種 類	個体数	比 率	重量(g)	比 率
外海(岩礁)	ベッコウガサ	2	37.1%	2.8	18.1%
	クロアワビ	1		12.4	
	クボガイ	21		73.5	
	コシダカガンガラ	1		5.0	
	パテイラ	2		10.0	
	イシダタミ	9		16.7	
	サザエ	13		281.5	
内湾(砂泥)	ツメタガイ	1	27.3%	11.1	44.5%
	レイシ	6		42.0	
	ワスレイソシジミ	8		41.7	
	ハマグリ	21		891.3	
内湾～汽水	マガキ	18	13.6%	696.2	31.4%
汽 水	ヤマトシジミ	29	22.0%	130.8	5.9%
合 計		132	100.0%	2215.0	100.0%

君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚という中期貝塚の特徴として、貝塚を形成した遺跡からの距離とは相関せずに、外海岩礁域の貝類が、それも貝殻が小さく肉量の小さなクボガイ等が組成することを指摘する。君ヶ台貝塚においては、個体数とともに、おそらくは貝殻重量でも、内湾砂泥域のハマグリ等を超えて、これらが採捕されている。上ノ内貝塚においても、貝殻重量ではハマグリと逆転するにしても、これらの個体数が卓越しているのである。

7. おわりに

中丸川流域に形成された縄文時代中期の貝塚には、遺跡から遠い距離にある外海岩礁域のクボガイ等小さな貝類が比較的少量に持ち込まれていることを、特徴と捉えた。5.5 kmほど離れて立地を異にする君ヶ台貝塚と上ノ内貝塚は、汽水域と内湾砂泥域の貝類の利用に、立地の環境を反映した異なりを見せるが、外海岩礁域の貝類の持ち込みについては、全く共通している。これは、礫石錘に想定した外海漁撈〔鈴木 2005〕という活動に付随した現象として考えてみたい。小さな貝類が対象として採捕されるほどに、外海岩礁域という環境を訪れる機会が頻繁にあったのではなかろうか。

註1 高瀬正夫氏は、「那珂湊の考古マニアであった。藤本弥城先生が近所にお住まいだった関係から、よくその「お供」をしたそうである」〔飛田2014〕という。

註2 縄文時代後期の犬洗町大貫落神貝塚では、藤本弥城氏による調査で礫石錘が3点しか出土しておらず、「出土量は極めて少ない」〔藤本 1980〕と記述された。大貫落神貝塚の全体を対象とした井上義安氏による調査でも北貝塚から10点、南貝塚から7点に過ぎない〔井上他 2000〕。この状況を参考として、石光遺跡では、「加曽利E式」に伴うことを想定する。

註3 報告書〔鴨志田 2004〕の貝層実測図(第9・10図)には、縮尺に誤りがあるので注意されたい。

註4 調査名「13国補道改第13-03-808-0-0 53号地質調査業務委託」ボーリング名「No.13-6 (No.191-L)」調査位置「茨城県ひたちなか市部田野地内 一般国道245号」北緯「36° 21' 38.7"」東経「140° 34' 56.3"」の報告による。茨城県常陸大宮土木事務所のご高配により閲覧できた。

註5 周辺地域において縄文時代中期前葉の貝塚は大洗町吹上貝塚、中期中葉の貝塚は日立市南高野貝塚、水戸市吉田貝塚などが知られている〔藤本・鈴木 1994〕。

註6 君ヶ台貝塚第2次調査4号住居址内貝層については、鈴木が1985年頃に整理したデータである。

註7 貝刃に加工されたハマグリが、藤本弥城氏のデータに含まれているのかは明らかでない。含まれていないとすれば、ハマグリの占有

率はより高く考えられることになる。

註8 貝種組成の比率は、別稿〔鈴木 2014〕と僅かに異なる。それは、貝刃に加工されたハマグリを含めたこと、種類を同定できない貝殻を除外したことによる。

参考文献

- 井上 義 1969 『茨城県縄文文化研究資料集録Ⅰ』那珂川の先史遺跡刊行会
- 井上義安他 1976 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』那珂湊市文化財調査報告Ⅱ 那珂湊市教育委員会
- 井上義安他 2000 『大貫落神北貝塚』大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 大貫台地埋蔵文化財発掘調査会
- 井上義安他 2000 『大貫落神南貝塚』大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 大貫台地埋蔵文化財発掘調査会
- 大久保隆史 2012 『宮後遺跡 部田野西原遺跡 一般国道245号道路拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』第354集 財団法人茨城県教育財団
- 鴨志田篤二 1979 「石光遺跡」『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市 67頁
- 鴨志田篤二他 2000 『平成11年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (尼ヶ弥遺跡第2次調査)
- 鴨志田篤二 2004 『平成15年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第6次調査)
- 川崎純徳他 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市文化財調査報告第1集 勝田市教育委員会
- 鈴木素行 2005 「君ヶ台貝塚の土錘と石錘」『ひたちなか埋文だより』第22号 10-11頁
- 鈴木素行 2008 「富士ノ上遺跡における調査の歩み」『富士ノ上Ⅱ遺跡』公社第38集 ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 3-11頁
- 鈴木素行 2014 「柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利E式」の集落跡について」『平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 47-56頁
- 鈴木素行 2014 「画像で報告する遠原貝塚J7号住居跡」『ひたちなか埋文だより』第41号 6-8頁
- 住谷光男 1982 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和56年度版』勝田市教育委員会
- 住谷光男・川崎純徳 1990 『指洪遺跡群発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (下原遺跡第4次)
- 飛田英世 2014 「足崎・小鍋沢遺跡の縄文土器」『ひたちなか埋文だより』第40号 14頁
- 藤本 武・鈴木素行 1994 『久慈川・那珂川流域の貝塚 一藤本弥城先史資料整理調査報告Ⅷ一』公社第10集 財団法人勝田市文化・スポーツ振興公社
- 藤本弥城 1973 「尼ヶ弥遺跡」「上の内遺跡」『日本考古学年報』24(1971年版) 日本考古学協会 28頁
- 藤本弥城 1980 『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』(私家版)



1 柴田遺跡第4次調査区(東から)



2 柴田遺跡第4次調査区6トレンチ(東から)



3 足崎天神山遺跡第1次調査区(南東から)



4 下高井遺跡第5次調査区(北西から)



5 下高井遺跡第5次調査区2トレンチ(南西から)



6 堀口遺跡第16次・堀口館跡第1次調査区(北西から)



7 堀口遺跡第16次・堀口館跡第1次調査区1号住居跡(北東から)



8 小砂遺跡第4次調査区(南東から)



9 津田若宮遺跡第9次調査区(西から)



10 津田若宮遺跡第9次調査区1トレンチ(南から)



11 津田若宮遺跡第10次調査区(北東から)



12 津田若宮遺跡第10次調査区4トレンチ1号溝(北西から)

図版2 試掘調査(2)



13 枯松戸遺跡第4次調査区(東から)



14 西並木下遺跡第1次調査区(東から)



15 市毛上坪遺跡第14次調査区(南から)



16 赤坂遺跡第2次調査区(北西から)



17 勝倉若宮遺跡第4次調査区(南西から)



18 勝倉若宮遺跡第4次調査区空撮作業風景



19 市毛下坪遺跡第11次調査区(西から)



20 田彦古墳群第1次調査区(北から)



21 金上塙遺跡第8次調査区(南から)



22 田彦西原遺跡第1次調査区(東から)



23 平井遺跡第2次調査区1トレンチ(北東から)



24 平井遺跡第2次調査区2~4トレンチ(南東から)



25 平井遺跡第1号住居跡(東から)



26 堀口遺跡第15次調査区(南西から)



27 堀口遺跡第15次調査区遺構確認状況(南から)



28 堀口遺跡第15次調査区住居跡群(北から)



29 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡(南から)

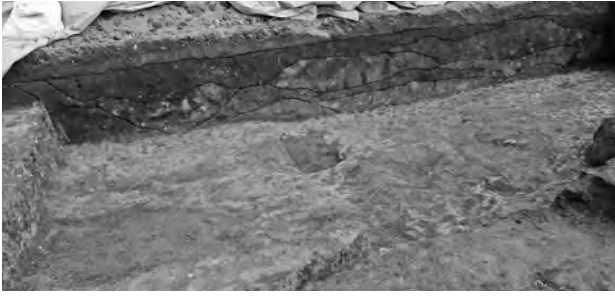


30 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡炉跡高杯出土状況(南西から)



31 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡炉跡(南西から)

図版4 本調査(2)



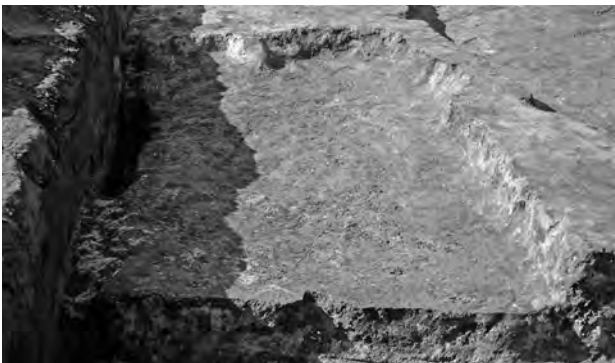
32 堀口遺跡第15次調査区第1号住居跡覆土断面(北から)



33 堀口遺跡第15次調査区第2号住居跡遺物出土状況(北東から)



34 堀口遺跡第15次調査区第2号住居跡(南西から)



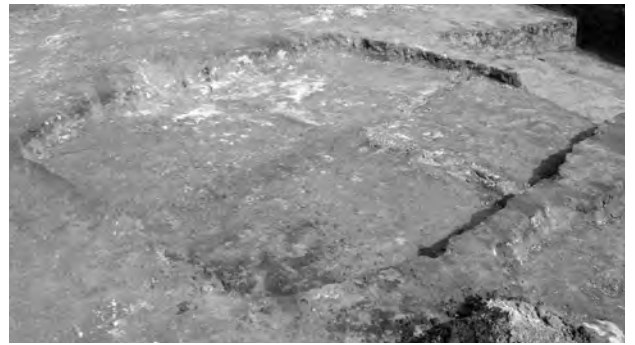
35 堀口遺跡第15次調査区第2号住居跡(南東から)



36 堀口遺跡第15次調査区第3号住居跡(西から)



37 堀口遺跡第15次調査区第3号住居跡竈(南から)



38 堀口遺跡第15次調査区第3号住居跡(西から)



39 堀口遺跡第15次調査区第4号住居跡遺物出土状況(南東から)



40 堀口遺跡第15次調査区第1号溝跡(南東から)

報告書抄録

フリガナ	ヘイセイニジュウロクネンドヒタチナカシナイイセキハクツツチヨウサホウコクシヨ
書名	平成26年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
編集者名	佐々木義則
著者名	鈴木素行, 稲田健一, 栗田昌幸, 佐々木義則
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根 3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	ひたちなか市教育委員会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10 番 1 号
発行年	2015 年 3 月 13 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
ホリグチイセキ 堀口遺跡	ひたちなか市 堀口	08221	004	36° 23' 26"	140° 30' 40"	25.0 m	201402	115 m ²	
シバタイセキ 柴田遺跡	ひたちなか市 中根	08221	101	36° 23' 1"	140° 32' 59"	24.0 m	201402	40 m ²	
トラザキテンジンヤマイセキ 足崎天神山遺跡	ひたちなか市 足崎	08221	057	36° 25' 27"	140° 34' 6"	30.0m	201403	28 m ²	
シモタカイイセキ 下高井遺跡	ひたちなか市 三反田	08221	001	36° 21' 40"	140° 33' 40"	21.0m	201404	312 m ²	
ホリグチイセキ・ホリグチヤカアト 堀口遺跡・堀口館跡	ひたちなか市 堀口	08221	004	36° 23' 13"	140° 30' 47"	24.0m	201404	67 m ²	
コスナイセキ 小砂遺跡	ひたちなか市 小砂町	08221	099	36° 23' 0"	140° 32' 42"	24.0m	201405	187 m ²	
ツダワカミヤイセキ 津田若宮遺跡	ひたちなか市 津田	08221	135	36° 24' 14"	140° 29' 14"	26.0m	201405	48 m ²	
カレマツドイセキ 枯松戸遺跡	ひたちなか市 中根	08221	102	36° 23' 1"	140° 34' 36"	24.0m	201405	39 m ²	
ニシナミキシタイセキ 西並木下遺跡	ひたちなか市 馬渡	08221	154	36° 23' 52"	140° 29' 52"	28.0m	201405	197 m ²	
イチゲカミツボイセキ 市毛上坪遺跡	ひたちなか市 市毛	08221	131	36° 21' 27"	140° 35' 49"	27.0m	201406	14 m ²	
アカサカイセキ 赤坂遺跡	ひたちなか市 赤坂	08221	227	36° 21' 27"	140° 35' 49"	23.0m	201406	23 m ²	
カツクラワカミヤイセキ 勝倉若宮遺跡	ひたちなか市 勝倉	08221	120	36° 22' 39"	140° 32' 1"	22.0m	201406	263 m ²	
ツダワカミヤイセキ 津田若宮遺跡	ひたちなか市 津田	08221	135	36° 24' 14"	140° 29' 13"	26.0m	201407	27 m ²	
イチゲシモツボイセキ 市毛下坪遺跡	ひたちなか市 市毛	08221	130	36° 23' 1"	140° 34' 35"	26.0m	201408	80 m ²	
タビココフンゲン 田彦古墳群	ひたちなか市 田彦	08221	026	36° 24' 59"	140° 31' 1"	28.0m	201410	40 m ²	
カネアゲハナワイセキ 金上埜遺跡	ひたちなか市 金上	08221	112	36° 22' 22"	140° 32' 4"	23.0m	201411	29 m ²	
タビコニシハライセキ 田彦西原遺跡	ひたちなか市 田彦	08221	017	36° 24' 41"	140° 30' 56"	27.0m	201411	76 m ²	
ヒライイセキ 平井遺跡	ひたちなか市 金上	08221	083	36° 22' 34"	140° 32' 27"	22.0 m	201412	53 m ²	

平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

平成 27 (2015) 年 3 月 13 日発行

編 集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発 行 ひたちなか市教育委員会

〒 312-8501 茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10-1

TEL 029-273-0111

公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒 312-0011 茨城県ひたちなか市中根 3499

TEL 029-276-8311

印 刷 弘美印刷株式会社

〒 312-0062 茨城県ひたちなか市高場 2577-1



再生紙及び植物油インクを
使用しています。